
五つ葉のクローバー

真桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五つ葉のクローバー

【Nコード】

N2819W

【作者名】

真桜

【あらすじ】

「私、五つ葉のクローバーがほしい。」と瑠夏は言った。劉生は、瑠夏の震える手をそっと握ると力強く頷で、「わかった、必ず探してくるから。」と約束した。移植を前に不安につぶされそうになる瑠夏のために、劉生は五つ葉のクローバーを探します。見つかる率100万分の1の確率の五つ葉を手に入れられれば、きっとうまくいく。そう信じて。

D e a r 瑠夏(前書き)

2作目の投稿になります。今回は、書きながらの投稿になるので
ゆっくり目になるかと思いますが、読んでいただけたら嬉しいです。

Dear 瑠夏

ひとつ目の葉は、キスを
ふたつ目の葉は、抱擁を
みつつ目の葉は、愛を
よつつ目の葉は、希望を
そして、
いつつ目の葉は、未来を込めて
おまえに、
五つ葉のクローバーをあげよう

瑠夏、

俺の愛も
俺の命も
俺のすべても
俺の希望も
そして、
俺の未来も
おまえに、
おまえにだけ捧げよう

瑠夏、

おまえは、
おれのすべてだ

愛してる……瑠夏

劉生は、新幹線の窓から流れる景色を眺めていた。手にはきれい

にラミネート加工された五つ葉のクローバーが握られていた。

気は急いでいる。

早く瑠夏に会いたい。

Dear 瑠夏（後書き）

はじめ、1話目は詩だけにする予定だったのですが、どうも字数が足りず・・・、伏線のような4行を足しました。できれば詩だけ読んでもらえれば・・・

劉生の受難（前書き）

穏やかに生きたいと願う劉生の期待を裏切って、トラブルが向こうからやってきてしまいます。ちよつと暗めの劉生のこれまでの話です。

劉生の受難

劉生^{りゅうせい}は、エレベーターから6階で降りると、西病棟の特別室を指した。

ナースステーションの前を通る時、中にいる看護師に軽く会釈をした。看護師は劉生を見ると、一瞬びくっと怯えた表情をしたが、すぐに笑顔を取り戻して会釈を返した。

初対面の人間に怯えた顔をされるのには慣れていた。

劉生はことさら気にすることもなく、ナースステーションを通り過ぎ、目的の病室に着いた。病室には石田興生^{いしだこうせい}の札がかかっていた。

劉生は、ノックすることなく病室のドアを開けると、中にいる人物に声をかけた。

「じいさん、元気か？」

ベッドの上で新聞を広げていた祖父の興生は、眼鏡の奥からしょぼつとした目で劉生を見ると、破顔して手をあげた。

「おお、劉生じゃないか。今日は遅かったな。」

「ああ、途中で女の子が絡まれているのに出くわしてしまった。手を貸せばまた面倒に巻き込まれると思ったからしばらく様子を見ていたんだけど、女の子がそのまま拉致られそうになったから・・・ほっとけないだろ？仕方がないから、まあ、いつもの調子で。」

少しアザになっている口元を人さし指で掻きながら気まずそうに言った。

「しょうのない奴だな。そんな顔を見せると、また静香しずかさんに小言を言われるぞ。」

「お袋の小言には慣れてるよ。気にしない。」

劉生は、部屋の奥の方から椅子を持つてくるとベッドサイドに置いて腰かけた。188?の長身に85?で厳つい体格の劉生が座ると、普通サイズのパイプ椅子が重みに耐えかねて悲鳴をあげ、軋んだ。

祖父に向けているような笑顔で柔らかな顔をすれば、劉生は、格好いい精悍な風貌をしている。だが、短く刈り込まれた明るい茶色の髪、剃ってもいないのに薄くてみえにくい眉毛、一睨みで周りにいる奴らを震えあがらせる眼光鋭い一重の目、そして滅多に笑顔を見せない無愛想な顔が190?近くある巨体にくっついているとなると、初対面の人間が怯えて避けなくなるのは当然のことである。

劉生は、自分の風貌のせいで、これまで何度となく意に染まらないトラブルに巻き込まれた。喧嘩をふっかけられたり、何もしていないのに突然、女の人に悲鳴をあげられたり、いきなり小さな子供に泣かれたり・・・、警察に職務質問を受けた事もある。その度に穩便にその場をやり過ごそうと努力するのだが、そのほとんどは徒労に終わる。高校生になったばかりの頃は、そんなことが幾度もあったので、いつそ、家に引き籠ってしまおうかと考えた事もあるくらいだった。

だが、劉生が拗ねて学校を休もうとすると、母親の静香は口に出

して反対はしないが、とにかく悲しそうな顔をする。

劉生が小学校の頃、八つ当たりで、「なんでこんな顔に産んだんだ。」と責めたのを、ずっと覚えていて、劉生が引き籠ろうとする時、「ごめんね、母さんが悪いのよね。劉生の好む顔に産んであげられなくて。」と呟くのだ。

そう言われると、さすがの劉生もバツが悪くなり、1日だけは部屋にこもるのだが、平静を取り戻してまたいつもの生活に戻るようになる。

結果、劉生がトラブルに巻き込まれるのを防ぐ手立ては、ない。

特に多いのが、その風貌ゆえに一方的に因縁をふっかけられることだ。

劉生は、小さい頃から祖父に古武道を習っている。祖父の教えは、『護身』。

己の心身の鍛練と護身のために稽古するのだという事を劉生はずっと守ってきた。だから技を使って相手を攻める事は、絶対にしない。相手から攻撃を受けた時には、足さばきや応じ手で“いなす”だけ。

それを徹底していると、相手が勝手に疲れて倒れてくれる。古武道を習うための基礎体力は有り余るほど持ち合わせている劉生に、巷のヤンキーの体力がついていけないわけがない。

結局、騒ぎを聞いて大人や警官が駆けつけてくる頃には、劉生以外は地面にへたり込んで、動けなくなっている。

だが、しょせんヤンキーと呼ばれる奴の多くは卑怯者である。警察で尋問を受けると、劉生が古武道を嗜んでいる事を逆手にとつて一方的に暴力をふるわれたと訴える。実際に奴らの顔や体には喧嘩でついたと思われるアザがいくつもあるのに、劉生は無傷なのだから、警官は信じてしまう。

目撃情報もそれに追い打ちをかける。

劉生だつてまだ修行途中なので、うまくかわしきれずに相手を傷つけることもある。だが、そのすべてが不可抗力なのだ。しかし、劉生が相手の攻撃をかわし、応じ手で次の一手を封じ込めているのを見た通行人からすれば、一方的に劉生が仕掛けているようにしか見えないらしい。

そうなると、劉生は一方的に警察から指導を受けることになってしまう。はじめは、事の次第を否定していた劉生だが、何度か補導されるうちに、「またお前か」と先入観で尋問にあたる警官に嫌気がさして、無言のままにいる事が多くなった。

家族は、劉生の言い分を全く聞こうとはせず、一方的に劉生が悪いと決めつけて、事が大きくなるまいようにと画策をした。

父親は、なにかにつけて優秀なふたりの兄を持ち出して比較して嫌味を言う。そして、揉め事は速やかに金と権力で解決すればいいと考え、実行してきた。劉生は、そんな父親が大嫌いだ。自分の価値観でしか人を判断できず、価値観に合わない人間を自分の周りから排除し続けてきた父親に対して嫌悪しか抱けなかった。おそらく父親とは、一生、平行線のままだろうと劉生は思っていた。

劉生の母親は気の弱い人で、夫に逆らう事をしたことがない。劉生がトラブルに巻き込まれると、ただひたすら夫と揉め事の相手に謝り続けた。

自分の息子の味方をするのではなく、一方的に非を認めて謝る母親を見て、劉生はやるせなかつた。どうして母さんは、母さんだけは自分の味方をしてくれないのかと悔しさに枕を濡らしたこともあったが、今はもう諦めている。たとえ母親が味方をしてくれなくても、自分が母親を嫌いになることはない。

劉生は、自分が幼い頃、病弱で入退院を繰り返していた時に、ずっと傍に付き添って子守歌を歌ってくれた母親の記憶を鮮明に覚えていた。

だから、できれば母親を悲しませたり、苦しませたりする事はしたくないと思っていた。

ほんとに、何でもこうからトラブルがやってくるのか・・・

劉生はため息をつた。そんな劉生の様子を興生は目を細めて見ていた。

この心優しい孫が、周りからよく思われていない事に母親以上に心を痛めていたのは、興生である。

劉生は幼い頃、体が弱くて病気がちだった。青白い顔をして床に臥せている劉生を嫁の静香が一心に看病を続け、身が細っていくのを見かねて、心身を鍛えるためにと古武道を教えたのは、自分だ。

興生は、劉生に武道は自分の身を守るためにあるもので、決して自分から攻撃していけないと教えてきた。劉生はそれを忠実に守っ

ていた。興生の見る限り、劉生が武術を使って人を攻撃することなどあり得なかったのである。

しかし、世間はそうは見ない。どんなに劉生が、相手の攻撃をいなし疲れさせるために防御の型を使っているだけなのだと主張しても、繰り出される拳や蹴りをはらう時に、不可抗力で相手につけたあざを複数認めると、劉生が攻撃をしてきたものだとして誤解した。その誤解を解くのは簡単なようで難しい事を興生はわかっていた。

もうひとつ興生が頭を痛めているのは、劉生の父の態度だ。残念なことに自分の息子は劉生に対して、鼻真目に見てもうまく接し切れているとは言い難い。母親に似て大人しいふたりの兄にくらべて、容姿も性格も父親似の劉生を疎むような言動をする。

あいつにとつては、合わせ鏡を見ているようで歯がゆいのだろうな・・・周りに対して劉生がうまく立ち回れているとは自分も思えないから、その気持ちはわからないでもない。だが、一体どこであるようなやり方を覚えてしまったのか、劉生の父、泰生たいせいの言動は、興生も眉をひそめてしまうものだった。

ただ、自分の権力を使い、金で解決しようとするなど、多忙なことを割り引いてもいいやり方だとは思えない。なにより、何故、劉生の言い分を信じてやるうとはしないのか。

興生は深く嘆息した。

劉生は、いつの間にか椅子を立って窓の外を眺めていた。劉生の顔に浮かぶ影を興生はやるせない思いで見た。

劉生の優しさをわかってくれる友ができるといいのだが・・・

興生がふたたびため息をついた時、軽いノックのあと、ドアが開いた。

出会い

入ってきたのは静香だった。

静香は興生に向かって微笑みかけて、それから窓辺に立っている息子を見た。開くドアに反応して劉生は静香の方を向いていた。劉生の口元のアザを見て、静香の顔がわずかに歪んだ。

「劉生、あなたは、また・・・」

静香のことばに劉生は応えず、また窓の外に顔を向けた。静香もそれ以上話を続けようとはしない。ベッドサイドに置かれたテーブルの上に持ってきた鞆のなかみを取り出していた。

「お義父さん、今日は筑前煮を作ってきたんですよ。」

「あ、ああ、いつもすまないね、静香さん・・・」

興生は、ちらっと劉生を見、それから何事もなかったかのようにテーブルの上に料理の詰まった容器を広げる嫁に戸惑いの表情を向けた。

劉生は、窓の外を眺めながらふたりのやり取りをぼんやりと聞いていた。

それまで諦めのまじった無気力な顔で窓の外を見ていた劉生の目に好奇の光が宿った。

窓の外には、病院の中庭が見えた。その中庭に植えてあるケヤキ

の木の幹を両手いっぱい広げて女の子が抱きしめていた。

女の子は、中庭の木々を渡り歩いて、どの木も同じように抱きしめた。遠目に見てもその子の表情は楽しそうだった。まるでダンスをしているように木々の間を行き来するその子から、劉生は目が離せなくなっていた。

彼女は、大きなニット帽を目深にかぶり、真冬に着るような長めのダッフルコートを着ていた。コートの裾からみえるズボンがパジヤマなようなのでこの病院に入院している子だろう。

あの子はいつたい、何をしているだろうか。

ひとつひとつの木をゆつくりと、まるで愛しむように抱きしめている彼女。遠目でその表情がよく見えなかったのだが、劉生には彼女が笑っているように見えた。

木々が彼女の抱擁に応えるかのように葉を揺らし落ち葉を降らせる。いったん抱きしめていた木から離れると、両手を広げて、嬉しそうに落ち葉を全身で受け止めていた。

木が冬の眠りに就く前に、彼女に挨拶している……って、何、ファンタジーなこと考えているんだ、俺？

劉生は、自分らしくない考えにかぶりを振った。

でも……俺も

俺もあんなふうに抱きしめられたいな……あの子に。

ふと自然にそう思った後、かあつと顔が熱くなる。自分の心にわき出た気持ちにうろたえた。

なっ、なに考えてんだ。今日の俺は、変だぞっ。

劉生が平静を取り戻そうと慌てていた時、突然、彼女が駆けだした。時折後ろをふり返りながらこちら側の病棟に向かっていった。駆けてくる彼女の顔は笑っていた。ぬける様に白い肌にいたずらっぽく輝く大きな目は、6階からでもわかった。

劉生は、ふり返る彼女の視線の先を辿った。彼女を追いかけているのは看護師のようだ。

病室を抜け出してきたのか？つかまつたら説教されるんだろうな。

劉生の顔が自然にほころぶ。

もっと、彼女を見ていたい。

だが、劉生の願いはむなしく彼女は病棟の中に消えて行った。劉生は、残念な気持ちになる自分に驚いた。ほんの少しの間の出来事なのに、自分の目を捉えて離さなかった彼女の存在がこんなにも気になるなんて。

まだあの子を見ていたい。

劉生はそう思うと居てもたってもいられなくて、興生の病室を飛び出していた。

「劉生、どうした。」

「なんでもない。今日はもう帰る。またな、じいさん。」

興生の声に、ふり向くことなく声だけで答えた。

劉生は、急いで階段を下りると、彼女が入った中庭に面した病院のはき出し口をめざした。大股で足早な劉生をすれ違う人が避ける避けながら自分に向けられる怯えた視線に、いつもは平気な顔をして心の中では傷ついていた劉生だが、この時は何も気にならなかった。とにかく早く目的の場所に行きたかった。

劉生は中庭へのはき出し口に着くとあたりを見渡した。目深にかぶったニット帽とダツフルコートだ。絶対に目立つはず。そう思っで見回すが、会いたい人の姿は見えない。劉生は諦めず、搜索範囲を広げた。中庭の方も覗いてみた。だが、さっきの光景は幻だったのかもしれないと思えるほど、彼女の痕跡はなかった。

夢中で探しているうちに、待合室のほうまで足をのばしていたらしい。劉生が急きながらあたりを見回し、目深にニット帽をかぶっている他の子に声をかけ、その子に驚愕の表情を向けられているのを待合室の人たちが身を竦め眉をひそめて見ていたのに、劉生は気づかなかった。

誰かが警備員を呼んだ。

彼女がいらないのを確認して劉生が探す場所を変えようとした時、後ろから呼び止められた。

「すみませんが、ちょっと来てもらえますか？」

腰の警棒に手をあてながら警備員が言った。

「は？どうして？」

劉生は彼女を探すのを中断されてムツとして声を荒げた。

「他のお客様からあなたの行動がおかしいと苦情がありました。」

警備員はぎろりと劉生を威嚇しながらそう言った。

「俺の行動がおかしい、だって？俺はここで人を探していただけだぞ。」

「関係のない女の人に声をかけたとか。その人がとても怯えているからと言われたのですが？」

警備員はいつそう威嚇するように劉生との距離を詰めた。

「あれは、人違いしただけだ。ちゃんと謝った。」

劉生は、またかと思った。おそらく他の人間が同じことをやってここまでの騒動には決してならないだろう。劉生だからこうなるのだ。

劉生は、苛立ちを隠してそのまま立ち去ろうとした。

「いや、このまま病院内をうろつかれては困ります。」

「何だって？俺は、ここに身内の見舞いにきたんだ。それも許されないのか？」

行く手を塞がれて無理やり自分を連れて行くとする警備員に、
たまらず劉生は怒鳴った。

「ここでは周りの目があります。言い訳は事務所で聞きますので、
一緒に来ていただけますか？」

今度は、警備員と劉生のやり取りを受け付けの奥で見っていた背広
を着た50代の男が、わざわざ待合室まで出てきて声をかけてきた。

どうあっても自分を悪者にしたらしい。

劉生は、病院側の理不尽な扱いに怒りを表に出さないようにする
のに苦労した。ほんとうは怒鳴ってもよかったかもしれない。だが、
そんなことをすれば入院している興生や静香に迷惑をかけることにな
る。

劉生は、諦めて背広の男についていこうとした。

「失礼ですが、何かあったのですか？」

見覚えのある声が劉生の後ろから聞こえた。

「これは、石田様。お父上のお見舞いにいらしたのですか？」

背広の男が劉生の後ろの人物を見て、さっきまでの険呑とした顔
は何だったのだと言いたくなるほど破顔した。

「ええ、そうです。ところで、息子が何かしたのですか？」

泰生が放った意外なことばに背広の男が青くなった。

「えっ、この方は・・・その、石田様のお子様なのですか？」

「ええ、末の息子ですが。」

「そっ、そうでしたか。いや、たいへん失礼しました。どうやら誤解があったようで・・・。」

背広の男は気まずそうにそう言うと、警備員に目配せをして下がらせた。それからおもむろに劉生のほうを向くと、馬鹿丁寧に話しかけてきた。

「先程は警備の者が失礼しました。お父様と一緒におい様のお見舞いにいらしていたのですね。」

この変わり身の早さには恐れ入るよ。あの警備員と同じように俺を不審者扱いしたのは誰だ。

背広の男の話に伝えることなく、劉生はその場を離れた。

「それでは失礼します。」と泰生が男に声をかけるのを背中であきながら、劉生は病院の出入り口に向かった。

「待て、劉生、どこへ行く？」

泰生が呼び止めた。劉生は足を止めると肩越しにふり返って、

「帰る。じいさんの見舞いはもう済ませた。」

と言つと、病院の外に出て行つた。泰生は、出て行く劉生に一瞥するとエレベーターホールの方へと向かった。

落ち葉のシャワーの中で（前書き）

劉生と瑠夏が初めて出会います。劉生は、瑠夏にほぼ一目ぼれなのですが、自覚はまだありません。だけど、初対面の時から瑠夏に対しては優しく接しているのです、この後そんな劉生に瑠夏は次第に心を開いていきます。

落ち葉のシャワーの中で

彼女を見つけた日から、劉生は、興生の見舞いに病院を訪れるたびに病室の窓から中庭を眺めるようになった。だが、見つけた日の翌日から1週間、彼女の姿を見つucker事はできなかった。

もう一度会いたいのに、もう、あの子には会えないのだろうか。

劉生がため息をつきながら窓の外を見ているのを泰生は不思議に思った。

「劉生、毎日、何を見ているんだ？」

好奇心に負けて、とうとう興生は劉生に問いただした。今日、静香はまだ来ていなかった。静香がいたら、劉生は絶対にしゃべってはくれないだろう。劉生とふたりきりだから興生は聞いたのだ。

「べつに、ただ窓の外を眺めているだけだけど。」

劉生の嘘に興生はふっと笑った。

「劉生、嘘をつくならもつとまじな嘘をつかんな。そんなすぐばれる嘘をついても私は納得せんよ。この1週間、毎日、ここへ来ると私への挨拶もそこそこに窓辺に立って、今と同じように中庭の方を探るように見ている。それも30分以上だぞ。気づかない方がおかしいわ。」

興生のことばに劉生は耳まで真っ赤になった。

自分はそんなにすぐばれるほど、熱心に中庭を見ていたのだろうか。それも30分以上だって？

ことばに詰まって赤くなる孫の姿に興生は、探しているのは女の子か？と、ピンときたが、それを目の前の大男に伝えたら、この男は、ほとぼりが冷めるまでは見舞いに来るのをやめてしまっだろうと思ひ、黙っていた。

劉生は、興生から指摘を受けたことで居心地が悪くなった。興生は何も言わなかったが、無言である事が自分に答えることを要求している気がした。

これ以上ここにいたら、もっとじいさんに問い詰められてしまう。そんなことになったらたまらない。今日はもう、帰るか。

劉生が窓を離れようとした時、眼下に紺色のダッフルコートが映った。

えっ

劉生は、窓から離れようとしていた体を元に戻して、食い入るように外を見た。

紺色のダッフルコート。目深にかぶったニット帽。間違いない、あの子だ。

1週間ずっと探していた彼女が、前と同じケヤキの木の下に立っていた。劉生は、やっと見つけた嬉しさを隠しきれず、思わず笑みを漏らした。

「やっと見つけた。そのまま、そこにいろよ。」

心の中で呟いたはずのことは、知らず知らずのうちに声になっていたらしい。劉生のことをばを興生は耳ざとく聞いていた。

「じいさん、今日は、もう帰る。また明日来る。」

はやる心を抑えて劉生はそう言うと、慌てて病室を飛び出した。

興生は、にやっと笑うとベッドから降り、窓辺に立った。

どうやら天は、劉生と私に味方をしてくれたらしい。劉生は探していた子を見つけ、そして私はその子をこの目で見る事ができるのだ。いや、愉快だ。どれ、劉生の待ち人はどんな子かな？

興生は目をこらして窓の外を見た。

中庭には人影がなかった。秋の深まる夕暮れ時、肌寒くなったそこに人影がないのは当然のことのように思えた。風にケヤキやイチヨウの木々が揺らされ、落ち葉が舞っていた。

なんだ、いないではないか。

興生はがっかりした。窓の外には劉生の待ち人が見られると思っていたのに期待を裏切られたのだ。

私の思い違いだったのか？

興生が短く息を吐いてベッドに戻ろうとした時、中庭の奥のケヤキの影から少女が出てきたのを目の端に捉えた。その子は、どうや

ら木の幹の裏側にいて見えなかったらしい。

あの子か？

興生は先ほど立っていた場所に戻ると、少女の姿を追った。遠く
てよく見えないが、少女は、ニットの帽子を深くかぶってマスクを
していた。紺色で厚手のダッフルコートを着ていたが、少女が華奢
な体格である事は遠目にもわかった。

劉生とは対照的に、華奢な少女だ。劉生が抱きしめれば折れてし
まいそうだが、あいつはその加減できるのかいな？

興生の顔は自然とほころんだ。彼女どころか、同性の友人がいる
様子さえ見えなかった劉生が、異性に興味を持つなんて予想外の事
だった。

私は、劉生に友だちができればと思っていたが、彼女でも大歓迎
だ。

興生が病室で孫の未来を勝手に妄想していた時、劉生は、階段を
4、5段越しに飛び降りるように下り、非常階段を抜けて中庭に面
したはき出し口に向かっていた。劉生が中庭への出入り口に着いた
時、時間は5分と過ぎていなかった。

はやる心を抑えながらはき出し口から中庭にでると、奥のケヤキ
の方へと進んだ。

ざあつと葉が舞う音がして中庭中に落ち葉が降り注いでいた。背
の高いケヤキやイチヨウの葉が後から後から舞い降りてくる。

劉生は、落ち葉のカーテンをかきわけて歩みをすすめた。ふと、劉生の足が止まった。劉生の視線の先でダツフルコートのお友が上を見上げて両手を前へ突き出した。ゆつくりと目を閉じる彼女の顔や掌に落ち葉が舞い落ちてきた。何度も頬をかすめて落ちる落ち葉の感触を楽しむように、彼女は立っていた。

まるで落ち葉のシャワーを浴びているみたいだな。

劉生は、束の間、目を細めて彼女の様子を見ていた。

彼女がゆつくりと目を開き、名残惜しそうに手を下した。マスクで覆われていて細かな表情はわからなかったが、笑った、と劉生は思った。ほんの少しだけ目じりが上がった横顔が息をのむほどきれいだった。

もっと近くで見たい。

無意識に足が動く。

かさっ

枯れ葉を踏む音に、はじかれたように彼女がこちらを見た。見られる心づもりのないまま見つめられて、劉生は慌てた。顔がひとりでに赤くなる。見つめられているのに耐えられず顔を背けた。

彼女には、会えた。今日はそれで良しとしよう。もう、戻った方がいい。

劉生はそう思い、踵を返そうとした。

「待つて。」

やさしい声に呼び止められ、体が動きを止める。思いがけず呼び止められたことで胸が早鐘を打つ。ふつふつと湧き上がってくる嬉しさに、自然と顔が緩む。だが、依然として彼女を見る余裕はない。

ふり向いてはくれなかったが、歩みを止めて全身でこちらを窺っている彼に、彼女はゆっくりと近づいた。

かさっ、かさっ

自分に近づいてくる落ち葉の音に、劉生の胸は高鳴った。手を伸ばせば届く距離まで彼女は近づいてきた。

「ねえ、あなたって、ヤンキー？」

はあ？

突然、突拍子もない質問を受けて劉生は思わず彼女を見かえした。怯えではなく、好奇心に満ちたその瞳に劉生は戸惑った。ことばが出ない。

黙っている劉生に、彼女はもう一度同じ問いをした。

「ねえ、あなたって、ヤンキーなの？」

「違う、俺はヤンキーなんかじゃ、ない。」

劉生が苦笑しつつ否定すると、彼女は眉をあげて驚きを表した。

「うそ、だって、あなたは目つき悪いし、眉薄いし、体でかいし、声も怖いし、やっぱりヤンキーでしょ。」

なんだ、その断言は。

彼女のことに呆れはしたが、あまりにもあっけらかんと決めつける彼女のものは、いつも他の人間から受けるものとは違っていた。そこに悪意は感じられなかったので、劉生は自然に柔らかな表情になっていた。

彼女は、その表情を見て、

「違っの?」

と聞いた。

「違っ。」

自分でも驚くくらい素直にことばが出た。

「そうなの?でも、その顔じゃ、よく間違えられるでしょ。」

いたずらっぽく聞く彼女に、劉生も軽く返した。

「そうだな、よく間違えられるよ。でも、はっきり本人向かってヤンキーかって聞いてきたのは、君が初めてだけだね。」

「だって、こんなにヤンキーの代名詞みたいに凄味のある顔の人、初めて会ったから。」

彼女が微笑んで劉生を見た。劉生は、苦笑いをする、

「初対面の奴にそんな失礼な事を言つて、もし、俺が本当にヤンキ―だったら、今頃君は因縁つけられているんだぞ。自分が大変な目に合うとは思わないのか？」

と聞いた。

「さつきは、思わなかった。だつて、あなた、一見すると怖いけど、黒いオーラは出ていなかったもの。だから、そう聞いても大丈夫だつて思つていた。」

「そんなこと言われたのは、初めてだ。」

劉生が言つと、彼女は、少しためらつた後、口を開いた。

「もしかして・・・嫌な思い、いっぱい、した？」

自分を気遣う彼女に劉生は胸が熱くなった。これまでは嫌悪や恐怖の感情をぶつけられる事はあつても、気遣われた事はなかった。

彼女の気持が素直に嬉しい。

劉生は無意識にそう思うと、自然に軽い口調で話していた。

「そうだな、嫌な思いをした事がないつて言つたら大嘘つきだつて言われるくらいのは、あつた。何もしていないのに泣かれたり悲鳴をあげられたりすることもあつたけど、人通りの多い道を歩いていると、みんなが避けてくれるから歩きやすいつてメリットもある。

るかな。」

「へえ、そうなの？それじゃあ、混雑しているところに行く時にはついてきてもらおうかな。私、人ごみって苦手だから。」

「ああ、いいよ。必要な時には、いつでも言うて。」

劉生がそう言うのと、彼女は声をあげて笑った。

「なに、俺、何かおかしい事、言った？」

劉生が戸惑っていると、彼女は目じりの涙を拭きながら、

「だって、私たち、お互いの名前も知らないよ？もちろん連絡先もそれなのに、必要な時にいつでも呼んでって言われてもどうしたらいいかわからないのって思ったら、おかしくなって。」

大きな瞳が見えなくなるくらい破顔した彼女に、劉生もつられて笑った。

「じゃあ、お互いに自己紹介すればいい。そうすれば名前も連絡先も聞くことができるだろ。俺は、全然構わないよ。それじゃ、まず俺からな。俺は、石田劉生。高2。ここへは入院している祖父の見舞いに来ているんだ。じいさんはしばらく入院していると思う。俺は、じいさんが寂しがるといけなから毎日見舞いに来ているんだ。じいさんは、6階の西病棟の特別室に入院しているからすぐわかるよ。君は？俺に自己紹介してくれる？」

「これって、新手のナンパじゃ、ないよね？」

ナンパだと思われて劉生は驚いた。

「ちっ、違っつ。俺はナンパなんかしたこと、ない。」

劉生が慌てて否定するのを見て、瑠夏はぶっと吹き出した。

「わかった、わかった。ナンパじゃないって、信じるよ。私は、本橋瑠夏^{はしるか}。2か月前から5階西病棟の内科に入院している。よろしくね。」

瑠夏が抵抗なく自己紹介してくれたのに、劉生はほっとした。

「ああ、よろしく、本橋さん。」

劉生が右手を差し出すと、瑠夏は驚いたが、笑って自分の右手を出して握手した。

「瑠夏でいいよ。名字で呼ばれるとむずがゆくなっちゃう。それに、何だかよくわからない感じだけど、あなたは信用できそうって、本能がそう囁くから、お互い名前呼び合おうよ。私は、あなたのこと劉生って呼ぶね。いい？」

「うん、それでいい。」

こんなに自然に誰かと話ができるなんて、どれくらいぶりだろうか、劉生は思った。瑠夏との会話は楽しくていつまでも話し続けられる気がした。

しかし、劉生の高揚感とは裏腹に、瑠夏の表情は次第に冴えなくなっていた。顔色が悪くなってきた。瑠夏は何も言わないが、

体が小刻みに震えだしている事に劉生は気づいた。

「寒い？中に戻ろうか？」

劉生が聞くと、瑠夏は頷いた。瑠夏がうなずくのに合わせて、ふたりではき出し口に向かう。が、何歩もいかないうちに、瑠夏の体がぐらりと揺れてバランスを失った。

「危ないっ」

瑠夏は、落ち葉の上にダイブすると思っていたのに、がっしりとした腕に抱きとめられていた。

再発（前書き）

この話は、瑠夏が入院することになったたいきさつを書きました。シリアスな話になっています。

再発

「……………骨髄穿刺の結果、白血球細胞の増加が認められました。……………再発です。」

抑揚のない声で、主治医の服部先生はっとりが言った。先生が感情を出さないように話す時は、あまりいい結果でない事はわかっていた。だから、先生がこれまでの検査結果を説明し始めた時から、ああ、そうなのかと頭の中ではわかっていた。だが、わかる事と受け入れられる事は、別なのだ。瑠夏は、先生が告げた事実は、到底、受け入れられるものではなかった。

瑠夏は拳の腱が白くなるくらい強く握りしめた。後ろで、母親の啓子けいこが、はっと息のむのがわかった。瑠夏は、後ろを振り向けなかった。啓子の顔を見れば自分の心が折れてしまう。

それほど告知された内容は、瑠夏を打ちのめすものだったのだ。

白血病細胞の増加……………再発……………

瑠夏は頭が真っ白になった。

小学校6年の時に急性リンパ性白血病を発病した。

初めは風邪だと思ったのだ。咳や鼻水が止まらず、微熱がなかなか

か下がらなかった。症状が出て1週間して近所の小児科で診てもらったら、やっぱり風邪だと言われた。薬をもらって飲み、学校も休んで安静にしていたら少し良くなったので、やっぱり風邪だったのだと思った。もともと多少の具合の悪さや発熱ぐらいでは登校していたので、4日後からは学校に行った。

しかし、登校は長続きしなかった。ふたたび風邪の症状がぶり返した。今度は薬を飲んでも症状は改善しなかった。体の倦怠感もひどくなり、口内炎がひどくて食事もままならなかった。

しばらく家で安静にしても一向に良くなる気配がないので、総合病院で診てもらおう事にした。

その頃から、体に異変が起きた。どこにもぶつけないのにつづいた跡が手や足に見られるようになった。そして、なぜか鼻血が出やすくなった。鼻のかみ過ぎだと思い、鼻水が出てもあまり強くかまないように気をつけたが、ちょっとした拍子に鼻血が出てきた。

総合病院の小児科で、これまでの風邪の症状や体の異変を告げると、血液検査を受けるように言われた。

「大丈夫かしら。瑠夏、肺炎になったかもしれない。入院することになると、お母さん、仕事のシフト調整しなくちゃいけないわね。」

「え〜。入院するの?」

検査の結果を待つ間、啓子がそう言うのを聞いて、瑠夏は、抗議の声をあげた。

「もしかしたら、よ。もしもの時の事も考えないといけないでしょ。」

大きなため息をついて、啓子は検査室の方に目を向けた。

「もうそろそろ結果がわかる頃かしら。」

啓子がそう言った時、

「本橋さん」

と、検査室の受け付けに呼ばれた。啓子は、はい、と返事をして受付に行き、検査結果を受け取ると小児科の窓口へと向かった。瑠夏は啓子の後について言った。

小児科の前でまたしばらく待つて、名前を呼ばれた。診察室に入ると、担当の先生がずり落ちた眼鏡を指であげながら、緊張した面持ちで話した。

「血液検査の結果、白血球の増加が見られました。その数値が3万を超えています。血液検査だけでは詳しい事はわからないので、血液内科でもっと詳しい検査を受けてもらいます。今、紹介状を書きますので、そのまま血液内科の受け付けに出して下さい。」

「……………どういことですか？」

啓子は、異様に早くなる鼓動を意識しながら医師に聞き返した。

「……………まだ確定ではありませんが、瑠夏さんは白血病の疑いがあります。」

「はっ……けっ……びょう……?」

心臓が早鐘を打ち頭が殴られたようにがんがん響く。啓子は医師のことばをのみ込む事ができなかった。医師の口から話されることばが、ただの記号にしか聞こえない。

先生は、何といているのだろうか?ちゃんと私にわかることばで説明して。

啓子の目は焦点を合わせていなかった。まわりの景色も先生の顔もぼやけていた。

「本橋さん、大丈夫ですか?」

「お母さん……」

医師の心配する声に重なって、心細そうな瑠夏の声が聞こえた。啓子の瞳は、瑠夏の声に反応して焦点を合わせた。思考回路が動き出すと、啓子は大きく深呼吸をして平静になるうとした。

「……大丈夫です。わかりました。血液内科に行ってみます。」

啓子は小児科の診察室を出ると、早足で血液内科へと向かった。

瑠夏が白血病だなんて、何かの間違いよ。そんなこと、あるわけない。

だが、血液内科での検査の結果で、瑠夏は急性リンパ性白血病と診断された。

すぐに手続きが取られ、瑠夏も啓子もそして家族も気持ちの整理がつかないまま、入院して治療を受けることになった。

初めての発病だった瑠夏は、幹細胞移植かんさいぼういしよくではなく、化学療法を受けることになった。治療の副作用で髪の毛が抜けたり、吐き気や痙攣けいれんがおこったりしたが、瑠夏は耐えた。この治療を頑張れば、また元の生活ができるかと期待した。元の生活に戻りたいという強い願望が瑠夏を支えた。

家族もまた、あまりにも突如な告知に動揺していた。瑠夏と同じように支えが必要な状態だったが、懸命に治療に臨む瑠夏の態度は、啓子と家族の支えになった。啓子は、ともすれば折れそうになる自分に叱咤して、瑠夏の看病にあたった。当然のように仕事を辞めた。健気に治療に耐える娘の傍にいて励ましたいという思いしか、なかった。

病院と家庭の往復で心身ともに大変な啓子に、夫の誠二せいちとふたりの姉、瑠維るゐと瑠奈るなはできる限りの協力をした。誠二は、週末に庭の手入れと風呂場の掃除、そして家の中の掃除を担当し、瑠維は、大学に通いながら主に料理とその他の家事を担当した。高3の瑠奈は受験生だから家事はやらなくてもいいと言われたが、それを断り、洗濯を引き受けた。

それぞれが、それぞれの想いを抱え、支え合い、家族全員が、瑠夏が早く良くなる事を願っていた。

幸い治療の経過は良好で、瑠夏は、治療から1年後、完全寛解かんぜんかんかいになって退院した。

退院の日、瑠夏は、服部先生から、まず、3年、それを超えたら

5年間、完全寛解の状態が続けば、治癒の確率が高くなると言われた。瑠夏は、治癒を目指して外来にも足げく通った。嫌な検査も受け続けた。

3年が無事に過ぎた時には、家族でささやかなお祝いをした。まだ油断できるわけではなかったが、第1段階クリアできたと、みんな嬉んだ。

それから1年。

あと1年経てば5年が経過する。期待に胸が膨らんでカレンダーのバツ印にも勢いがあった頃、瑠夏は風邪を引いた。咳、鼻水が止まらず、微熱で体がだるい日が何日も続き、瑠夏の体力を奪っていく。同じような経験をした時を思い出して、胸がざわざわと騒ぎ出す。頭の片隅に嫌な二文字が浮かぶのを瑠夏は必死に打ち消した。

一向に良くならない体に業を煮やして、予約日ではないのに、しぶしぶ血液外来に来た。症状を告げた時、服部先生の顔が一瞬曇るのを瑠夏は見逃さなかった。頭の隅に追いやった二文字がしゃしゃり出てくる。

いやだ、そんなこと、絶対、ない。

心の声は、意図的に二文字を拒絶した。

認めたくなかった。いや、認めるわけにはいかなかった。そんなこ

と、あるはずがないと何度も心で念じた。

しかし、現実是非情である。

服部先生の口から絶対に聞きたくなかった二文字が呟かれる。

再・発・・・・・・・・

瑠夏の未来が音を立てて崩れようとしていた。

瑠夏の決意（前書き）

ふたたび病院へ入院することになった瑠夏は、もう一度退院するために思い切った決断をします。瑠夏のけじめを読んでください。

瑠夏の決意

「瑠夏、準備はできた？」

啓子は、瑠夏の部屋の前で声をかけた。

「うん、荷物の準備は、できたよ。」

瑠夏はドアを開けて啓子にそう言いつつ、啓子のそばをすりぬけて階段を下りた。

「瑠夏、荷物は？」

啓子が階段を下りる瑠夏に声をかけた。

「ちょっと出かけてくる。」

「えっ、出かけるって、今から？どこに行くの？」

「だから、ちょっと。帰ってくるまで病院に行くのは待って。」

啓子が瑠夏を追って階段を下りると、瑠夏はもう、玄関を出た後だった。

瑠夏は、駐車場でカギをはずして、自転車を押して道路の方まで出た。空は、真青に澄んで高く、羊雲が浮かんでいた。空を仰いで胸いっぱい息を吸い込むと、自転車のペダルに足をかけた。初秋の風が頬をくすぐる。日中はまだ暖かい風が心地よかった。

瑠夏は、自転車に乗ると駅前の商店街をめざした。時折出会う近所の顔見知りにもベルを鳴らして合図を送る。向こうも笑って手をふってくれた。

商店街が近づくと、雑踏のざわめきが増した。耳に生活を彩るいろんな声や音が聞こえてくる。

何気ない日常の風景。瑠夏は、こうした自然な人の営みや風景が好きだった。

また、かならずここへ戻ってくる。

自転車のハンドルをぐっと強く握りしめながら、そう心に誓った。

病院で再発の告知を受けたあと、瑠夏は、自分がどうやって家まで帰ってきたのか、全く覚えていなかった。

心がすべての思考を止め、感情を封じ込めたようだった。なにも映さない瞳、すべての音を拒絶した耳、閉ざしてしまった心。まるで機械仕掛けの人形のように、啓子のことばのままに、ただ体を動かしていただけだった。

やっと正気が戻った時、瑠夏は自分の部屋にいた。

ベッドに腰かけ焦点の合わない瞳で壁を眺めていた。どれくらいの時間をそうしていたのだろう。瑠夏の耳に、嗚咽を漏らすような声が聞こえた。

瑠夏はその声に引き寄せられるように、ふらっと立ちあがり、揺れるように歩みをすすめた。開けっ放しになっていたドアからろう下に出て、導かれるように階段を下りた。1階の居間の前まで来ると、中から押し殺したような声が聞こえてきた。

「どうして、瑠夏が……」

さいごまでことばを継げず、声を詰まらせた啓子の呟き。るかが、と言われて、瑠夏ははっとした。ドアを開けようとした手が動きを止めた。

「落ち着くんだ、啓子。お前がそんな様子では瑠夏が不安になるだけだろう。今、私たちにできるのは、以前の時と同じように瑠夏を支えるために自分ができる事をするだけだ。」

誠二が啓子をなだめるように言った。

「そんなこと、わかっているわ。でも、あんまりじゃない。瑠夏と同じように化学療法を受けて、再発もせず元気に過ごしている子もいるのよ。どうして瑠夏にはそれが叶わないの？神様はいじわるだわ。あんなに……あんなに頑張っている子に、どう……して……」

嗚咽はいつしか泣き声に変わっていた。声を押し殺す事もせず、啓子が泣いているのを誠二は、背中を抱きよせ抱きしめた腕を優しくさすってやることしかできなかった。

治療を受けるために入院していた間も、その後の4年間も、瑠夏の傍で瑠夏を心身ともに支えてきたのは、啓子だ。そんな啓子にと

つても、瑠夏と同じように、5年間の完全寛解は祈る思いで迎えた
時だった。

その期待が、医師のひと言で崩されたのだ。啓子の悔しさは、誠
二には痛いほどよくわかった。

「啓子……」

啓子を抱きしめる手にいつそう力がこもった。こうして寄り添う
事で妻の心を癒したいと誠二は思った。

両親の話をも今のドアの向こう側で聞いていた瑠夏は、足音を立て
ずに自分の部屋に戻った。無言のままベッドのそばまで来るとその
ままベッドの上に仰向けに倒れ込んだ。瑠夏は、右手で目を覆うと、
ぎりつと唇をかんだ。左手は腱が白く浮き出るほど強くシーツを握
っていた。

『神様はいじわるだわ』とお母さんは言った。でも、それは間違っ
ている。神様は、この世には、いないのだ。いるわけがない。この
4年間、私は何万回、ううん、何百万回も、神様に祈った。

どうか、私の病気を治して下さい。って

ずっと祈り続ければ願いはかなうって、私も思っていた。

違う。

ただ祈っただけじゃ、ない。

いっぱい、我慢も努力もした。こんなにたくさん祈って、やりた

い事もやらず、痛い思いにも歯をくいしばって耐えてきたのに。

なのに、再発、だって。

はははっ……

この4年間の私の努力って、なに？ ぜんぶ水の泡だよ。 なにもかもリセットされて、また一からやり直しだって。

神様なんか、ぜったい、いない！

それとも、私は、神様に見放されてしまったの？ 神様に見放されるくらいのこと、私、なんかした？ そんな覚え、ないよ。 ずっと真面目に生きてきたのに。

瑠夏は、シーツを握っていた左手を放して、自分の髪を一房つかむと、目の前にかざした。 瑠夏は髪を退院直後からずっと伸ばし続けていた。 不揃いになると髪の毛のケアと揃えるために2、3？ 切るだけだったので、瑠夏の髪は背中を半分覆うくらい長くなっていた。

黒く艶のある長い髪は、瑠夏の自慢だった。 家族からも友だちからも羨ましがられた。

この髪も、入院して治療が始まれば、全部、抜け落ちてしまう……

初めの治療の時の様子を思い出して、自然に顔が歪んだ。

初めて治療を受けた後、しばらくすると、朝、抜け落ちた髪が枕

を覆っていた。髪を整えようとブラシをかけると、ブラシに片手で握れないほどの大量の髪が絡んでいた。

それは、まるでホラーを見ているようで、耐えがたいものだ。

洗髪の際に髪が抜けるのを見るのが怖くて、とうとう自分で髪を洗う事が出来なくなっていた。

それでも、きれいだった髪は見るも無残なほど抜け落ちて、地肌が目立ち、さいごには、すべて抜け落ちた。

髪の毛のない自分を鏡で見て、もう、おしゃれなんかできない、と悲しくなった。悔しさに、自分の頭を切り取って捨てたくなった。

うつ、くつ、うつ………

覆った瞳から涙がとめどなく溢れ出た。瑠夏の嗚咽は、次第に大きくなった。自分が泣いているのを下に知られたくないと、瑠夏は体を反転させてうつ伏せになって顔を枕にうずめた。

まるで、それが合図だったかのように、瑠夏の嗚咽は、慟哭に変わった。

うつ、あつ、ああつ、あつ、うわああああああああつ………

瑠夏はもう、声を押し殺すのを我慢しようとは思わなかった。心の中の怒りや不安を吐き出すように、瑠夏は泣き続けた。

涙が、心の悲しみも、自分の病気も、全部、洗い流してくれれば

いいのに。こんな体、いらぬ。こんな心も、いらぬ。全部、涙と一緒に流されちゃえ！

瑠夏は、顔をうずめた枕を両手で掴みながら、声を限りに泣きつづけた。

2階から聞こえる泣き声に、誠二と啓子は驚いて居間を飛び出した。階段を上がり瑠夏の部屋まで行くと、急いでドアを開けた。ドアが開くと、瑠夏の鳴き声はいつそう大きく聞こえた。

ドアを開けた誠二も後から追いかけてきた啓子も、枕に顔をうずめて泣き叫んでいる瑠夏に息をのんだ。

誠二は静かにドアを閉めると、拳に額をあてて立ちすくんだ。誠二の肩が小刻みに震えていた。その横で、啓子は、力なく座りこむと、両手で顔を覆って肩を震わせた。

部屋の中から聞こえる娘の鳴き声に呼応するように、ふたりは、長い間、肩を震わせ続けた。

瑠夏は、馴染みの美容室の前で自転車を降りると店の角に止めてカギをかけた。風で乱れた髪を手ぐしで簡単整えると店のドアを開けた。美容室の中は、2、3人のお客さんだけで、いつもよりも空いていた。

「いらつしゃい、瑠夏ちゃん。待っていたよ。」

いつも瑠夏の髪を切ってくれる美容師の斎藤が笑って近づいてきた。瑠夏は、斎藤に軽く会釈をすると、持っていた鞆を預けた。斎藤は鞆を受け取って番号タグをつけて受付の奥のロッカーに入れた。

「今日は、カットだよね。」

受付のカウンターから出てきながら、斎藤が瑠夏に聞いた。

「はい、お願いします。」

瑠夏が笑顔で頷くと、

「じゃあ、まずはシャンプーから。こちらへどうぞ。」

と、斎藤が瑠夏をシャンプー台へと案内した。

「いつ見てもきれいだね。瑠夏ちゃんの髪は。長くて艶があつて、まっすぐで。カットするたび、切るの、もったいなくなつて思ふんだよ。」

斎藤が丁寧に髪を洗いながらそう言った。

もったいないか……ほんの2、3？切るだけでそう思うなら、斎藤さん、今日は何て言うんだろ。

瑠夏は、ゆっくりとやさしく洗う斎藤の顔をちらつと見て、目を閉じた。

シャンプーが終わってカット台へ移動した。斎藤は瑠夏の髪を夕

オルで拭きながら、

「それじゃ、いつもみたいに先をそろえるのでいい？」
と聞いた。

「……………今日は、スキンヘッドに、して下さい。」

瑠夏が首をふってそう言うと、斎藤さんが手を止めた。

「は？瑠夏ちゃん……………今、なんて……………」

鏡に映る斎藤の顔はひきつっていた。だが、瑠夏は鏡を通して斎藤をまっすぐ見つめると、はっきりとさっきのことばを繰り返した。

「スキンヘッドにして下さい。」

ごくりと唾を飲み込むと、斎藤は躊躇いがちに瑠夏に確かめた。

「あの、瑠夏ちゃん、スキンヘッドって言った……………んだよね？」

「はい。」

瑠夏が頷くと、斎藤は表情を固くした。

「本気？どうして……………」

「詳しくは言えないけど、これは私のけじめ。」

「けじめって……………まさか、失恋した……………とか？」

失恋ときいて、瑠夏は苦笑した。

当て擦りをすれば、これも失恋って言えるのかな？私が“治療”に。だって、恋い焦がれるのと同じぐらい切ない思いをして待ち続けたよね。自分が治療する事に。

「まあ、そう、かな？」

瑠夏が曖昧に言葉を濁しながらそう言うと、斎藤は頭をふって瑠夏に思いとどまらせようとした。

「今どき流行らないよ、瑠夏ちゃん。失恋して髪を切るなんて。それもスキンヘッドになって、やり過ぎだよ。それに、瑠夏ちゃん、中1からずっとのばしていたでしょ？成人式には自分の髪で結いあげるからよろしくって言って。それから瑠夏ちゃんが、ずっとずっと髪の毛を大事にしているの、知っているよ。」

「いいんです。斎藤さん、躊躇わず、ばさっとやってください。これは、ほんとに私のけじめなんです。思いを遂げさせてください。」

瑠夏の目に迷いはなかった。鏡越しに瑠夏のその目を見た斎藤は、大きく嘆息して頷いた。その顔は躊躇いを含んでいたが、髪を触る手には迷いがなかった。

「……美容師は、お客様の要望にお応えするのが使命だからね。瑠夏ちゃんが望むと言うのなら、やってあげるよ。」

斎藤は、髪を愛おしむように何度か梳くと、一度息を止めて、それから一回深呼吸をすると、ばさりと瑠夏の髪を切った。

泰生の苦悩（前書き）

劉生のお父さんの泰生が、劉生への偏見を見直すきっかけになる話です。これをもとにして親子関係が少しは良くなってくれればいいのですが……

泰生の苦悩

劉生が初めて瑠夏を見かけた日

泰生は、所用の合間に父の興生の見舞いに訪れた。

玄関ロビーから病院の中に入ると、他の人より頭一つ飛び出た男が目に入った。泰生は長身の男には、条件反射のようにすぐ目がいく。いつも頭を悩ませている末の息子だと思っからだ。

見かけた男が息子の劉生だったので、泰生は驚いた。

劉生は、慌てた様子で待合室を見まわしていた。

誰を探しているんだ？ん？見つけたようだな。

泰生は、劉生が早足でニット帽をかぶった女性に声をかけるのを見た。女性は、きゅっと短く悲鳴をあげて、後ずさった。女性の悲鳴を聞いて待合室にいる人が一斉にふたりの方に目をやる。すぐに中年の女の人が席を立ち、警備員の詰所へと向かった。

何をしているんだ、あいつは。

どうやら人違いだったようだ。劉生はニット帽の女性に、「すみません。人違いでした。」と深く頭を下げ、そばを離れると、また誰かを探しだした。切羽詰まった顔で人探しをしている劉生に、警備員が近づいてきた。警備員は、片手を警棒に添えて臨戦態勢なのが、泰生からもわかった。

「すみませんが、ちょっと来てもらえますか？」

「は？どうして？」

警備員の呼びかけに、劉生は苛立ちを隠そうともせず声を荒げていた。

あんな言い方をすれば、相手をますます警戒させるだけだとあいつはわからないのか？

息子の対応に泰生は舌打ちをした。ことばが足りず誤解を招きやすい劉生を見て、10代の自分を見ているようで、胸に苦い思いが広がった。

「他のお客様からあなたの行動がおかしいと苦情がありました。」

案の定、警備員は警戒を強め、威嚇するように劉生にそう言った。

「俺の行動がおかしい、だって？俺はここで人を探していただけだぞ。」

「関係のない女の人に声をかけたとか。その人がとても怯えているからと言われたのですが？」

「あれは、人違いしただけだ。ちゃんと謝った。」

あの警備員は、劉生の話を書く気はないようだ。残念だが、劉生のことはあの男には通じない。

話が平行線のまままで埒があかないと思った劉生が、警備員に背を

向けて立ち去ろうとするのを見て、警備員は素早く劉生の前にまわって、立ちふさがった。

「いや、このまま病院内をうろつかれては困ります。」

「何だつて？俺は、ここに身内の見舞いにきたんだ。それも許されないのか？」

劉生が怒鳴るのを聞いて、泰生はため息をついた。

うまくない。あんな応答をしていては、だめだ。ますます騒ぎを大きくするだけではないか。

泰生がそう思っていた時、総合受付の方から50代の男が出てきた。その男は、泰生の見知った人物だった。

「ここでは周りの目があります。言い訳は事務所で聞きますので、一緒に来ていただけますか？」

まずいな、病院の事務長が出てきた。下手をすれば警察を呼ばれるかもしれない。

泰生は、躊躇わず騒ぎのもとに足をすすめた。

「失礼ですが、何かあったのですか？」

劉生の背中を見ながら、泰生は、事務長へと声をかけた。事務長は、劉生の背中越しに泰生の姿を認めると、顔のこわばりを解いて作り笑いを浮かべた。

「これは、石田様。お父上のお見舞いにいらしたのですか？」

「ええ、そうです。ところで、息子が何かしたのですか？」

泰生は、相手が動揺するのを見越してことばを放った。泰生の思惑通り、事務長は顔色を変えた。

「えっ、この方は・・・その、石田様のお子様なのですか？」

「ええ、末の息子ですが。」

「そっ、そうでしたか。いや、たいへん失礼しました。どうやら誤解があったようで・・・。」

事務長が、即座に判断して警備員を下がらせた。泰生はその対応に満足した。

そうだろう。そうするのが当たり前だ。事務長は愚かではない。この病院の最大の取引先の理事長の孫を不審者扱いすれば、病院が不利益をこうむる事はわかっているはずだからな。

事務長は、先程とはがらりと態度を変えて劉生に話しかけた。

「先程は警備の者が失礼しました。お父様と一緒におじい様のお見舞いにいらしていたのですね。」

劉生は、それには答えず、踵を返すと病院の出入り口の方に向かった。泰生は、劉生の態度に眉をひそめたが、何かを言う事はしなかった。事務長が笑みをはりつかせたまま、戸惑いの顔を泰生に向けた。両手をすり合わせて、泰生の不興を買っていないか確かめ

るようなその顔に、泰生は軽く頭を下げた。

「それでは失礼します。」

泰生は、事務長にそう言つと、今度は、去つて行くこととする息子に声をかけた。

「待て、劉生、どこへ行く？」

劉生は足を止めると、肩越しにふり返つて泰生を見た。

「帰る。じいさんの見舞いはもう済ませた。」

そう言い捨てると、劉生は外へ出て行った。泰生は、去っていく劉生を見送ると、大きくため息をついた。

あいつは、いつもああなのか？

騒ぎの場を離れてエレベーターホールへと向かいながら、泰生の胸の内は複雑だった。

今日、はじめて劉生がトラブルに合う現場を目撃した。劉生のトラブルについて、これまでは、警察や学校、または“被害者”から一方的に聞かされることばかりだった。その内容は、劉生に非があると決めつけるものばかりで、それが一方だけでなく、複数の方から同じ話を聞かされるので、泰生もそうなのだと信じた。

自分の息子が一方的に悪いのだ、と。

だが、今、見たものは……

劉生のやり方にも問題はあったが、劉生が一方的に加害者として決めつけられるような事ではなかった。

それなのに、あの警備員も事務長も、そしてまわりの人間も、すべてが劉生を非難しているようにしか、見えなかった。

『どうして、俺を信じてくれないんだ。』

泰生の脳裏に、泣きながらそう訴えた劉生の顔が浮かんだ。

最初のトラブルがおこった時、劉生は自分に非がない事を全身で訴えていた。それを誰も信じはしなかった。もちろん自分も。

一方的に決めつけて、劉生を叱り、騒ぎを鎮めるために自分のコネを使い、金を動かした。それが一番早く事を鎮める方法だということをおこれまでの経験から学んでいたからだ。

劉生を罰するように、騒ぎの元凶である古武道をやめさせた。父にも言い含め、道場に通う事も父に個人的に教えを請う事も禁止した。全寮制の戒律の厳しい男子校に転校させることも考えた。だが、転校だけは、父も妻も強く反対したので断念したのだ。

以来、劉生とはまともに話しをした事がない。

上のふたりの兄たちは、自分の満足のいく成長を遂げていた。だから、異端のような劉生の育ちが気に入らなかった。一度、先入観を持ってしまうと、それ以後、どのような事があってもその先入観を崩す事はなかった。

私は、本当の劉生を見てはいなかったのかもしれない……

その日、泰生の胸には、末の息子を想う気持ちが芽生えた。

劉生の気持ち1（前書き）

瑠夏の母親の啓子によって、劉生は自分の気持ちに
気づきます。この話は長くなりそうだったので、2つに分けました。

劉生の気持ち1

「本橋さんっ、大丈夫？」

劉生は、真っ青な瑠夏を抱きとめ、さっと横抱きになると、吐き出し口へと急いだ。

「……………」

青白い頬のまま返事をしない瑠夏に不安が募る。

「本橋さんっ、本橋さんっ、もっ」

不吉な事が頭をよぎりそうになり、それを否定するために何度も瑠夏の名前を呼ぶと、瑠夏がつつすら目を開けた。

「る……か……だって、ば……。る、かって……よん……」

「わ、わかったから、瑠夏っ。苦しいならもうしゃべるな。すぐに診てもらえるようにするから。」

苦しそうに話す瑠夏に、劉生が瑠夏を見下ろしながらそう言うのを聞いて、瑠夏はにこっと笑うと目を閉じた。

劉生は、吐き出し口から病院の中に入ると、急いで看護師を探した。しかし、吐き出し口の近くには看護師が見つからず、そのままエレベーターホールへと向かう。

瑠夏は、5階西病棟の内科に入院しているって言っていたよな。
このままそこに向かった方がいいのかもしれない。

「くそっ、エレベーターはまだかよっ。」

劉生は、エレベーターホールで“上”のボタンを押すと、扉が開くのをじりじりと待った。一緒にエレベーターを待っている人たちが、ぐったりとした瑠夏を抱きかかえる大男が声を荒げるのを聞いて、怪訝そうな視線を劉生に向けた。

ようやくエレベーターが到着して扉が開いた。劉生は、降りる人のために一旦そばへ寄った。エレベーターの中から40歳くらいの女の人が飛び出すように出てきた。その人は、横にいる劉生と、劉生に抱かれている瑠夏に視線を向けると目を見開いた。

「瑠夏っ、どうしたのっ？」

劉生は、女の人の声にはっとしたが、瑠夏を病棟に連れて行くことを優先したため、そのままエレベーターに乗り込んだ。すぐに女の人も乗り込んできた。

「瑠夏っ、瑠夏っ。」

狭いエレベーターの中で女の人の声が響いた。自分を心配する女の人の声に瑠夏はびくっと体を震わせたが、それ以上の反応をする事はできなかった。

エレベーターに乗っている時間は数分だったが、劉生には何十分を経ったように思えた。乗った直後に瑠夏の体の重みが増したことで、劉生は瑠夏が意識を失ってしまったことがわかっていった。

早く医者に！

それしか劉生の頭にはなかった。エレベーターがゆっくり上昇している間、劉生は、女の人に声をかけた。

「すみません、5階についたら、先に病棟に行つて瑠夏の様子を医局に知らせてくれませんか。早く治療の準備をしてもらった方がいいですよ？俺もすぐに行きますから。」

女の人が劉生に頷いた。

「わかつたわ。私は先に行っています。……瑠夏を頼みます。」

今度は、劉生が女の人に向かって頷いた。

ようやく5階についた。扉が開くと同時に女の人が飛び出して、すぐに西病棟の方へ向かった。劉生もその後を追った。

劉生が病棟のドアをくぐると、すでに看護師たちが待ち構えていた。ナースステーション横の個室に瑠夏を運ぶよう指示を受けて、劉生は瑠夏を抱きかかえて個室へと急いだ。

個室のベッドに瑠夏を下ろすと、看護師たちが劉生に外に出るよう促すと、病室のカーテンを閉めた。

「はやくっ、ラインを確保して。バイタルチェックしてっ。」

ひとりの看護師の指示に従って看護師たちが手際よく動いている

様子が、劉生の耳に届いた。

「瑠夏……」

劉生はしばらくの間、ドアの前に張り付いていた。10分くらいしてさっきの女の人が個室から出てきた。女の方は、劉生を見てびっくりした顔をしたが、ドアの前から動こうとしない劉生に声をかけてきた。

「あの……、あなたは、瑠夏のお友達？」

女の人の呼びかけに劉生は驚いた。

「は、はい……たぶん……」

「たぶん？」

劉生のことばに女の方は首を傾げた。

「いや、あの、瑠夏と……いや、瑠夏……さんと出会ったのは、さっきなんで……」

劉生は、顔を真っ赤にして、瑠夏と出会った時のことを話した。

「そう、そうだったの……」

女の方は、少しさみしげな笑みを浮かべて劉生を見た。そして閉ざされた個室のドアを見つめて小さくため息をついた。

「あの……?」

「あ、ごめんなさい。話はわかったわ。瑠夏をここまで連れてきてくれてありがとう。私は、あの子の母親です。」

「お、俺は、石田劉生といます。」

劉生は、両手を体の脇につけて最敬礼をするように頭を下げた。その様子に啓子の顔が和らいだ。劉生は、啓子の和らいだ表情を見て、ほっと笑った。

自分がトラブルもなく事を終えたのは、高校に入ってから初めてだ。いつもなら吐き出し口から病院に入ったところで警備員に呼び止められたり、エレベーターホールで瑠夏のお母さんと会った時にうちの娘に何をするのっ って叫ばれたりするんだよな。だけど、今回は、普通だった。こんなこと、今までなかったのに。

劉生は、もう一度個室の方を見た。

瑠夏は、大丈夫なんだろうか……

劉生の心配を察したのか、啓子が劉生に声をかけた。

「瑠夏は、きつと大丈夫よ。今までそんな大変な時だっ てちゃん と乗り越えてきたから。心配しないで。」

「治療って、どれくらいかかるものなんですか？俺が、ここで待っていてもいいくらいの時間で終わりますか？」

劉生の問いに啓子は答えに詰まった。まだ完全に劉生に心を許したわけではない。

「この子の話が事実だとすると、瑠夏とは今日が初対面だ。それなのに、この子は、瑠夏の名前を呼び捨てにしていた。会って間もない子に対してそれは馴れ馴れしすぎるのでは？でも、この子の態度はきちんとしていて、礼儀正しい。瑠夏を心配してくれているのも、ほんとうのようだ。さて、どう判断したらいいのかしら・・・」

啓子は、決心したように口を開いた。

「瑠夏の治療は、1時間くらいかかるかもしれないわ。石田君、だつたわよね？それまで待てる？」

「待てます。」

劉生は即答した。

「そう、それなら、治療が終わるのを待つ間、私と話をしていきましょう。」

「えっ？」

啓子の提案に劉生は驚いた。

「石田君の事も石田君が瑠夏の事をどう思っているのかもゆっくり聞いてみたの。いい？」

啓子のことばに劉生は戸惑った。だが、まっすぐ自分を見る啓子に素直に頷いた。

「はい、わかりました。」

「ありがとう。じゃあ、パントリーに行きましようか。でも、その前に瑠夏の様子を聞いてくるわね。ちょっと待っていてくれる？」

啓子は、いったん個室に戻り、少ししてから出てきた。

「すみません。パントリーにいますから、何かあったら声をかけてください。」

中の看護師にその声をかけると、啓子はパントリーを目指し、劉生についてくるように促した。

劉生の気持ち2（前書き）

この前の話の続きです。劉生は、瑠夏に一目ぼれしてしまっただけですが、啓子に促されてやっとそのことに気づきます。でも、それを瑠夏に伝えるのはもう少し後のはなしです。

劉生の気持ち2

パントリーの窓際の丸いテーブルのそばまで行くと、劉生に先に座るように言ってから啓子はお茶を取りに行った。劉生は、持ってきたお茶を軽く会釈して受け取ると、啓子が座るのを待った。

「あの、瑠夏さんは、どんな様子なんですか？」

啓子が話す前に、個室のドアの前にいた時からずっと気がかりだった事を劉生は口にした。

「少し血圧が低めなんだけど、バイタルは落ち着いてきているようだよ。瑠夏、ちゃんと自分で先生や看護師さんに受け答えできているわ。大丈夫よ。」

「そうですか。よかったです。」

劉生が安堵の息を吐くのを見て、啓子は笑った。

「石田君、ほんとに今日初めて瑠夏に会ったの？あなたを見ているとずっと前から瑠夏を知っているようにしか見えないわ。」

啓子の探るような質問を受けて、劉生はうつろたえた。

「あ、えっと、はい。・・・瑠夏さんとは今日が初対面です。・・・でも、俺、いや、僕は、前から瑠夏さんを知っていました。」

「どっぴいびいって。」

「1週間前、お、・・・僕は6階に入院している祖父の所に来ていました。祖父の病室から中庭が見えるんです。お、・・・僕が中庭を見ると、瑠夏さんが中庭の木をハグしていたんです。お、・・・すみません。目上の人に使うことばではないのはわかっているんですが、どうも話しくくて・・・俺って言っても、いいですか？」

劉生が申し訳なさそうに頭をかいてそう言うのに、啓子は目を丸くした。それから、頬笑みながら頷くと、劉生は、ほっとした顔でぎこちなく笑った。

「ありがとうございます。助かった。僕って言い慣れていなくて、すみません。」

劉生は少し顔を赤くして頭を下げ、それからまた、話し始めた。

「瑠夏さんは、中庭の木をひとつずつハグしていました。遠目だったんですけど、俺からは瑠夏さんが笑っているように見えました。笑って木にハグするなんて、変わった子だなあって、あ、変わっているって悪い意味じゃ、ないですよ。木にハグしてまわる子なんて初めて見たから、不思議だなあ、どんな気持ちになるんだろうって思いました。そのうちに看護師さんが来て、瑠夏さんは看護師さんに追われて病院に入って行きました。俺、瑠夏さんが木にハグする気持ちを聞いてみたいって思ったんです。それで、その日からずっと、また瑠夏さんに会えないかなって思って中庭を探してみました。」

「それで、今日会ったの？」

「はい。1週間探しても見つからないから、もう退院したのかもしれないって諦めかけていたんです。そしたら、また、瑠夏さんが中

庭に出ていて、俺、急いで中庭に行っただんです。」

「今日も瑠夏は木にハグしていたの？」

啓子の問いに劉生は首を横にふった。

「今日は、落ち葉のシャワーの中にいました。」

「落ち葉のシャワー？」

啓子が聞き返した。

「はい。今日はいい感じに風が吹いていたから、中庭の木が一斉に葉を落としていたんです。それはもう、降るように。瑠夏さんは、降ってくる落ち葉を両手を広げて受け止めていました。その様子が落ち葉のシャワーを浴びているみたいだったんです。」

「そう・・・瑠夏が落ち葉を・・・」

啓子は顔を曇らせて口を歪めた。

劉生は、自分が何か啓子の気にさわる事を言ってしまったのかと思っただ。

「あの・・・俺、何か、本橋さんが気にさわること言っただんですか？」

劉生がおそるおそる尋ねた。不安そうな劉生の目を見て、啓子は首をふった。

「ちがうのよ。あなたは何も気にさわること言っていないわ。瑠夏のことなの。」

「瑠夏さんのこと？」

「そう、あの子は入院してから何度も病室を抜け出しては外に出ているの。治療のせいで免疫力が落ちていいるから、あまり外を歩かない方がいいのに、ちっとも言う事を聞かない。植物や動物に触れることは、今のあの子には命取りになることもあるのに・・・どうしてって、聞いたのよ。」

啓子は、いったん話を止めると呼吸を整えた。そうしないと嗚咽が漏れそうだった。

「そしたら・・・どんなに・・・やりたい事を我慢して治療を頑張っても・・・悪くなる時は悪く・・・なるし、し、死ぬ時は・・・死ぬん・・・だ、か、ら・・・って」

啓子の声が震えだした。劉生は、何も言わずに立ちあがると、温かいお茶を一杯持ってきて、啓子の前にある冷めたお茶と交換した。

啓子は目を丸くして自分の前に置かれたお茶を見た。

「あつ、あつたかいお茶が喉を通ると、不思議と震えが止まるんです。これ・・・そ、祖父の受け売りなんです、た、試してみませんか？」

劉生は、耳まで真っ赤になって啓子にお茶をすすめた。今まで誰かを慰めた事なんか無い。もっと気のきいたことが言えればいいのと心の中で舌打ちした。

啓子は、劉生に言われるまま、目の前に置かれたお茶を一口飲んだ。不思議と心が落ち着いてきた。お茶の温かさが胸に広がり、心が軽くなった気がした。

この子、見た目は強面で乱暴そうなのに、優しい子なんだわ。人は見かけで判断しては駄目ね。

啓子は、劉生への警戒心を解いてもいいと思うようになっていた。

「おいしい・・・ほんとね。震えが止まったわ。ありがとう。」

「いえ・・・」

啓子が柔らかく微笑むと、劉生は俯いてますます顔を赤く染めた。啓子はお茶を飲み干すと、話を続けた。

「どこまで話したんだっただかしら・・・」

「治療を頑張っても悪くなる時は・・・ってどこまで。」

劉生が呟くと、啓子は頷いた。

「そうだった。そう・・・悪くなる時は悪くなるし、死ぬ時は死ぬんだったって言ったの、あの子。そして、だから、いつ死んでもいいように自分の好きな事を好きな時にやりたいようにやるって。それがなんだか、もうどうでもいいって、言っているように聞こえたのよ。再発してからのあの子は、それを実行しているようにしか思えなくて。」

啓子はそこまで話すと、さみしそうに窓の外に目をむけた。

「あの子……まるで生き急いでいるみたいで……」

啓子の呟きに、劉生が反論した。

「瑠夏は、生き急いでなんかいないと思います。」

劉生がきつぱりそう言ったので、啓子は驚いた。

「……なぜ、そう思うの？」

「思うんじゃないんです。瑠夏は生き急いでなんか、いない。むしろ、もっと、ずっと生きたいと願っているんだ。木へのハグも、落ち葉のシャワーを浴びるのも、瑠夏の生きることへの祈りなんだ。瑠夏は……あの時の瑠夏は……全身でそれを伝えていた。」

劉生のことは、啓子の心を揺さぶった。

『私は、木からパワーをもらっているんだよ。』

再発後の初めの治療が終わってやっとクリールームから出られるという日、勝手に病室を抜け出した瑠夏が、啓子に言ったことは思い出した。

あの時は、瑠夏が、また無茶をしたのだと思った。瑠夏が言ったことをただの詭弁だとは思わなかった。

なのに、この子は……

「この子は、瑠夏と今日、初めて会ったと言った。それなのに、この子は、私よりも瑠夏の心をわかっているというの……?どうして?」

「石田君、あなたは、瑠夏が好きなの?」

突然、意表をつく質問を受けて劉生は慌てた。

「な、なんで、そんな話の流れになるんだ?今は瑠夏がなんで中庭にいたかって話だよな?なのに、なんで、俺が瑠夏を好きかって聞かれなきゃならないんだ?」

目の前で、急に咳きこみ赤くなっている劉生に、啓子は同じ問いを投げかけた。

「石田君は、瑠夏のこと、好きなの?」

追い打ちをかけるように同じ質問をされて、劉生は座ったまま後ずさった。

「瑠夏を好きかって?俺が?瑠夏を?瑠夏に会ってまだ1週間だぞ。しゃべったのは、今日だぞ。それなのに、好きかって言われても……」

「いつ、いきなり、そう聞かれても……」

劉生はそう言うのがやっとだった。

啓子は劉生の目を見ながらゆっくりと口を開いた。

「石田君がさつき言ったこと・・・私には堪えたわ。私ね、最初に瑠夏が病室を抜け出して中庭に行った時、瑠夏から、私は木からパワーをもらっているのよ、って言ったのを信じなかった。この子は適当な事を言っただけなんだって思っただけで。でも石田君は、中庭の瑠夏を見て、瑠夏がなにをしているのかわかったのよね？ちよつと興味があつたくらいじゃ、瑠夏が考えていることなんて興味ないし、わかるわけ、ないわ。母親の私でも気づかなかったことを。だから、石田君は瑠夏のことを好きなのかつて、思つたの。」

啓子のことばは、劉生の胸を貫いた。

俺は・・・なんで瑠夏に会いたいつて思った？なんでこの1週間瑠夏を探そうとした？最初に瑠夏が木を抱きしめているの見た時、俺もあの子に抱きしめてもらいたいつて思ったよな？落ち葉の中の瑠夏を見た時は、きれいだつて思った。ずっとこの子を見ていたいつて思った・・・

これって・・・

これって・・・好きだつて、ことなのか？

自分のことばには答えず黙り込んでしまった劉生を、啓子は目を細めて見ていた。

この子は、人のことばをちゃんと受け止められる子なんだわ。ちゃんと受け止めて、そして考えられる。軽々しくことばに出さない分、この子のことばは信用できるのかもしれない。

啓子は、初対面だった劉生を瑠夏があっさりと受け入れたわけが少しわかった気がした。

劉生の気持ち₃（前書き）

「劉生の気持ち」は、前の話で終わると思ったのですが、思うようにいかず、この話までかかってしまいました。すみません。

劉生の気持ち

劉生が、啓子に返事をできないで悩んでいると、看護師がふたりのところにやって来た。

「本橋さん、瑠夏ちゃんの治療、終わりましたよ。血液検査の結果も出ています。」

「そうですね。わざわざありがとうございます。」

啓子は、看護師にお礼を言うと、椅子から立ち上がった。劉生は、問われたことに対して答えなくてもいい状況になったことにほっとした。

劉生が、あからさまに安堵の表情を見せたのを見て、啓子はいたずら心をおこした。

「石田君も瑠夏に会うでしょ？」

啓子が当たり前のように言ったことばに、劉生は目を丸くした。

「えっと、いいんですか？俺が会っても。」

「ええ、私は構わないわ。でも、一応、瑠夏に聞いてみてからね。」

「はい、それでいいです。」

劉生も椅子を立ち上がり、紙コップを片づけようとした啓子の手を制止すると、

「俺が片づけますから、本橋さんは、瑠夏さんの所に行ってあげてください。」

と言った。

啓子はにこっと笑って、劉生の好意に頷いた。

「ありがとう。じゃあ、片づけたら病室の前で待っていてね。あ、それから石田君、さっきの質問は、保留ね。いつか答えを聞かせてもらうからね。」

「はい。って、えっ、えっ、な、な、なんて？」

啓子は、答えに詰まっつてうろたえている劉生に手をふって、先に病室へ向かった。

啓子が病室に入ると、瑠夏がこちらをむいて微笑んだ。

「心配かけて、ごめんね。ただの貧血だった。」

「ほんとに、あんたって子は。これで何回目？」

「や、いつもはこうじゃないでしょ。今日は、たまたま調子が悪かっただけ。」

「そのたまたまが怖いんじゃないの。幸い、感染の恐れはないよう

だからいいようなものの。体力も免疫力も落ちているんだから、無茶をしないで。」

「体力も免疫力も落ちたから、パワーをもらいに行っただけだな。」

瑠夏が口をとがらせてそう言うのを聞いて、啓子は苦笑した。

「はいはい、そうなんでしょうね。瑠夏は木からパワーをもらっていたのよね。」

啓子のことばに瑠夏は驚いた。

「なに、どうしちゃったの？今までは私がどんなにそうだって言っても信じなかったのに。それとも皮肉？」

「皮肉じゃ、ないわよ。今はね、きっとそうなんだろうって、信じてる。信じさせてくれた人がいるのよ。」

「誰、その信じさせてくれた人って？」

瑠夏の探るような眼を啓子は頬笑みで返した。

「その人が瑠夏に会いたって待っているんだけど、病室に入れてもいい？」

「えっ、その人、私の知っている人なの？」

「そう、瑠夏の恩人。」

「恩人？」

瑠夏は、謎かけのような啓子の物言いが気に入らなかった。ふうつと頬をふくらませると、拗ねたように言った。

「もう、誰でもいいから入れていいよ。会おうじゃないの。」

腕組みをして面会人を待つ仕草をする瑠夏に、啓子は笑った。

「じゃあ、連れて来るわね。支度するまでちょっと待っていて。」

啓子は、病室の内側のドアを閉め、それから外側のドアを開けた。

「いいわよ、入って。」

啓子が手招きをすると、劉生は頷いて近づいてきた。劉生が、こたばを発しようとするので啓子が人さし指を口にあてて止めた。劉生は、出しかけたことばをのみこんだ。

声を出しちゃうのなのかな？

劉生は、ジェスチャーで促されるまま、啓子の靴のそばに自分の靴を並べて脱ぐと、軽く頭をあげて音をたてないように病室の中に入った。病室の中は、2重ドアになっていた。1つ目のドアの内側にはスリッパがあつて、啓子はジェスチャーでそれを履くように伝えると、部屋の隅にある水道の方へと連れてこられた。

「いい？私が教える通りに手を洗ってね。」

啓子のことばに劉生は頷いた。啓子は、相変わらず声を出すなど

唇に人さし指をあてている。劉生は、なんの疑いを持つことをなく啓子の指示に従った。

「まず、ここに手をかざすとぬるま湯が出てくるから、それで手を洗って。それからこのエプロンを着けて、使い捨ての手袋をはめる。そしてマスクをする。うん、準備OKね。ここで面会できるのはひとりだけだから、私は、いったん外に出ているわね。私が出たら、中に入って。」

啓子の指示通りに支度を終えると、劉生は啓子がエプロンや手袋をはずして外へ出るまで待った。

奥のドアの向こうに瑠夏がいる。

そう思うと胸が早鐘をうち出した。中庭で会ってからまだ何時間も経っていないはずなのに、なんだか怖気づいてしまう。手袋の内側がじつとりと汗ばんだのは、部屋が暖かいせいばかりではなかった。

『石田君は、瑠夏のこと、好きなの？』

不意に啓子のことばが浮かんだ。劉生は、自然に顔が赤くなるのを止められなかった。胸の鼓動が啓子に聞こえてしまいそうで不安だった。

静まれ、俺の心臓。落ちつけ、落ちつくんだ。

必死に自分に言い聞かせる。だが、言い聞かせようとすればするほど、鼓動は早まり、顔は赤くなる。終いには、冷や汗が出てきた。

瑠夏のことになると、なぜかこうなることを劉生は認めざるを得なかった。

『石田君は、瑠夏のこと、好きなの？』

また、啓子のことばが脳裏をよぎる。

ああ、そうなのか。

俺は、きっと、瑠夏が好きなんだ。今日、初めてしゃべったばかりの瑠夏に恋をしてしまったんだ。

とうとう劉生は自分の気持ちを認めた。

増夏の心1（前書き）

あとの話の都合上、この話の内容を変えました。すみません。

瑠夏の心1

啓子は、劉生に合図をして病室の外へ出た。

劉生は、啓子がドアを閉めるのを見て、内側のドアをロックしようとした。だが、劉生の手はドアをロックする前に止まってしまった。

軽く握った手は震えている。心臓はいよいよオーバードライブ気味になってきた。瑠夏に会うことを妙に意識してしまっている自分に戸惑った。

劉生は、一度手を下げて深呼吸をした。肺に新鮮な空気が送り込まれると、少し震えが止まった。

何、緊張しているんだ、俺は。ここで突っ立っていてもどうしようもないだろ。瑠夏は俺のこと何とも思っていないのに、滑稽すぎる。気楽にいけ。

自分に言い聞かせると、ドアをノックした。

「びんぞ。」

中から瑠夏の声が聞こえた。

びくん

瑠夏の声に反応して、落ち着いたはずの心臓がはねる。

劉生は、おじけそうになる自分に叱咤してドアの取っ手を横に引いた。

「よお。」

「なんだ、劉生なの？」

瑠夏は、ドアを開けて顔を覗かせた劉生を見て笑った。劉生は、なんだ、と言われて一瞬ひるんだが、気を取り直して話しかけた。

「もう、大丈夫なのか？どこか苦しくないか？」

劉生は、後ろ手でドアを閉めながらまっすぐ瑠夏を見つめた。劉生の目が心配そうに自分を見ているのに瑠夏は少し照れた。

「ごめんね、心配かけて。驚いたでしょ、突然、目の前で倒れちゃって。」

「ああ、驚いた。真っ青な顔をして震えているんだもん。このまま大変な事になったらどうしようって思って、かなり焦った。」

「そうだろうね、ほんとに、ごめん。」

「気にしなくていいよ。る……る……るっ、瑠夏、が大丈夫なら、それで。」

「瑠夏って、呼びにくい？」

「あっ、やっ、そんなこと、ない。俺、女の子を名前で呼ぶなんてこと、今までなかったから、慣れてなくて。」

劉生は、頭を掻きながらそう弁解した。

「私も入院する前は、男の子を名前で呼び捨てなんてしなかったよ。そんなふうと呼べる彼氏もいなかったし。」

「えっ、るっ、る、瑠夏、つき合ったこと、ないの?」

「ないよ、悪い?」

瑠夏は、劉生を上目づかに睨んだ。

「い、いやっ、悪いなんてこと、ない。俺だって、ないし。」

「うん、まあ、劉生の彼女になってくれそうな奇特な子は、いないだろうねえ。」

「ひどいな、瑠夏。なんだよ、それ、いくら事実でも傷つくだろ。」

「ぶっ、事実って認めるんだ。潔いね。」

「そりゃ、な。この見てくれだし。って、なんでこんな話になってんだ?」

劉生が、軽口でそう言うと、瑠夏はくっくつと笑いだした。

「まっ、いいじゃない。こんな他愛もないおしゃべりのおかげで、劉生、私の名前呼ぶの、慣れたみたいだし。」

「えっ、慣れるって、俺、瑠夏のこと、名前で呼んだ?」

「ぷはっ、ほらっ、今だって、瑠夏って言った。」

「はあっ？あっ、そ、そうだな・・・はは、ほんとだ。」

劉生は、赤くなる自分を笑いでごまかそうとした。そんな劉生を見て瑠夏は自然と和んでいく自分を発見して驚いた。

劉生とは、今日が初対面なのに、そんな気がしない。不思議だな。劉生って、ぱつと見、和やかにおしゃべりできる風貌じゃないのに、話しやすい。自然にことばが出てくる。

「まあ、さ、立ち話も何だから、座ったら？」

「ああ、そうだな・・・」

瑠夏は劉生に壁に立てかけてある椅子を指しながら言った。劉生は、瑠夏に言われるまま、壁際の椅子を瑠夏のベッドの方に向かってきた。

瑠夏が元気なのを確かめたら、早々に病室を出るつもりだった。やっと落ち着いてきた瑠夏の体に負担をかけたくなかった。だが、その考えを心は簡単に裏切ってしまう。

まだ、瑠夏の傍にいたい。もっと瑠夏と話していたい。

その気持ちに負けて、劉生はちゃっかりと椅子に座っていたのだ。

「劉生、劉生に聞きたいことがある。いい？」

劉生が椅子に座ると同時に瑠夏が聞いた。

「なに？」

「あのね、劉生、私が治療している間、私のお母さんと話してたでしょ？どんな話をしたの？」

唐突な質問に劉生はまごついた。

「どんなんて……、べつに普通に世間話だけ。」

劉生がそう言うと、瑠夏はむっとした顔で反論した。

「そんなはずない。ただの世間話をするためにお母さんが私の傍を離れるわけないし、だいいち、あんなこと言うはずないもの。」

「あんなこと？」

眉をひそめて聞き返す劉生に、瑠夏は頷いた。

「お母さんが、私が病室を抜け出して外に出ることを、今までは、私が無茶をしてるんだって思っていたけど、今は、そうじゃなかったって信じてるって。」

「うん、それで？」

「お母さんがそう言ったから、どうして信じてくれたのかって聞いたら、信じさせてくれた人がいるって。」

「ふん、そうなんだ。」

「それで、私、信じさせてくれた人って、誰なの？って聞いたら、その人が私に会いたいって外で待ってるって言ったの。」

「なるほどね。で？」

どうやら劉生は、それが自分のことを言っているのだとは思っていないらしい。瑠夏は、そんな劉生を見てぷつと吹き出した。

「？、瑠夏？」

「劉生。」

「えっ？」

「その人って、劉生なの。」

「えっっ？なんで俺？俺は、本橋さんに、たいした話なんかしてないけど。」

劉生が驚きの声をあげた。

「だけど、確かにお母さんはそう言ったの。だから、劉生、教えて。一体お母さんとどんな話をしたの？」

劉生は、瑠夏に詰め寄られて困った。

どんな話も何も、俺、なにを話した？瑠夏と会った時のことと、瑠夏は無茶はしていないってことと……

考え込んでしまった劉生に、瑠夏はじれったくなって、もう一度聞き返した。

「劉生、思いだして、お母さんに話したこと。」

「話したことって・・・今日、瑠夏と会ったことと、1週間前の」とと、木からパワーもらってるってこと・・・ぐらいいかな。」

「それよ。」

「どれ？」

「木からパワーもらってるってこと。どんな話なの？」

瑠夏が話を促すように身を乗り出してきた。また瑠夏の方が近くになって、劉生は後ろに身をそらせた。

「は、話すから、もう少し離れて。」

劉生にそう言われて瑠夏は少し身を引いた。瑠夏との距離が開いたので、劉生はほっと小さく息を吐いた。

自分が俺の心臓を止めそうになっていること知らないとはいえ、瑠夏の方が近づくのはほんと困る。不整脈が出ているみたいに心臓の鼓動が乱れているのが自分でもわかる。俺、自分では強心臓だっと思ってたけど、結構、弱いのかもしいないな。

話すと言ったまま、黙ってしまった劉生に瑠夏はまた顔を近づけた。

「劉生つてば、早く。」

ふたたび息がかかるくらい近くに瑠夏を感じて胸が苦しくなり、劉生は息が止まりそうになった。

「わ、わかつたって。だから、離れてって。」

「ほんとに話す？」

「話すから。」

「すぐにだよ。」

「すぐに。」

「よし。」

瑠夏は、頷くと、ベッドに横になり枕に頭をおいて劉生を見た。瑠夏が、明るいこととは裏腹にベッドに横になったのを見て、劉生は心配になった。

「瑠夏、疲れた？それとも具合、悪くなったのか？」

「……少し疲れた。だからこのまま聞くな。でも、心配しないで。」

「誰か呼ぼうか？」

「いい、平気。それより、話を聞かせて。早く。」

「わかった。でも、きつくなったら、すぐに言えよ。」

「うん。」

劉生は、瑠夏に変化があったらすぐにナースコールを押すつもりで、瑠夏の様子をつかがいながら話し始めた。

瑠夏の心1（後書き）

後半部分をいっぱい直しました。先に読んでくださった方々には面倒をおかけしてすみません。

瑠夏の心2（前書き）

この話の前の話、「瑠夏の心1」を大きく変更しました。この話を
読んで、あれ？と思われたなら、1を読み直してください。

瑠夏の心2

「じつは俺、瑠夏のことを1週間前から知っていた。」

「1週間前？」

劉生は頷いた。

「1週間前に・・・会ったことあった？どこで？劉生の顔は、一度会ったら忘れられないと思うけど、覚えがない。」

瑠夏が、劉生を指さしてそう言ったので、劉生は、うっと詰まった。

「今のはほめ言葉じゃないよな。一度会ったらって。まあ、いいや。ここでいじけてたら話が進まないからな。瑠夏は俺のこと見てないから。俺が一方的に知っているだけ。」

「私を・・・どこかで見かけたってこと？」

「そう。1週間前、瑠夏、今日と同じように中庭にいただろう？」

「えっ、ああ、うん。」

「その時のこと、6階のじいさんの部屋から見てたんだ、俺。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

瑠夏はなにも言わずに劉生を見ていた。

「あの日、瑠夏は中庭の木をハグしていただろ？」

「ハグ・・・？や、単に抱きついてただけだけど。ハグってもんじゃ・・・」

「あれは、ハグだよ。瑠夏は、う・・・んと、そう、ちょっとときぎな言い方だけど、愛おしそうに木を抱きしめていた。それも一本だけじゃなく、何本も。でさ、木から木へと動く瑠夏が、まるでダンスのステップを踏んでいるみたいで、きれいだった。」

ダンスのステップだの、きれいなのということばが、劉生の口から飛び出して、瑠夏は、なにも飲んでもいないのに、むせそうになった。

劉生つたら、顔に似合わないせりふを真顔で・・・それに、きれいって、よくも本人を前にしてさらっと言ってくれる・・・恥ずかしいでしょ。

少しだけ視線をそらせて赤くなる瑠夏にはおかまいなしに、劉生は話を続けた。

「きれいで・・・目が放せなかった。あの子はハグして自分の愛情を木に注いでいて、それに応えるように、木はあの子にパワーをあげているんだなって思ったんだ。木だけじゃない。葉っぱも空気も瑠夏を包み込んでいて、そこだけ日常の喧騒から切り離されているように・・・俺、木が羨ましかった。」

「はあ？木が羨ましい？」

「うん。木が羨ましかった。俺もあんな風に抱きしめられたいな
て……っ」

劉生は、そこまで言って、自分がなにを話したのかを自覚した。
顔が火を吹くように赤くなる。瑠夏の顔を見れなくなって横を向い
て黙った。

瑠夏は、耳まで赤くなっている劉生を見ながら、自分の顔も赤く
なっているのがわかった。

「う、ごめん、変な事言って。」

劉生が横を向きながら謝った。

「い、いいよ、別に。」

ぎこちない空気が広がり、瑠夏の態度が硬くなる。劉生は、口を
滑らせたことを後悔した。

「軽く、聞き流してほしい。頼む。」

劉生のことは、瑠夏には渡りに船だった。今は、異性を意識さ
せることはほらない。誰にもそんな意識をしたくなかった。友だ
ち以上の相手は、ほらない。瑠夏はそう心に誓っていた。

「そうだね。まあ、sonだけでかけりゃ、中庭のケヤキの木とそう
たいして変わらないからね。うん。木と同じようにハグできるかも。」

瑠夏の軽口は、劉生に安堵と失意をもたらした。

せつかく瑠夏が気まずい空気を壊してくれたのに、何で俺の心はきゅっと痛んでいるんだ。また話せる雰囲気になって、喜ぶべきだろう。

劉生は、無意識に沈みそうになる心に叱咤して、口を開いた。

「……本橋さんが、瑠夏は、最近、無茶ばかりしてるから、止められているのに外に出て草木に触れるのは、自暴自棄になっているように見えるって話してたから、俺は、そうは思わないって言ったんだ。」

「どうして、そうは思わないって思ったの？」

「あの時の瑠夏の雰囲気や表情は、とても穏やかで楽しそうだった。遠目に見ても、それはわかった。ああ、あの子は、生きることの大切さを知っている子なんだって思った。」

劉生のことは、瑠夏の胸を疼かせた。

だれにも自分の心の内のことは話したことなんか、ない。木からパワーをもらっている話だって、お母さんだけじゃなく、これまで話した人、みんなが信じてくれなかった。みんな、お母さんと同じリアクションだった。それなのに、どうして劉生にはわかったの？

「……今の話は、1週間前のことだよ、今日のことじゃないく？」

「そうだよ。」

「劉生は・・・遠くから私を見ただけでそう思ったの？ほんとに？」

「ほんとに。」

劉生は、力強く頷いた。そして、話を続けた。

「瑠夏は、自然とひとつになることで、自然の一部として自分が生きていくことを実感したくて、木にハグしたり、木の葉のシャワーを浴びたりしたんだろ？」

っ！

瑠夏は、自分の考えていることを今日会ったばかりの劉生が言いあてたことにことばを詰まらせた。

「・・・どうして、どうして？今まで、だれもそんなふうには思わなかった。私が茶化しながらでもちゃんと正直に言っても、だれもそう言ってはくれなかった。なのに、どうして劉生にはわかったちゃうの？」

「たぶん・・・負った傷は違って、瑠夏も俺も心におんなじだけ大きな傷があるからじゃないかな。」

「心の・・・傷？」

「そう、心の傷。」

劉生は、瑠夏をまっすぐに見据えて、居ずまいを正した。

瑠夏の心3 (前書き)

劉生に惹かれそうになる自分の心にブレーキをかけてしまう瑠夏の切ない心が、私の拙い文で伝わっているといいのですが・・・

瑠夏の心3

「俺もずっと、誰からも信じてもらえないもどかしさ……違
うな。悔しさだ。信じてもらえない悔しさを抱えて生きてきたから。
俺を信じない人の代表が、俺のおやじ。」

「……………」

「瑠夏は、さつき、俺が、ヤンキーかって聞いた後、そんなふうに見
えることで嫌な思いをいっぱいしたかって聞いただろ。」

瑠夏は、だまって頷いた。

「さつきは、軽くそうだって言ったけど、ほんとうは、他人と関わ
り合いになるのを避けるくらいいやな思いをいっぱいしたんだ。自
分で意識して他人を避けているのに、どういうわけか、トラブルが
向こうからやってくるんだよな。そして、トラブルになるたびに、
誰もかれもが相手の言い分しか信じようとしな。俺が、どんなに
自分を信じてくれと言っても、誰も相手にしてくれない。まあ、身
内ですら信じてくれないんだから、他人が信じてくれるわけがない
んだけどな。」

「劉生……………」

瑠夏は、すっと手を伸ばして劉生の手に触れた。劉生は、びくつ
と体を震わすと、自分の手を引っこめようとした。瑠夏の手がそれ
を許さなかった。劉生の手を素早く握って笑った。

劉生は、こみ上げてくるものをぐっと抑えて、力なく笑い返した。

「・・・・・・・・やっぱり瑠夏は違うんだな。」

「えっ？」

「瑠夏は、俺の心の傷をわかってくれる。さっきもそうだった。瑠夏はあまり意識しないで言ったんだろうけど、ヤンキーみたいな凄味のある顔だけど、黒いオーラは出ていないから、ちょっとからかったくらいで俺は怒ったりなんかしないって。」

「あれは・・・・、だって、実際、そうだったでしょ？」

「瑠夏以外のやつらは、そんなこと言わないし、思わない。俺はこの1週間、木にハグしていた瑠夏に会いたくて探していた。だけど、いざ見つけると、やっぱり瑠夏も他のやつらと同じで、俺に怯えるかもしれないって思ったら、すぐには近づけなかった。ところが、瑠夏は俺を見て怯えるどころか、からかってくるんだもんな。正直、面食らったよ。初対面で俺を怖がらないのは初めてで、あんなに話しやすかったのも初めてだった。」

瑠夏はなにも言わずに、握っている手に力を込めた。劉生は、その手のぬくもりが心地よかった。その心地よさを瑠夏に伝えたかった。普段、滅多に自分の想いをことばにしない劉生にしては珍しい決断だった。

瑠夏といると、自分の内面を簡単にことばにできてしまう。それに、それが嫌じゃないんだから不思議だよな。

「ほら、瑠夏は、その手で俺を元気づけようとする。瑠夏、俺、今、すごく気持ちが悪く落ち着いているんだ。瑠夏の手、心地いい。瑠夏の

手からパワーをもらっているのがわかるんだ。だから、俺も瑠夏に返したいと思う。瑠夏の手を包み込んであげたいって・・・思うんだ。あの木のように。瑠夏、俺のパワー伝わってるか？」

劉生は、瑠夏の手を握り返した。劉生の大きな手に瑠夏の細くて白い手はすっぽりと覆われていた。優しく、慈しむように握る劉生の手は、あたたかくて心が落ち着いた。

瑠夏は戸惑った。自分の中に長く封印してきた思いが、戒めを解いて出てこようとする。

だめ。

私は、誰にも心を許したくない。

誰かを・・・

誰かを心の中に入れてはいけない。

だって、私は・・・

その人の思いに応えられない。

瑠夏は、必死に戒めを強くした。もし、誰かと心を通わせ合って、自分の病気が原因で相手が離れていったとしたら、もう、頑張る気力を失ってしまう。

これ以上深く心に傷を負いたくない。白血病ってだけで失ったものがたくさんある。これ以上失うくらいなら、最初から得る必要なんかない。なければ失わないもの。

瑠夏は、握られた手をふりほどくと、掛け布団の中に隠した。

「ごめん、劉生。もう、限界見たい。ちょっと休みたいから、お母さんをお呼びしてくれる？」

瑠夏は布団を顔の上まで引き上げると劉生に背中を向けた。

「……わかった。ごめん、瑠夏、無理させて。」

劉生は、静かに立ちあがった。

ふりほどかれた手は、守るべきものを失って心もとない感じがした。自分に向けられた瑠夏の背中が、瑠夏の気持ちを代弁している。

これ以上は踏み込むな

背中はそう語っていた。

だが、劉生は諦めきれなかった。このまま瑠夏との繋がりを絶ちたくない。だめもとでいいから、聞いてみよう。

「瑠夏……、また、会いに来てもいいか？」

小さくて震えるような自分の声に劉生は驚いた。こんなに心細くて不安な声なんか、出したことないのに。

瑠夏は小さく頷いた。それは少しでも目を放していれば見逃すくらいに小さな動きだった。だが、劉生は見逃さない。ほっと安堵のため息をついた。

「じゃあ、瑠夏、またな。」

劉生は、音を立てずにドアから出ると、手袋とエプロンをはずして外側のドアを開いた。

外に出てあたりを見回したが、啓子の姿が見えない。劉生は、そのまま病棟を出て、さつき啓子と話したパントリーを覗いた。啓子は、さつきの席の近くに座って、窓の外を眺めていた。劉生は、啓子の傍まで行って声をかけた。

「本橋さん、長い時間すみません。瑠夏が呼んでいます。」

啓子は、窓の外から劉生へと視線を移した。

「話はもう終わったの？」

「はい、時計を見て驚きました。俺、30分くらい病室にいたんですね。すみません。瑠夏は具合が悪いのに無理をさせてしまった。」

啓子は黙って首を横にふった。

「あの子は自分の具合をよくわかってるわ。大丈夫よ。」

「でも、最後は疲れたって言ってました。やっぱり無理をしたんじゃないかと。本橋さんと呼んでいます。」

「そうなの？わかった。呼びに来てくれてありがとう。」

「いえ。」

啓子は立ちあがると、劉生に手をふって病棟の方へ向かった。劉

生は、それを見送った。途中、啓子がふり向いた。

「石田君、また、瑠夏に会いに来る？」

「はい、また来ます。」

はっきりと返事をする劉生に啓子は笑った。劉生も笑い返す。

啓子は、瑠夏の病室に入り、娘の様子をつかがった。瑠夏は、入り口に背中を向けて横になっていた。

瑠夏、泣いているの？

瑠夏の背中は一瞬に震えている。時折、鼻をすする音がする。その様子から、啓子は瑠夏が声を出さずに泣いていることがわかった。

「瑠夏？どうしたの？」

啓子はベッドの端に腰をかけると、そっと瑠夏の肩に手を置いた。

瑠夏は、なにも言わない。

「瑠夏？」

もう一度、声をかけた。

「……………傷つけた。」

瑠夏は、ぼつりと呟いた。

「え？」

啓子が聞き返すと、瑠夏はまた小さな声で言った。

「劉生を……傷つけた。」

「石田君を？彼、そんなふうには見えなかったけど？」

「劉生が他人に本心を見せるわけ、ない。」

「あら、そうなの？」

瑠夏は背中を向けたまま頷いた。

「でも、瑠夏には石田君が傷ついたって、わかるのね。」

「わかるよ。同じだから。」

「同じ？」

「そう、劉生と私、心に同じものを持っている。」

「瑠夏がそう思つの？」

「劉生もわかってた。」

「じゃあ、ふたりだけは、お互いに同じものを持ってるとわかったのね。」

瑠夏が頷く。

「そっ……」

啓子は、目を細めて微笑むと、瑠夏の肩を優しく撫でた。

この子は、自分が石田君のことを求めているってまだ心の中で認めてはいないのだろう。これから先、どうなるかはわからないけど、石田君の存在が瑠夏に希望を与えてくれると信じたい。白血病になったことで、この子が諦めようとしている女の子としての楽しみを石田君が思い起こさせてくれるといいのだけれど。

それは、母の切望だった。

啓子は、そっと肩を抱いて、瑠夏の心のうちにある苦しみを少しでも和らげようとした。

告白（前書き）

ついに、玉碎覚悟で劉生は決心します。劉生を応援してください。

告白

初めて会った日から、劉生の日課の中に、興生の見舞いのほかに瑠夏の病室を訪ねることが追加された。

劉生は、毎日、この日課を欠かさない。どんなに忙しくてもふたりの見舞いには行くようにした。

病院へ日参するうちに、劉生は、瑠夏に会える日と会えない日があることを知った。会えない時には、啓子に瑠夏の様子を聞き、会える日には病室に入れてもらった。

瑠夏に会える日は、劉生には何よりも優先させたい特別な日になった。他愛のないおしゃべりをするだけのわずか20〜30分の時間が、劉生の至福の時だった。

瑠夏は、劉生の学校での様子を特に聞きたがった。

学校でのことは、劉生にはことさら面白い話はないのだが、瑠夏にはそうではないらしい。

数学の独身教師が、いつもは身につけない鼻をつくコロナの匂いをさせる時は、合コンのある日だとか、学校には七不思議ならぬ三不思議なるものがあるらしいとか、そんな話が瑠夏にはうける。

どれも苦手な話題ばかりだったので、ネタを仕入れるためにクラスの女子の話に耳をそばだてたり、苦痛なのを承知で、男子の下ネタ中心の会話に交じったりした。とにかく学校中を歩き回って面白いネタはないかと探した。

かなり神経を使うので、一日の終わりにはぐったりと疲れ果ててしまう。

1か月前に、瑠夏に会った日、劉生は思わずネタを仕入れる大変さをぼろっと瑠夏に白状してしまった。

「俺が、屋上で弁当を食べ終わって昼寝していると、階段の方から化学の女教師を噂する声が聞こえてさ、面白そうだったから、階段の方まで忍んで行って女子たちの話を聞いていたんだ。そしたら、聞き耳を立てていることがばれて大騒ぎされて、慌てて逃げ出したんだ。俺だとばれると、別方面での尋問が始まるから。」

ただの世間話をしたつもりだったのに、瑠夏はふっと顔を陰らせた。

「私と会うのは面倒でしょ。」

そのことばは、案にもう来なくてもいいことを告げているように思えた。

劉生の胸に苦みが広がる。

いつも、何かの拍子に瑠夏は自分を遠ざけるようなことを言う。

それが劉生の心に影を落とした。

瑠夏が自分の口からもう来るなど言うのなら、瑠夏には会いに行けないが、そうでないうちは、瑠夏の好意に甘えていたい。

まだ、見込みはあるはずだ。ほんとうに瑠夏が俺を遠ざけようと思っているなら、きっぱりとそう言うはずだし、面会にも応じないでも、どうしたら、瑠夏に自分を受け入れてもらえるのかわからなかった。

どうすればいい？

劉生は、答えのない問いを繰り返し、繰り返し自分にしていた。

突破口の見つからないもどかしさを隠しつつ、日々が過ぎて行く。

冬のはしりの風が冷たい日の午後、劉生は、学校からまっすぐに病院へと向かった。課外講座で解けない問題があり、悪戦苦闘しているうちに、気がつけば日はとっぷりと暮れて、街には明かりが灯っていた。

やばい、この時間じゃ、面会ぎりぎりかな。じいさんのところは、面会時間過ぎても大目に見てくれるだろうけど、瑠夏のところはそうはいかない。

今日は、久しぶりに瑠夏が準クリーンルームから一般病室に移っている日だ。今からでも少しは瑠夏の顔が見られる。

劉生は、逸る心を抑えながら病院へと急いだ。

病室に着くと、面会時間終了まであと10分だった。劉生は、3

段飛ばしに階段を上ってきて乱れた息を整えてドアをノックした。

「はい。」

中から啓子の声がした。

「石田です。」

劉生が名前を告げると、ドアが開いた。

「ちょうどよかった。私は売店で買う物があるの。石田君、戻るまで、瑠夏の相手をしていてくれる?」

「あ、はい。」

劉生が返答に、啓子は財布を取って病室を出た。

「久しぶり。どう、調子は?」

劉生が聞くと、瑠夏は笑顔を見せた。

「調子はいいよ。今度は、あんまりしんどくなかった。でも、口内炎がひどいから、おいしいもの食べられないのが辛いかな。」

「そうなんだ。じゃあ、食べ物の話はNGだな。」

「いいよ、気にしなくても。劉生の話聞いて、食べたつもりになって楽しむから。」

「いや、俺、学校から直で来たから腹が減ってて、食べ物の話なん

か思い出しただけでも腹の虫が騒ぐ。」

言い終わらないうちに、劉生のお中がぐっぐうとうなった。

ぷつと、瑠夏は嘔き出した。

「正直なお腹だね。食べ物ってことばを出しただけでほんとに鳴るんだもん。」

「//////////悪い、腹なんか鳴らして。」

劉生は自分に舌打ちをした。顔が火を噴いたように真っ赤になった。

ダメだな、俺。好きな女の子の前で腹を鳴らすなんて、はあ、かっこ悪いにもほどがある。

瑠夏は、しばらく笑っていたが、劉生が赤くなってうつむいたのを見て、話題を変えた。

「今日は遅かったね。」

話題が変わって劉生はほっとした。

「うん、今日の課外講座の数学で、どうしても解けない問題があった。解けるまで粘っていたらとくに暗くなっていて焦った。面会時間終了までほとんど猶予がなかったから、自転車すっ飛ばしてきた。」

「そんな、無理しなくていいのに。」

まただ。

瑠夏のことばは、劉生の胸に小さく刺さった。

「や、無理なんかしてないよ。今日は瑠夏がここに移ってくるってわかっていたから、1分でもいいから会いたかった。」

劉生は、意識して明るく言った。

「……………どうして?」

瑠夏が絞り出すように呟いた。

「え?」

さっきまで笑って話していた瑠夏は影をひそめ、辛い表情の瑠夏が劉生を見ていた。

「どうして?劉生。劉生は、なぜ、そうまでして私に会いに来るの?」

唐突すぎる質問に劉生は動揺しかけた。だが、瑠夏の目を見た時、ここで怯んだら、一生後悔すると思った。

劉生は、覚悟を決めた。

瑠夏の好意に甘えてばかりいるのは、もうやめよう。

もう、言うてもいい。

これで、NOを突きつけられたら、俺は、諦める。

「ぐくりと喉を鳴らし、劉生はせり上がりそうになる心臓の鼓動を聞きながら、口を開いた。

「好きだから。俺、瑠夏のことが好きだから。」

劉生の告白を聞いて、瑠夏は泣き出した。

別れ

瑠夏は、両手で顔を覆って、声を出さずに泣いていた。瑠夏の細い肩が震えている。劉生は、たまらず瑠夏を抱きしめていた。

聞きたくなかった。

劉生がずっと口にしなかったから安心していただけなのに。

ずっと、このまま友だちでいたかった。

でも、劉生はその関係を壊した。

もう、今までのままでは、いられない。

心地よかった劉生とのひと時を私は失ってしまっ。

涙はあとからあとから溢れ出て、瑠夏の頬を濡らした。

劉生は、瑠夏を抱きしめて背中をゆっくりと撫でた。

「瑠夏、ごめん……。俺が好きだって言えば、瑠夏が困ることはわかっていた。告白したのは、俺のわがままだ。だから……。聞き流してくれて、いい。」

心とは全く正反対のことを口にしながら、自分のことばで傷つけられた。

いき場のない想いの重さに耐えかねて、ついに口にしてしまった

瑠夏への恋心。口に出したところで、俺の想いは一方通行だ。それがわかっていても抑えきれなかった。

俺が好きだと言えば、応えられない瑠夏はきつと困る。それがわかっていても、伝えたかった。

瑠夏のぬくもりを全身で感じる。

それは、今日が最初で最後。

もう、瑠夏に会うこともできないかもしれない。

告白したことを後悔したくないから、今、この腕の中にいる瑠夏
の存在を全身で感じ取って覚えておこう。

「瑠夏………」

想いが溢れてことばとなった。

「どっしって？」

さっきと同じ問いが瑠夏の口から漏れる。

「だから………」

「違う。」

瑠夏が劉生のことばを遮った。

「私が聞きたいのは、なんで、私に会いにくるのかってことじゃな

い。なんで、私なのってこと。」

瑠夏は、自分を抱きしめていた劉生を両手をつっぱって押しやった。ふたりの間に距離ができた。瑠夏は、泣きはらした瞳で劉生を見上げた。

「私は……ずっと劉生と友だちでいたかった。」

「わかってる。」

「わかってない。」

瑠夏は、声を荒げた。

「劉生は、わかってない。私は、誰かを男として好きになんかならない。どうして私たちの間に恋愛を持ち込もうとするの?」

「瑠夏、それは違う。瑠夏は誰かを好きになれるんだ。それが俺じやなかったただけだ。」

「違う。そうじゃ、ない。」

「そうなんだよ。瑠夏は、自分は治すのが難しい病気だから人を好きになつてはいけないって思いこんでいるかもしれないけど、誰かを好きになる時は、たとえどんな妨害や制限があっても自然と好きになっているもんなんだ。俺が、そうだったように。」

瑠夏の顔に苦痛がひろがる。

そうじゃない……

劉生は、瑠夏の肩を掴み、瑠夏から目をそらさず話を続けた。

「俺は、これまでのいろんなことから軽く人間不審みたになつていた。特に女の子は、あからさまに表情で嫌悪感や怯えを表すから苦手で、女の子を好きになるなんて一生ないって思っていた。」

「……………」

「だけど、瑠夏を初めてみた時、そんな思いはどこかに消えていて、瑠夏に近づきたい、瑠夏の瞳に俺が映るようにさせたいって、今まで経験した事のない感情に頭を支配されていた。」

瑠夏の瞳が潤み始める。

「こんな想いを抱いていても叶うわけないんだからと、何度も諦めようとしたんだ。瑠夏の望むように、今のまま、友だち関係でいる方がいいんだと自分に言い聞かせた。」

劉生から視線をそらさない瑠夏の瞳から、涙が一筋零れる。

「……………でも、この想いだけは、俺にもコントロールできない。友だちでいることに満足できない。それから半歩でもいいから先に進みたいって思ってしまうんだ。人を好きになるって、そういうことなんだ。」

瑠夏は、目を伏せ、力なく首を横にふるとニット帽を取った。髪の毛のない瑠夏の頭が劉生の前にさらされる。

「劉生は、私の気持ちをぜんぜんわかっていない。私は、好きにな

れないなんて思っていない。好きにならないって思ってるんだもの。見て、劉生、これが治療の代償。」

瑠夏は、涙に声を震わせながら、また劉生に視線を向けた。

「瑠夏、わかってるから、それ、かぶって……」

瑠夏の手にあるニット帽を取ってかぶせようとした。

「わかってない！」

劉生の手を振り払うと、瑠夏は小さく叫んだ。

「私のこの頭は、化学治療の時に抜け落ちたものじゃない。自分でスキンヘッドにしたの。この頭にする時、私は髪の毛と一緒に誰かに恋をする気持ちも一緒に切り捨てた。」

「瑠夏……」

「どうしても、また、完全寛解になって、治りたかった。治療に集中して、治すことだけを考えるには、他の感情は邪魔なだけ。恋愛って、ときめきだけじゃないでしょ？好きな人のことを思うと、ちよつとしたことで不安になるし、嫉妬もする。そんな感情にふりまわされて治療に影響させたくない。だから、封印したの。」

「……」

「移植が終わって無事に退院するまで、私は、誰も好きになつたりしない。でも、恋愛感情のない友だちなら……友だちならいっしょにいられる。そう思っていた。劉生との時間は、私には心地

よくて大切な時間だった。だけど、それももう……」

瑠夏の射るような視線に、劉生の鼓動が跳ね上がる。

俺の一番聞きたくなかったことばを瑠夏は言おうとしている。

劉生の顔が歪む。わかっていたとはいえ、現実に関かされると思
うと苦痛が全身にひろがる。

不安が胸を覆い、劉生の心をむしばみ始めた。

聞きたくない。

覚悟して言ったはずなのに、もう、後悔している。

瑠夏、頼むから……

いわないでくれ という劉生の願いは、瑠夏のことばで打ち消さ
れた。

「私は、劉生の気持ちには応えられない。だから、はっきりと劉生
が自分の気持ちをことばにした以上、今までのようにはできない。

もう……」

ことばに詰まる自分の弱さにむち打って、瑠夏は、言いたくなか
ったひと言を口にした。

「もう、ここへは来ないで。」

瑠夏のひと言が、劉生の心を貫いた。

心が悲鳴を上げる。

『もう、ここへは来ないで。』

聞きたくなかったことば。

そのことばが劉生の頭でこだまする。

自分でまいた種なんだ。

突きつけられたそのことばを劉生は受け止めるしかなかった。

拳を腕が強く浮き出るほど強く握って心に渦巻く感情を抑え込むと、力なく頷いた。

瑠夏に背を向け、ドアの取っ手を握る。

「今まで・・・ありがとう。」

それだけを口にすると、外に出た。

思い通りにならない(前書き)

瑠夏は、やっと自分の心を認めます。

思い通りにならない

劉生が顔を見せなくなつて3週間が過ぎた。

病院は、クリスマスモードに包まれ、きれいにデコレーションされたツリーや壁の装飾が、塞ぎがちになりそうな患者の心に癒しを感じさせていた。

「どう？このポスター、いいでしょ。買ってきたツリーと一緒に飾るとこの部屋もクリスマスモードになるわね。」

瑠奈が壁にラミネート加工されたポスターを張りながら妹に感想を聞いた。病室には、瑠維が瑠夏のためにセレクトしたクリスマスソングが静かに流れている。

「うん、ありがと。病室がにぎやかになって、うれしいよ。このツリーもかわいいし。」

瑠夏は、透明なドーム型の入れ物に入った小さなツリーを掌にのせて見ていた。ツリーには銀色の小さなラメのリボンがたくさんついていて、光の加減でキラキラ輝いていた。

きれい……いつかは、ほんとうのモミの木をこんなふうに飾ったツリーの下でクリスマスを過ごしたいな。

いつか叶えたい夢に想いを馳せてみても、楽しい家族とのひと時も、瑠夏の胸を満たしてはくれなかった。

なぜ、こんなにむなしさを感じるんだろう。

心にぽっかりとあいた穴は、なにをしても塞がらない。なにかを、どこかに置き忘れてきたような感覚が瑠夏の心に居すわり続けた。

劉生がいない。

私の目の前から消えたのは、劉生だけ。それ以外は、なにも変わらないのに、どうしてもこの部屋が色どりを失ったように思うんだらう。

なにかが、足りない。

いつもは狭いと思っていた病室が、広すぎて寒々として、空調が壊れて温度調節ができてないのかと思うほど、空気が冷たい。

窓の外に見える中庭の木々は、すっかり葉を落として冬支度を終えていた。

葉をすべて落として木肌がむき出しの木々は、寒さに震える私のよう。

だれかに温めて欲しくて、自分で自分を抱きしめる。

こんなことしたくらいでは、あたたかくなんかならないのに。

心を満たしてはくれないのに。

「瑠夏、寒いのか？」

瑠奈が心配そうに顔を覗きこむ。

「電気毛布、出そうか？」

瑠維が壁際の収納つきの長椅子を開けて、電気毛布を取り出そうとした。

「お姉ちゃん、大丈夫。電気毛布はいらない。布団をかぶればあつたかいから。ちょっと疲れたから横になるね。」

瑠夏は、布団の中に潜り込むと掛け布団で顔を半分覆った。

姉たちに悪いと思った。

ふたりの顔を見てしまえば、泣いてしまいそうだった。

いつもの辛い治療を終えて一般病室に戻ってきた私を元気づけようと、ミニツリーやポスター、それに大好きなチョコレートタルトまで用意してくれたのに、気持ちを晴らすことができない。

心の隙間は埋まらない。

それは、お姉ちゃんたちのせいじゃない。

泣きそうになる自分を悟られたくなくて、顔が隠れるくらい布団を引き上げた。

「冷えるから、これもかけとくね。」

瑠維が、厚手の毛布で掛け布団を覆った。

「ありがとう。」

泣きそうになるのを堪えて、それだけをやっと口にした。

「私たちは帰るから、少し眠って。明日、また来るね。」

ふたりがドアを閉めて出て行くのを見届けて、瑠夏は目を閉じた。
わかつている。

なにが足りないのか、自分が、なにを求めているのか。

ほんとは、わかつている。

この部屋からなくなったものは、劉生の気配。

いつも必ず顔を見せてくれた劉生は、もう来ない。

それは自分が望んだことで、自分から、もうここへ来るなど言っ
た。

治療に専念したいからと、自分が好きだと言ってくれた劉生を閉
めだしたのは、私だ。

でも

治療に専念したいなんて、嘘だ。

そんな殊勝な気持ちで劉生を拒んだんじゃない。

私は、怖かった。

この病室に縛り続けられている私に劉生が愛想を尽かしてしまうのが。

劉生が嫌になって自分から離れて行くのを見るくらいなら、自分から終わりにしよう。そんな自分勝手な理由で、私は劉生にさよならを言わせた。

友だちのままでいた今なら、まだ、さよならできると思っていた。すぐにいつもの日常に戻ることができるとたかをくくっていた。

だけど、それが間違いだとわかるまでに、その時間はかからなかった。

たった3日。

劉生の顔を見なくて我慢できたのは、たった3日だった。

その3日間だって、平気でいられたわけではなかった。

劉生と別れた次の日、瑠夏は外泊を許可された。

わずか一泊二日でも、自宅に帰れるのはうれしかった。それなのに、病室を空けたくないと思ったのだ。

もしかしたら、劉生が顔を見せてくれるかもしれない。

もし、顔を見せてくれたら、昨日のことなどなかったことのように振る舞えばいい。もう一度、劉生に、ここに来るなど言えない。自分では全く望んでいないことばを二度も口にできるほど、瑠夏は大人ではなった。

劉生が、心ない自分のことばに負けずに会いに来てくれるのであれば、それを受け入れようと思っていたのだ。

そのチャンスを願ってもいた。

私って自分勝手だ。自分で来るなって言うておいて、劉生が来たら許そうだなんて、どんだけ自己中なの。劉生の気持ちは？

私は、バカだ。

自分がやったことが、どれだけ劉生を傷つけたのか、わかってもしないで。自分の都合のいいことばっか考えて。

瑠夏は、病室に心残りしつつも一泊二日、自宅へ帰った。

翌日の夕方、病室へ戻った瑠夏は、劉生が訪れた痕跡がないか探した。部屋にメッセージが置かれてないか探し、ナースステーションで見舞客がきたかの確認までした。だが、劉生が来た様子はなかった。

別れたのは、つい2日前のことだもの。まだ、劉生だって気持ちの整理がつかないよね。そうだよ。でも、劉生のことだもの、明日くらいには来てくれるかも。

違う

このままで、いい。

劉生が来てくれて、それで、私、どうするの？劉生の想いに応えるの？それとも、友だちのままでもいいよって、残酷なことばで劉生を縛るの？劉生の気持ちも考えずに？

劉生の気持ちに応えられる自信は、ない。このままだと、自己中な自分が勝って劉生を傷つけることしかできない。

それなら、やっぱり、もう来ないでほしい。

心は千路に乱れ、瑠夏は思いどおりにならない自分の心に翻弄された。

外泊から戻った翌日も、劉生は来なかった。

1日中、心とは裏腹にドアにばかり気を取られる自分に呆れ、苛立った。

心が乱れたまま、劉生に会えなくなつて4日目を迎えた時、瑠夏は、自分の気持ちにふたをするのを諦めた。

もう、無理だ。

もう、とっくに友だちのままではなにかいらなかったんだ。

私は、劉生が好き。

自分は、この病院と自宅のわずかな世界でしか生きられない。それく比べて劉生には、自由な世界がある。劉生は、どこへでも行ける。誰とでも恋人になれる。私にだけ、気持ちを向けなくても楽しめるんだ。

それがわかっていたから、言えなかった。

認めたくなかった。

好きって認めてしまえば、私は劉生の世界に嫉妬してしまう。

私以外の女の人の存在にきつと心を焼きつくしてしまう。

劉生を束縛してしまう。

そんな感情を持つのも、それに振り回されるのも嫌だった。

だから、封印したのに。

もう、手遅れだったんだね。

封印して、別れを告げて、それでも私の心から劉生を締めだすことはできない。

瑠夏は、取り返しのつかないことをしたのだと、やっと悟った。

しかし、自分から劉生に会いに行くことはできない。

自分には、とてもそんな資格はない。

瑠夏は、さらに10日、迷った。迷っているうちに、次の治療が始まり、身動きが取れなくなった。

瑠維と瑠奈が帰った後、瑠夏は起き上がり、ぼんやりと窓の外を眺めた。

劉生と初めて会った中庭。

あの時は、落ち葉が舞っていた。

落ち葉の舞う中、劉生に会ったんだ。

初めて顔を合わせた時は、鋭い目と厳つい体がちよつと怖かった。でも、射すように見えた目は、ほんとうは優しさをたたえていた。

見た目とは違う人なんだと、すぐにわかった。だから、つい悪戯心がおこって、軽口で喋りかけた。そしたら、思った通りの人で会話が弾んだ。

劉生は、毎日おじいさんのお見舞いに来ていると言っていた。おじいさんへのお見舞いは、私のところへ来るようになってからも変わらなかった。毎日、私のところへ来て、それからおじいさんのところへ行った。

もし

うつん、劉生のことだもの。もし、じゃなく、今もおじいさんのところへは顔を出しているはずだ。

劉生が私のところへもう来ないつもだということとは、この2週間
でよくわかった。

それだけ、劉生を傷つけたのだから、仕方のないことなのだ。

だから、今度は、私がいに行く。

劉生に会いたって心をもう抑えたりしない。

そもそも再発して入院する時に、私は誓ったはずではないか。

病気だからとやりたいことを我慢して後悔なんかしたくないって。

瑠夏の瞳が、久しぶりに明るく輝いた。

中庭の木々は、瑠夏の決心を応援するように、風の力を借りて枝
を震わせ瑠夏にエールを送った。

会いたいの

クリスマスが目前に迫っているからと、服部先生は一時退院の許可をくれた。今度はクリスマスが終わるまで、1週間は家に帰れる。お母さんは喜んで、携帯でお父さんに知らせると、いそいそと退院の準備を始めた。

「よかったわね、瑠夏。クリスマスは治療のスケジュールが合わないければ病院だと思っていたから、思いがけないクリスマスプレゼントね。」

啓子の声が弾む。

「……お母さん、退院するの、もうしばらく待つてほしいんだけど。」

「え？」

啓子はトランクに衣類を詰める手を止めた。

「今は、どれくらい待つかわからないけど、できれば2日、ううん、もしかしたら3日待つてもらうかも。」

「瑠夏？」

てつきり一時退院を喜んでくれているとばかり思っていた瑠夏から、退院を待つてほしいといわれて啓子は困惑した。

瑠夏は、戸惑っている啓子にかまわず、備え付けのクローゼット

からダツフルコートを取ると、マスクをして部屋を出て行くこととした。

「待って、瑠夏。どこへ行くの？」

「劉生のおじいさんと」。

「は？石田君の？どうし……」

言いかけて啓子は口をつぐんだ。

この2週間、劉生の姿を見ていなかった。瑠夏の沈んだ顔を見てふたりの間に何かあったのだろうことはわかっていたが、啓子はあえて瑠夏に聞こうとはしなかった。

この子は、いつでも自分で決めて行動する。それが無茶、無謀なことではないことを教えてくれたのは、劉生だ。

だから、この子の好きにさせようと思つようになつた。

この子の生きる力になるのなら、悩むことも迷つことも必要なこと。私は、それを見守るだけ。

「……劉生に会いたいの。もしかしたら、おじいさんのところには来てるかもしれないから、行ってみる。で、会えなかったら、おじいさんに会いたいつて伝言を頼むつもり。今日、会えなくても明日また行ってみる。ぎりぎり待って、あさってまで頑張ってみたいの。」

「……わかった。でも瑠夏、行くの、ひとりで大丈夫？」

「うん。」

「そう、なら、いってらっしゃい。どうせ止めたって、目を盗んで行くのでしょう？でも、あまり長い時間は駄目よ。30分。それが限度。約束して。」

「わかった。………お母さん。」

「ん、なに？」

「ありがとう。」

瑠夏ははにかむように笑うと、外へ出た。

瑠夏は、階段を上がって6階の西病棟へと向かった。病棟のドアを開けて、特別室を探した。

ふと、劉生のおじいさんが退院していたらと、不安が頭をもたげた。もし、退院していたら、もう劉生と会うすべは、ない。

瑠夏は募る不安を心の奥に押しやりながら、病棟の左側の方から探し始めた。

特別室はすぐに見つかった。すばやくネームプレートに目をやるのと、空白になっていた。

不安が的中したのだろうか？

瑠夏の足元が揺れた。ふらつく体を支えるためにドアに手をつい

た。

かたん、と音がした。

「劉生かつ！」

中から男の人の声がする。

人が、いる。しかも、劉生って言ったよね。……………この部屋でいいみたい。

瑠夏は、ごくりと唾を飲み込むと、ドアをノックした。

「ん？なんだ、劉生じゃないのか？……………どうぞ、入って。」

瑠夏は、大きく深呼吸をしてドアを開けた。

「こんにちは……………」

声が震えて小さくなる。

顔を覗かせた色白の細い女の子に、興生と泰生は目を丸くした。

紺のダッフルコートを着てマスクしている女の子に、興生は心当たりがあった。

「こんにちは。どうぞ、入って。」

優しく笑い、手招きをする興生に、瑠夏はほっとした。

「失礼します。」

招きに応じて部屋の中に入り、軽く会釈をした。

部屋の中には、テーブルと一人掛けのいすが2脚あって、男の人がふたり腰かけていた。

瑠夏は一目見て、ふたりが親子だとわかった。

ふたりとも劉生に似ている。白髪の多い方がおじいさんで、黒髪の方がお父さん？

ふたりは対照的だった。

おじいさん？の方は、柔らかな表情で優しそうだったが、お父さん？の方は、自分を見定めるような鋭く警戒した表情をしていた。

「劉生に会いに来たのかな？」

おじいさん？の方が尋ねた。

唐突に目的を言いあてられて、瑠夏はうろたえた。

な、なんでわかったんだろう？

「あ、は、はい……あ、あの、なぜ、わかったんですか？」

詰まりながらも、何とか返事を返す。

「以前、あなたと劉生がこの下の中庭で話をしているのを見かけた

もので。そのダブルコートに見覚えがあつてね。」

「はあ、そうなんですか。」

「劉生は、まだ来てないんだよ。」

「そう……ですか……。」

部屋に入った時にいなかったたので、来てないことはわかったが、あらためてそう告げられると失望が胸に広がる。

「ところで、お嬢さんの名前を聞いてもいいですか？」

「あ、はい。私は、本橋瑠夏と言います。5階の西病棟に入院しています。今日は、突然にすみません。」

瑠夏は、何度か練習してきたせりふを一気に言った。

「瑠夏さんか。私は、石田興生と言います。劉生の祖父です。もう半年間、こんな所に閉じ込められているんですよ。毎日退屈しているから、瑠夏さんの訪問は、大歓迎です。」

興生は、朗らかに笑って自己紹介をした後、ぎろつと泰生を一瞥しました。

「私が言わんでも、自己紹介ぐらいできるだろ？いい歳のおっさんなんだから。」

「なにを碎けた口調でくだらないことを。それで若者に合わせたつもりですか？ばかばかしい。」

泰生は、ため息をついて立ち上がった。

「すみませんが、私は帰ります。」

「待て、泰生。なんのために、今日、ここに来たんだ。ひとりで思い悩んだり、劉生のことをよく知りもしない外野の戯言を聞くより、ここにいる瑠夏さんの口から劉生のことを聞いてみた方がいいぞ。そしたら、ほんとの劉生が見えてくるはずだ。」

興生のことは静かだったが、有無を言わさない強さを含んでいた。泰生はその含みを感じ取り、嘆息すると、座りなおした。

「……私は、石田泰生です。劉生の……父です。」

必要最小限のことばだけを訥々としやべる泰生の物言いは、出会った頃の劉生に似ていた。瑠夏は、思わずくすくと笑った。

泰生が、一瞬、瑠夏を睨む。

「すみません。劉生……君とあんまり似ていたものだから、つい。」

肩をすくめペロツと舌を出した瑠夏に、興生は笑った。

「そんなに似てますか？こいつと劉生は。」

「はい、とても。顔の雰囲気もそうだけど、ちょっとした仕草や喋り方なんかそっくりで、ああ、親子なんだって。」

「いや、今までそう言われたことはないが・・・」

泰生の仮面がくずれ、ちらつと不器用さが顔を覗かせた。

瑠夏は、戸惑う泰生を見て微笑んだ。瑠夏の笑顔に泰生は驚きを隠せなかった。

部下を含め、初対面の年下から畏怖と緊張のない笑顔を向けられたのは、初めてだった。

泰生の戸惑いを興生は敏感に察知した。

「瑠夏さん、こんな仏頂面のおじさん、怖くはないかね？」

「いえ、べつに怖くないです。お父さんって、劉生に似ているから、きつと見た目とは違って、優しくて話のわかる人なんじゃないかなって。不器用なだけじゃないんですか？自分の気持ちを表に出すのが苦手で。って、すみません。生意気なこと言って。」

しまった、ひと言多い、私。

瑠夏は、気まずさに目を伏せた。

すると、興生がさも愉快そうに笑った。

「いや、劉生が気にいるはずだ。瑠夏さんは、ちゃんと劉生の本質をわかっている。そうは思わないか、泰生？」

いきなり話をふられて泰生は戸惑ったが、興生のことばに無言で頷いた。

こんな年端もいかない子から優しいだの不器用だのと言われたことは一度もなかった。それが劉生に似ているからそう思うというのなら、この子の目で見た劉生もそうなのだろうか。

「…………君から見た劉生のことを教えてくれないか？」

泰生のことばに、瑠夏は少し躊躇いの表情を浮かべたが、すぐに気を取り直して頷いた。

瑠夏が、喋ろうとすると、興生が止めた。

「そこに立ったままで話すのは疲れるでしょう。ここに座って話さない。まったく、お前はこういうところには一向に気が回らないからな。」

興生が泰生をねめつけて、瑠夏のために場所を開けた。

「……………すみません。」

泰生はバツが悪そうに顔を赤らめた。

今の泰生を部下が見たら、仰天するだろう。父親にいいようにあしらわれて自信のない顔をする泰生など、絶対見られないのだから。

興生がベッドに入るのを見て、瑠夏は言われるまま、興生の座っていた椅子に腰かけた。

泰生は、気を取り直すと、こぼんと咳払いをしてネクタイを直す仕草をした。

気まづくなるとネクタイを治す仕草をしてごまかそうとするとこまで、ほんとに劉生に似てる。

瑠夏は泰生に感じていた警戒を完全に解いた。

「劉生・・・君は、優しいです。優しくてあつたかで、人の気持ちをわかってくれる、そんな人です。たとえば、看護師さんに注意されてちよっぴりブルーな気持ちになっていると、なにも言わずに、自分のミュージックプレイヤーで私の好きな曲を聞かせてくれたりするんです。私は、劉生君がお見舞いに来るようになってから、ほんとにリラックスして楽しい気持ちで入院生活を過ごせてます。」

「あの劉生と、どんな話をするのかね？」

興生が聞いた。

「えっ、普通の話です。学校のこととか、昨日見たテレビの話とか、好きなアーティストのこととか。」

「劉生が、か？」

泰生がむせるように聞き返した。

「はい。劉生君、これまでは、あんまり学校の話題に興味がなかったみたいで、学校ネタを仕入れるために、女の子のグループの話に聞き耳立てて不審がられそうになって慌てたって話してました。私、どんな顔して聞いてたんだらうって想像して、ひとり笑いしてしまつて、今度は、私が看護師さんに不審がられて困っちゃいました。」

興生と泰生と話すのは初めてなのに、話しやすく居心地がよく
なっている自分に、瑠夏は驚いた。

やっぱり、血がつながっているんだ。おじいさんもお父さんも劉
生に似ている。

瑠夏は、時のたつのを忘れそうになった。

ふと壁の時計に目をやり、部屋を訪れてから30分以上過ぎてい
るのに気がついた。

やばい、また、捜査令状が出される。

瑠夏は焦った。

劉生は、まだ来ない。どうしよう……

瑠夏が時間を気にして慌て出したのを興生は見逃さなかった。

もう、これ以上は引きとめられんな。

興生は、泰生に目くばせすると、瑠夏に呼びかけた。

「瑠夏さん、もう、病室に戻らねばならないのだから？」

「は、はい、そうなんです……」

「私たちは、君に謝らなければならない。」

「えっ？」

「劉生は、ここへはこない。」

「こないって、どづいづ……」

興生が言いよんどんでいると、泰生が口を開いた。

「あの子は、家出したんだ。」

四つ葉のクローバー

泰生のことばに瑠夏は頭を殴られたような気がした。

家出？

劉生が？

どうして？

もしかして……私のせい？

瑠夏の顔は真っ青になっていた。手が震えて冷たくなる。寒いはずなのに、握った掌にじっとりと汗をかいていた。

どうしよう……

私のせいなの？

瑠夏が、突然黙りこみ顔が悪くなったのを見て、興生は心配になった。

「瑠夏さん、顔色が悪いが、大丈夫かい？看護師を呼ぼうか？」

「い、いえ……大丈夫、です。」

「無理はいけないよ。さっきも言った通り、劉生は来ない。もう、病室に戻りなさい。」

「はい……」

瑠夏は、興生に言われるまま、立ちあがった。

「私も帰るから、病室まで送って行こう。」

泰生も立ちあがった。

「いえ、大丈夫です。ひとりで、戻れますから。それより、どうして劉生君は、家出なんか……」

「理由はわからないんだよ。でも、私は劉生が家出をしたとは思ってはいない。」

興生が言った。

「だが、あの子は、置き手紙ひとつで、もう10日も帰ってこない。」

泰生が反論する。

「こんなことは、これまでもあっただろう。あの子の放浪癖は、今に始まったことではないし、あの子を放浪させるようにした大元は、お前だろう。」

興生に指摘されて、泰生はことばに詰まった。

「とにかく、劉生は必ず帰ってくる。あの子は考えもなしに家を出たりしない。なにか目的があったのだろう。それに、手持ちの額からいっても、もうそろそろ帰ってくる頃合いだ。私は、2、3日の

内には帰ってくると思っている。」

「ですが、父さん……」

「なんなら、賭けてもいいぞ、泰生。」

泰生を目で牽制すると、興生は瑠夏に向き直った。

「そういうわけで、瑠夏さん、すまなかったね。劉生が来ないのを知ってたのに、あなたを長く引き留めてしまった。どうしても、瑠夏さんと、話がしてみたかったんだ。」

興生のことばに瑠夏は首をふった。

「いえ、私の方こそ、おじやました。」

瑠夏は、ふたりに頭を下げると、病室を出ようとした。だが、ドアの取っ手を握ったものの、何か思いついたように手を放してふり返った。

「あの、もし、おじいさんのおっしゃるように、劉生君がこの2、3日うちに帰ってきたら、私に連絡をもらえますか？私の携帯の番号を教えますので、お願いします。」

深く頭を下げ頼み込む瑠夏に、泰生が動いた。

「じゃあ、この手帳に番号を書いてください。もし、劉生が戻ったら、私か父があなたに連絡を差し上げます。」

差し出された手帳に自分の番号を書いて泰生に戻した。

「すみませんが、お願いします。」

もう一度、深く一礼すると、瑠夏は、興生の病室を後にした。

瑠夏に別れを告げたあと、劉生は、重い心を引きずって自宅に帰った。興生を見舞うことなどすっかり頭になく、傷心した自分を支えるのが精いっぱいだった。

なんで、言ってしまったんだろう。

瑠夏がああ言うことはわかっていたのに。

俺は、辛抱が足りない。

自分の気持ちをぶつけねばいいってもんじゃないのに。

はあ

明日からはもう瑠夏に会えない。

そう思うと、後悔に胸がかきむしられる。

なんで、俺は言ってしまったんだろう・・・

さっきから、堂々巡りの心の会話。

何度繰り返しても、結局、後悔のことばしか出てこない。

いっそ、恥を捨てて、明日も会いに行くとか。

いやいやいや、

そんな痛いこと、できない。

ますます嫌われたらどうするんだ。

劉生は答えを見つけれないまま、無為に3日過ごした。

学校にいても家にいても、瑠夏のことを頭を離れず、なにも手につかない。

瑠夏と別れて2日目、劉生は、思い切って病室に行ってみた。しかし、瑠夏の姿はなかった。看護師に聞くと、外泊しているという。

やっぱり、もう、瑠夏には会えないってことなんだろうな。

むなしさが劉生の心に広がる。

もう、会えないと思うと瑠夏への思慕が募るばかり。

それでも、どうしようもないのだと自分に言い聞かせた。

もう、会えないのなら、せめて瑠夏の病気が治るようにお守りを渡したい。

ふと、そんな思いが頭に浮かんだ。

きつと、どうにかして会う理由を作りたいという劉生の一念が思い起こさせたことなのだろうと、ひとり納得した。

どんな理由をこじつけてでも、俺は瑠夏に会いたいんだな。

いまさらながら、諦めの悪い自分に失笑した。

だが、お守りをあげるといふのは、いいアイデアかもしれない。それに、あげるのにふさわしいお守りを持っていけば、瑠夏もしょうがないと会ってくれるかもしれない。

一度そう思うと、その考えが頭を支配して離れなかった。

どんなお守りがいいんだろう？

どこかに、病気治癒によく効くお守りをおいてある寺とか、神社とかあったかな？

いや、パワーストーンみたいなものが今は流行りか？

それとももつと特別ななにか……

学校帰りにそう考えていると、ふと目にしたショップに四つ葉のクローバーのイラストが貼ってあるのが目に入った。イラストの下には、幸せを呼ぶ……と書いてあった。

四つ葉のクローバーか。

ベタかもしんないけど、ほんとにもらったやつなんて少ないよな。俺のまわりでも、あんま聞かないし。

いいかもしれない。

思い立ったら吉日といわんばかりに、劉生は手始めに近くの土手に行って探し始めた。だが、寒風吹きすさぶこの時期に、それを探すのは容易ではなかった。

近くの自然公園、隣町の牧草地……と、クローバーが群生していそうな場所を手当たり次第に探してみたが、見つからない。

そう簡単に見つかったら、ご利益なんか、ないよな。

とはいっても、闇雲に探していたんでは、時間がかかり過ぎる。

瑠夏と会えない時間が長引くのは、困る。

間があればあくほど、行きにくくなるし、なにより、俺の心が持たない。

たとえ話ではできなくても瑠夏の姿を見たいという気持ちを抑えるにも限界がある。

探す所を絞ってみよう。

劉生は家に帰り、ネットで調べてみた。この広い日本。どこかに、

この時期でも探せそうな所があるはずだ。

ネットで調べると、暖かい地方なら、この時期でも探せるかもしれないということがわかった。

劉生は、机の引き出しを開け、通帳を取り出した。

残金記載額は、15万。

十分だ。

劉生はこれまでも心に傷を負った時に、ふらっと旅に出ることがあった。1週間帰らないこともあり、そのことで母親の静香を心配させたことも一度や二度ではなかった。

旅の資金をためるために、今でも隠れてバイトをしている。

手っ取り早く肉体労働をするためのつてには事欠かない。なにせ、この体格である。人の2倍働き、それでも1人前の日当でいいという劉生は、雇う側からすると掘り出し物だった。そのために、金が要り用になっただらいつでも連絡先を登録している会社が3社あるのだ。

そうして貯めた金が、今回役に立った。

劉生は、ネットで沖縄行きチケットを予約した。

沖縄なら、今の時期でも20度くらいあることは調べ済み。そんなに暖かいなら、クローバーも勢いよく群生していそうだし、四つ葉のクローバーだって見つかりそうだ。

古武道の遠征の時に使っていたカバンに手近な衣類を詰め込むと、
劉生は空港へと向かった。

やじっしよじっ (前書き)

昨日は、忙しくて更新できませんでした。すみません。劉生は、クローバー探してかなり遠くまで行ったのですが、みつかるとは見えねえ？

やじつやじ

那覇空港の外に出ると、空は高く晴れわたっていた。

まじかよ。ほんとに同じ日本？今、24もあるし。俺、間違っ
てグアムとかに来てんじゃないよな？

白のタンガリーのシャツを脱いで、薄手のカットソーの袖を捲り
あげた。コートはすでに脱いでカバンに引っ掛けてある。

こんなに暑いと知ってたら、コートなんか空港のロッカーにでも
入れとけばよかったかな。

12月なのに背中につつすらと汗をかきながら、劉生はモノレ
ルに乗って予約したユースホステルを目指した。

ホテルにチェックインした後、モノレールの車窓から見えた近く
の公園に行った。下草の青々とした公園のようだったので、クロー
バーがあるかもしれない。

公園の遊歩道のそばには、シロツメクサがところどころ群生して
いた。

シロツメクサもクローバーの仲間だってネットには書いてあった。
地元で探した時には手が凍えて辛かったけど、ここでなら何時間で
も探せそうだ。

とにかく、早く探して瑠夏のところに行きたい。

劉生は、遊歩道の柵をこえてシロツメクサの群生しているあたりをていねいに探し始めた。

巨体の劉生が身を屈めて草っぱらで探し物をしている光景は、散歩をしている人の目を引いた。

みんな興味津々で劉生に目をやりながら通り過ぎて行く。

大きな足で葉っぱを踏みつぶさないように、ゆっくりと探した。前かがみの中腰で、1時間も探すと、腰が軋みだした。曲げっぱなしの膝も悲鳴を上げる。

こりゃ、思ったよりきついな。

何度か休憩をいれながら、公園の遊歩道を探し終えた時には、もう日が暮れかかっていた。

夕闇が迫る中、目を凝らして四つ葉のクローバーを探すのは無理だと判断した劉生は、探すのを中断して時計に目をやった。

そろそろ4時くらいか？

って

えっ、6時？もうそんな時間か？

沖繩って時差もあったっけ？

劉生は、薄暮の空と腕時計の数字を見比べて、時間の感覚が違う土地に来たのだと自覚した。

体中痛いし、日も暮れる。

今日は、もう終わりにしよう。お腹も減ったし。

公園を出てホテルへと戻る途中で小さな食堂を見つけて入った。

なににしよう？

壁に書いてあるメニューを眺めて悩んでいると、隣の席にとんかつ定食らしきものが運ばれてきた。

湯気が立ったアツアツの汁に山盛りのご飯、それにポリュームのあるとんかつがキャベツの千切りの上に乗せてある。

見ただけでお腹がなり、口の中に唾がたまった。

あれにしよう。

「すみません。」

手をあげて店員を呼ぶと、となりに運ばれてきたものを指さした。

「あれと同じの、お願いします。」

店員は頷いてメモを取った。

特大のとんかつは、きっちり劉生の腹におさまり、満足して店を出た。

明日は、早起きして宿から少し離れた公園に行ってみよう。

宿に着くと、シャワーを浴びてすぐ横になる。

何分もしないうちに劉生は寝息を立てていた。

翌日から、少しずつ範囲を広げて探したが、四つ葉のクローバーはなかなか見つからなかった。

あつたかくて長時間探せるから、何日もしないうちに見つかるだろうとたかをくくっていたら、あつというまに1週間が過ぎた。

さすがに焦りが募る。

予算的には、かなり切り詰めているからまだいけるが、時間が立ち過ぎるのがきにくわない。

暖かくて探しやすいからすぐ見つかると思ったのに……

どうしよう？

このままここにいるより、寒くて探しにくくても家に戻って探した方がいいのか？

ネットでは、けっこう広い野原みたいなとこや田んぼのあぜ道、牧草地なんかに見かけることが多いつて書いてあった。

そういつところなら、うちの近くの方が多い。

勢いに任せて遠すぎたかな。

沖繩なんて。

1週間探しても見つからないので、さすがに後悔の二文字が頭を占めるようになっていた。

劉生は、初日に入った食堂でため息をついた。

初日に入ってから、劉生は食事はずっとここで食べている。ボリユームの割に安いのと、味がよくて気にいってる。

今日も、収穫なしの疲れた体を引きずってこの食堂で夕食を食べていた。

「毎日来るけど、この近くに越して来たのか？」

食器を片づけながら、店員が劉生に声をかけた。

「えっ、は？いえ、俺は旅行で来てます。」

「旅行で？うそつけ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

突然うそつき呼ばわりされて劉生は面食らった。

「あんだ、毎日、1週間前、この先の公園で何か探してただろ？何日か、場所を変えて探してたの、偶然見かけた。あんだ、ごっつい体してるから目立つんだ。観光客は、そんなことしない。」

見られてたのか。

まあ、周りも気にしないで探しまくってたから、不審がられてもしかたないか。不審がられるの、慣れてるしな。

「なあ、あんなに一生懸命、なにを探してたんだ？探し物、見つかったのか？」

他に客がないこともあり、店員は、なかなか劉生のそばを離れなかった。

うぜえな、こいつ。

あんま、関わり合いたくないから、もう出よう。明日からはもうここへは来ない方がいいかな。

劉生が無言のまま立ち上がろうとすると、店員が呼び止めた。

「なあ、けつこう膝も汚すくらい一生懸命になにを探してるんだ？もう1週間だろ？そんなに必死に探すってことは、大切なものだろ？探し物が何か教えてくれたら、俺も探すの手伝うぞ？ちようど、明日、休みだし。」

「手伝うって？俺のこと、よく知りもしないくせに？」

目を細めて警戒心をあらわにする劉生に、店員は破顔した。

「まあ、変に思われるのはしょうがないな。この1週間、うちの売り上げに協力してもらってるお礼だと思ってくれればいい。」

「・・・・・・・・・・」

劉生は、店員を一瞥してそのままレジに行くと、代金を置いて外へ出た。

店を出て少し歩いたところで後ろから腕を掴まれた。

「なにするんだっ。」

劉生は、腕を振り払おうとした。

「そんな、構えるなよ。さっき、ため息ついてたろ？てことは、まだ見つかってないんだ。そうだろ？」

「なんで、そんなに俺に構おうとするんだ。ほっといてくれ。」

「俺も困ってたところを助けてもらったから。」

「は？」

「さっきの店の主人に。その時、言われたんだ。ひとりで悩んでても解決しないことが、ふたり、三人と一緒に考えてくれる人が増えたらいいアイデアが浮かぶもんならって。」

「・・・・・・・・・・」

「だから、おまえも困ってるんだったら、誰かに相談した方がいい。その誰かに俺が立候補してやる。」

「・・・・・・・・・・そういつの、大きなお世話って言うんだ。」

「大きなお世話でもなんでも、いいだろ。な、困ってるなら話してみ。」

「……俺は、あんたの名前も知らないんだぞ。」

「なら、自己紹介からな。俺は、飯田^{いいた} 哲郎^{てつお}。あてもなくこの沖縄に来て無銭飲食したら、さっきの店の主人に拾われて、今はそこで働かしてもらってる。」

劉生は呆れた。

これだけ迷惑だと態度に表してもひびかない。

ふつう、ここまで嫌がれば諦めるだろ。まして、俺の風貌はほとんどが敬遠するのに。

まさか……

「言っとくけど、俺はノーマルだからな。」

っ！

自分の心が見透かされいる気がして劉生は赤くなった。

「ま、あんたの体格は、一部のマニアからは垂涎ものかもしれないけど、俺は興味ないから。世知辛い世の中だけどさ、たまには人のいいやつもいるんだって。信じるよ。」

朗らかに笑う哲郎の顔は、悪人には見えなかった。

よし、腹を決めた。

万が一、何かあったとしても、俺は自分の身くらい自分で守れる。自分の身の心配をするより早く四つ葉のクローバーを探したい。

明日1日手伝ってもらって、それでなければ別の場所を探す。

そうしよう。

「……………わかった。あなたには負けた。探すの、手伝ってもら
うよ。俺は、石田劉生。」

「よろしくな、劉生。まあ、立ち話も何だから、店に戻って話を聞
かせてくれよ。」

哲郎は顎で劉生を誘つと先になった。劉生は、小さく嘆息すると
後に続いた。

どうしよう？」

「なんだ、戻ってきたんだ。」

哲郎に促されて店に入ると、店主がふたりを見て笑った。

「道昭^{みちあき}さん、こいつとふたりで少し話したいんですけど、ちょっと時間いいですか？」

「ああ、30分くらいなら、いいよ。今はまだ大丈夫だから。」

「あざっす。」

哲郎は深々と頭を下げると、劉生を奥の座席に連れて行った。劉生は、道昭に軽く会釈をすると哲郎に促されるまま椅子に座った。

「で、おまえは、なにを探してるんだ？」

「……クローバーを……」

「は？くろーばー？」

何て説明すればいいんだ？

どこまで話せる？

こいつ、ほんとに信用できるのか？

劉生は、それ以上ことばを継げず、口を濁したまま黙ってしまっ

た。

突然、目の前にコーヒーが置かれた。

劉生は驚いて道昭を見た。

「いったん外に出て、少し冷えたる。ここは海風が強く吹きぬけるから体感温度が低くなる。体があたたまったほうが頭が働くだる。」

道昭は、劉生の肩に手を置くとカウンターの奥へもどった。

「それから、哲郎、お前は少し強引なところがあるからな。自重しろよ。そいつは自分のことは自分で決められそうだから、あんま、プレッシャーをかけるな。どうするかは、そいつに決めさせる。」

「わかってますよ。」

哲郎は口をとがらせて道昭に手をふった。

劉生は、ふたりのやり取りを聞いたあと、コーヒーを一気に流し込んだ。コーヒーは、少し熱かったが、苦みが控えめでうまかった。

「……詳しいことは話せないけど、とにかく、目的は話そう。」

旅の恥はかき捨てではないが、このふたりなら、大丈夫のようだ。

「コーヒー、ごちそうさまでした。」

劉生は道昭に頭を下げると、哲郎に話し始めた。

「俺、四つ葉のクローバーを探してます。」

「四つ葉のクローバー？」

「はい。」

「なんで・・・っと、それは、聞かない。探す事情はひとそれぞれで、初対面の俺に話せないこともあるからな。」

哲郎は、劉生と同じようにコーヒーを一気に飲んだ。

「あちつ。」

哲郎は慌てて口をおさえて目を白黒させた。

「なんだ、これ。すっげえ熱い。おまえ、よく平気だな。」

少し涙目の道夫は、冷水サーバーからコップに水を入れると一気におおった。

「すみません。俺、熱いの、平気なんで。」

劉生は、口に手をあてて笑いかみ殺した。

「アイスコーヒーでないと飲めないくらい猫舌なのは、お前くらいだ。いつもは冷ましてのんでるだろ。気負い過ぎだ、哲郎。肩の力を抜け。お前がそんなじゃ、そいつは、おまえに気を許そうと思ってもできないぞ。」

カウンターの奥から道昭が言った。

「ああ、だからか。いつもはぬるめのコーヒを淹れてくれるのに、今日に限って熱いのなんて。ふうっ。わかりました。肩の力を抜きます。」

哲郎は両腕をぐるぐる回し、肩を交互に上下させた。道昭はそれをみて、ふっと目を柔らかく細めると、洗い物を続けた。

劉生は、ふたりを見て、自分の肩の力も抜けて行くのを感じた。

「いろいろ気を使っていたいて、ありがとうございます。あの、俺からお願ひします。四つ葉のクローバーを探すの、手伝ってください。」

劉生は頭を下げた。

「ん。わかった。で、どこを探すんだ？」

「それが……、俺は、ここから5分くらい行ったところのユーホステルに泊ってんですけど、そこから歩いて行けるとこ、モノレールで2駅くらいのとこまでは、探しました。でも、見つからなくて。」

「四つ葉のクローバーって、どんなとこにあるんだ？」

「ネットで調べると、原っぱだとか、田んぼのあぜ道とか、牧草地なんかも見つかりやすいってあったんですけど、沖繩って田んぼ、あんまないんですね。それに、牧草地のあるところも知らないし。だから、公園や原っぱを探してんですけど、ぜんぜん。」

劉生は力なく首をふるると、ため息をついた。

「田んぼも牧草地ももつと北上するとある。車で2時間くらいけば大丈夫だろ。哲郎、俺の車を使ってお前がナビしてやれよ。」

「いいんすか、道昭さん。」

「ああ、明日は別に車は使わないから。ちょっと用事くらいならばイクで十分だ。必要になったらおまえのバイクを借りる。」

「里沙さんそこには？」

「ああ、朝早く・・・そうだな、出かけるの、8時半まで待つてくれ。それまでには戻ってくる。」

「わかりました。出かけるの8時半でいいよな、劉生。」

ふたりで話してたと思つたら、いきなり話をふられて面食らつた。

「え、あ、はい・・・。いいです。逆に、その時間でいいんですか？俺はべつにもつと遅い時間でもかまいません。」

「いいよ、入院している連れ合いに朝飯届けるだけだから。」

大切な人が入院してるなんて、俺と似てる・・・

入院している連れ合いと聞いて、道昭に少し親近感を持った。

「そうですか。じゃあ、8時半をお願いします。明日、時間までにここに来ればいいんですか？」

「ああ、店の前で待ち合わせな。」

哲郎の返事を聞いて、劉生は立ちあがった。

「明日は、よろしくお願いします。」

劉生は、ふたりに深々と頭を下げると宿に戻った。

翌日、約束通りに店に行くと、哲郎はすでに白い軽ワゴンに乗って待っていた。劉生は、促されるまま助手席に乗り込んだ。

「これ、昼飯にでも食べ。」

道昭は、まだ暖かい弁当の入った包みを劉生の膝に乗せた。

「ありがとうございます。こんな……弁当まで。」

戸惑いながらお礼を言うと、道昭は劉生の背中をポンとたたいた。

「気にするな。それより、みつかるといいな。」

道昭が、後ろに下がって車から離れたのを見て、哲郎はエンジンをかけた。

「じゃ、道昭さん、行ってきます。」

「………行ってきます。」

道昭に明るく手をふる哲郎につられるようにそう言うと、劉生は

ぺこつと頭を下げた。

車は快適に走り出すと、一路北を目指した。

カーオーディオから流れるクリスマスソングがそぐわなくらいの青く高い空。そして、ライトマリンの海。

昨日からずっと、あたりさわりのない世間話はするが、哲郎も道昭もプライベートな話題はほとんど口にできなかった。

よけいなことはなにも聞かない。それが劉生の気持ちをほぐしていた。

「着いたぞ。」

いつのまにか、うたた寝をしていたらしい。

劉生は、哲郎に起こされ目を開けた。

目の前には少し起伏のある原っぱが広がっていた。原っぱの向こう側には田んぼがあった。

車から降りて、原っぱに足を踏み入れた。原っぱは、ところどころに小さなかわいい花が咲いたシロツメクサが一面に広がっていた。

「すごい、沖縄へ来ていちばん広いシロツメクサ畑だ。」

「うん、この広さなら、ひとつくらい見つかるんじゃないか。」

「うん。」

劉生は嬉しくなった。

昨日までの焦りは吹き飛んだ。

ここなら

ここなら、ほんとうに見つかるかもしれない。

君への想い（前書き）

なかなか四つ葉のクローバーが見つからず、劉生は瑠夏の元へ行けません。早く見つけさせてあげたいのですが・・・四つ葉でこんな苦労したら、五つ葉探しはどうなるやら。

君への想い

はあっ

ため息しか・・・出てこない

こんなに探したのに

こんなにたくさんあるシロツメクサを

哲郎さんとふたりで、一日中さがしたのに・・・

四つ葉のクローバーは

みつからない

俺、甘く見ていたのかもしれない。

俺のありつたけの瑠夏への想いをもってすれば、絶対に見つかるって、簡単に考えていた。

そんな生易しいもんじゃ、ないんだな。十万分の一の確率って。

「劉生、そんなにしょげるな。まだ探してないところはたくさんある。」

哲郎は、原っぱの奥の田んぼのあぜ道の方へ向かった。もう、あたりは暮れかかっていて、葉の枚数を見定めるのも難しくなっていた。

「哲郎さん、もういい。帰りましょう。きっと、道昭さんが心配して待っている。」

劉生は、あぜ道に腰を下ろしたまま立ち上がるうとしなかった。

哲郎は、劉生のところまで引き返してくると、腕を引っ張り上げた。

「なに弱気なこと、言ってんだ。この一週間、おまえは何をしてたんだよ。まだ完全に日は暮れちゃいない。諦めるのは、まだ早いだろ。」

「こんなに群生している中から見つからないんだ。ここにはありませんよ。」

はき捨てるように行った劉生に、哲郎は、かっとして胸ぐらを掴んだ。

「おまえが四つ葉のクローバーを探したって思いは、そんなもんだったのかよ。俺が見た時のおまえは、そんな諦めきった顔、してなかったぞ。まわりから変な目で見られてもおかまいなしに、必死で探しているおまえだから、俺は手を貸したいって思ったんだ。」

「だからって、俺の思いだけで哲郎さんや道昭さんに迷惑をかけたくない。ここまで連れてきてもらって、一日中、四つ葉のクローバー探しにつき合ってもらっただけでも、感謝しきれないくらいの恩がある。これ以上は……。」

「そんな他人行儀なこと言われるためにつき合っただけじゃない。おまえは、おまえの想いに正直になればいい。おまえの想いを叶えられれば、俺だって、道昭さんだってうれしいんだ。遠慮なんかすん

な。」

哲郎は、劉生を引っ張り上げ、田んぼのある方へと引きずっていった。

「劉生、あきらめるな。誰かのために必死に探しているんだろ、四つ葉のクローバーを。俺はさ、おまえが羨ましいんだ。俺がもう見失いかけたものをおまえはまだ持っている。おまえは、失っちゃだめだ。絶対に諦めるな。」

「哲郎さん……………」

哲郎は、一番大きな田んぼの脇のシロツメクサの群生に身を屈めて、ていねいに葉をえり分け始めた。

劉生は、哲郎と対面の群生を探し始めた。

「俺さ、2年前の今時分に沖縄に来たんだ。……………来た時は、かなり自暴自棄になってたかな。有り金全部使い果たしたら、ここで野垂れ死にしてもいいって思ってた。」

「……………」

「俺は、ここに来る前、東京で働いてたんだ。まあ、それなりに仕事にやりがいもあって、彼女もいたから、平凡だったけど……………幸せだったと思う。だけど、仕事が落ち着いたら結婚するつもりだった彼女に、急に別れ話を切り出された。俺は、面食らったよ。仕事にかまけて会えなかったわけでもないし、ケンカしてたわけでもなかった。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

哲郎は、自分がプライベートな話することを劉生が嫌がってないか確かめた。

こいつ、ほんと表情を出さないな。

少し躊躇ったが、話を続けることにした。

「彼女が別れを切り出した時、俺の学生時代からの親友も一緒だったんだ。・・・・・・・・俺の知らない間に、ふたりはつき合ってた。しかも、彼女の腹にはそのつの子どもがいるって言ったんだ。俺は・・・・・・・・信じていたふたりに裏切られて・・・・・・・・たぶん、自分で思った以上にショックだったんだと思う。それからの俺は、なにをやってもダメで、仕事もうまくいかなくなっていった。・・・・・・・・ついには、俺のミスで取引先に大きな損害を与えるミスをしちまった。・・・・・・・・俺は、何もかも嫌になって、アパートを引き払い、自分の持ち物を処分すると、有り金とわずかな着替えを持って沖繩に来た。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい、なにかリアクションしろよな。おまえみたいに無表情でいられると、話しくい。」

ぼそりと呟く哲郎に、劉生は手を止めた。

「そんな踏み込んだ話に気のきいた合いの手なんか入れきれないですよ。俺、そんなに器用じゃないですから。」

無然とした顔でぼつりと話すと、劉生は、また手を動かした。

「はあつ、まあ、そうだな。おまえに気のきいたことばを期待した俺が間違いだつた。」

哲郎は、大きく息を吐くと、苦笑いした。

「俺の話、続けていいか？」

劉生は、無言で頷いた。

「……道昭さんの店でやつかひになつてから、1ヶ月後、俺は、彼女に電話した。気持ちの整理はついてなかつたけど、ちゃんと別れを言わないと、あいつは、次へ行けないと思つて。だけど……」

哲郎の顔が苦しそうに歪んだ。

「あいつは、『やっぱり哲郎は、ほんとに私を愛してはいなかつたんだ。』つて、電話口で泣いた。俺は、わけがわからず、どういふことかつて聞いたんだ。そしたら電話を切つて、それから、どんなに電話してもつながらなくて。俺は、考えた末に親友に連絡した。そしたら、親友から、ふたりがつき合つてたのも妊娠も嘘だつたつて、俺の気持ちを確認するために彼女が親友に頼んだんで、聞かされた。」

「その親友つて人、もしかして、哲郎さんの彼女が好きだつたとか？」

哲郎は、驚いた顔をして劉生を見た。

「おまえ・・・、よくわかるな。そうだったらいい。だから、親友にも怒られたよ。俺は、真剣に彼女を奪うつもりで芝居にのったんだと言った。おまえがちゃんと彼女の心を掴まえていないから、こんなことになるんだって。ほんと、そのとおりだよ。だけど、彼女は、その親友とも一緒にはならなかった。・・・結局、彼女とは連絡がとれないままで・・・一度、東京に帰って探したんだけど、アパートも引き払っていて、仕事も辞めていた。もう、手遅れだったんだ。」

「哲郎さん・・・・・・・・」

「俺は、へたれだからな。もう、諦めたよ。だけど、おまえは、まだ諦めてないんだろ？だから、こんな必死になって探してんだろ？」

頷く劉生に、哲郎ははっぱをかけた。

「だったら、俺らに遠慮なんかするな。他人を巻き込んででも思いを遂げたいって強い気持ちがあれば、四つ葉のクローバーなんかみづかりはしない。」

哲郎のことばに劉生は大きく頷いた。

昨日会ったばかりの人にこんなに励まされるなんて思わなかった。哲郎さんのこと、胡散臭い人だなんて思って悪かったな。

瑠夏・・・・・・・・

今、おまえはどうしてる？

クリーンルームから出てきた日数からすると、また、クリーンルームに入ってるかな？

きつい治療を受けて闘病してるなんて思えないくらい明るくて、楽しくて、俺を和ませてくれる。

そんなおまえを泣かせてしまった。

俺の想いがおまえを苦しめるのだと知っていても、俺はお前を思うことをやめられない。

だけど

もう、おまえを苦しめたくはないから、俺の想いは心の中に封印する。

四つ葉のクローバーに俺のありったけの想いをこめて、お前に贈って、そして、また、友だちに帰ろう。

俺は、友だちとして、ずっと、おまえをみているよ。

四つ葉のクローバーを探す手に、眼に力は入る。

きつと、探せる。

俺の瑠夏への想いの強さをもってすれば、絶対だ。

探してみせる。

哲郎さんも、道昭さんも応援してくれるんだ。

ぜつたい、見つける。

それから1時間、暮れかけた田んぼのあぜ道をふたりは黙々と探し続けた。

それでも見つからないまま、とつぷりと日が暮れた。

劉生は、時計の小さな光を手がかりに探した。

くそつ、こんなことなら母さんにもらった携帯、持ってくるんだ。時計の光よりはずつと明るいよな、携帯のライトは。

劉生が、日頃携帯を持たないことを後悔している間に、哲郎は原っぱの方へ向かっていた。

トイレだろうと思って探し続けていた劉生の背後から光があつた。

急にあたりが照らされたのに驚いてふり返ると、車のライトがこつこうと光っていた。

「これなら、もう少し探せるだろ。」

車のエンジンをつけたまま哲郎が降りてきて、また、四つ葉のクローバー探しに加わった。

「ありがとうございます。すごいよく見えます。」

「ああ、でも、ガソリンは無限にあるわけじゃないから、帰りの燃料を考えると30分が限度かな。とにかく、30分、頑張ろうぜ。」

「はい。」

車のライトを手がかりにふたりは、黙々と探し続けた。

しかし、時間だけが非情にも過ぎていき、タイムリミットの30分があつというまに過ぎた。

もう少し、あのあたりまで探したい。

焦る劉生は、だんだん雑に探すようになっていた。

気持ちだけが逸り、目が葉をしっかりと捉えられなくなっていた。

なんで、見つからないんだ。

こんだけ葉っぱがあるんだぞ。

十万分の一の確率なんかとうにクリアしてるだろ。

あるはずなんだ。

なのに、どうしてないんだ。

「劉生、もう……」

「もう少し待って下さい、哲郎さん。もう少し！」

哲郎の気落ちした声を劉生は声を荒げて遮った。

「わかった。待ってやる。だけど、落ち着け、劉生。見つかるもんも見つからない探し方してるぞ、おまえ。」

「ちゃんと、探してますよ！」

「劉生！」

哲郎のどなり声に、劉生は、はっと我に返った。

無造作にクローバーを掴む自分の手を見て愕然とする。

『自然って、すごいよね。草も木も鳥も小さな動物たちも、そして人間も、なにげに地球上にいるんだよ。生きてますって主張してるわけじゃないけど、生きてる。』

瑠夏が、中庭で木に触れながらいつも言っていたことばがリフレインする。

なにしてたんだ、俺。

瑠夏が大切にしている自然だから、壊さないようにって、これまで

は、もっとていねいに探してたのに。

劉生は、探すのをやめて立ちあがると、大きく深呼吸をした。

もう一度、さいごに、乱暴に探したところをあたってみよう。それでダメだったら、諦める。

「哲郎さん、あと10分だけ、時間をください。お願いします。」

深く頭を下げる劉生に、哲郎は小さく息を吐いた。

「わかった。気のすむまで探せよ。最悪、一番近くの町まで行けるだけのガソリンさえあればいいから。」

「ありがとうございます。」

劉生は、ふたたび四つ葉のクローバーを探し始めた。

今度は、ゆっくり、ていねいに、葉をひとつずつそっと触れるように探した。

おもひなほは言わない(前書き)

やっと、みつけました。

さよならは言わない

これで最後、と思っていた一か所をしつこいくらいに見渡し、ゆつくりと探し終えた劉生は、諦めを覚悟したため息を吐くと、立ちあがった。

「……哲郎さん、もう、いいです。もう、じゅうぶん探しました。ここは……諦めましょう。」

さみしく笑う劉生に哲郎はなにも言えなかった。

先に車に乗ると、ハンドルに額を乗せて劉生の来るのを待った。

くそっ

あんなに必死に探してるやつに、幸運の女神は微笑まないのか。あいつのひたむきさを認めてはくれないのか。

見つからない悔しさと力になれなかった自分の歯がゆさどがなймаぜになつて、哲郎の胸を乱した。

劉生は、重い足をひきずって車へと歩みをすすめた。

ここまで来たのを無駄足だとは思いたくない。明日また、探そう。そう自分に言い聞かせた。ヘッドライトが劉生の歩く道を照らしてくれたので、漆黒の闇の中、劉生は危なげなく車までたどり着いた。

劉生が助手席にまわる前に、もう一度、今日一日探した場所を見渡した。

暗闇の中、ヘッドライトが照らす明かりを手がかりに原っぱから田んぼの方までぼんやりと輪郭を辿る。

12月の宵闇の風は、たとえ沖縄といえども冷えたが、劉生はそれを心地いいと感じた。

ここで四つ葉のクローバーを探したことは絶対忘れない。

全くの見ず知らずの俺に力を貸してくれた哲郎さんと道昭さんの思い出の場所だ。探し物は見つからなかったけど、ここまで来れたことに悔いはない。

思い出の場所を眼に焼き付け、助手席に乗り込むためにボンネットをまわりこもつとした時、ふと、ヘッドライトの先にきらっと光るものが目に入った。

なんだ？

ガラスか？

っ！

えっ

ちよっ・・・まてっ

見間違い？

いや、あれは……

「劉生、どうした？」

がざつと人の動く気配と遠ざかる足音に驚いて哲郎がハンドルから顔をあげると、劉生がヘッドライトの明かりの先に屈みこんでいた。

哲郎は何事が起つたのかと、慌てて運転席を飛び出した。

「あつた！あつたよ、哲郎さん！」

劉生が声を張り上げた。

「ほんとかつ！」

哲郎は劉生のところへ駆け寄った。

傍に来た哲郎に劉生は、そつと両手を広げて見せた。

劉生の手の中に四つ葉のクローバーがおさまっていた。

「ほんとだ。四つ葉のクローバーだ。やったな、劉生。よかったな。」

哲郎は劉生の背中を強くたたくと肩を組んで喜んだ。

「哲郎さん……ありがとう……お、ね、ひ……と……りじや……さが、せ、なかつ……」

劉生の声がかぐもり、さいごまでことばを継げなかった。

「劉生……」

哲郎は、空を仰いで落ちそうになる涙を堪えた。

ふたりはしばらくにも言わず立ちつくしていた。

雲間から闇夜を照らすように月が顔を覗かせ、原っぱをほんのりと明るく照らした。やさしい風に乗って木々の葉ずれの音が届く。

シロツメクサの葉が淡い月の光に照らされ風に誘われ揺れていた。

「四つ葉のクローバーはちゃんと持ったか？」

空港の出発ロビーで哲郎が聞いた。

「はい、しっかりとこの本にはさんでますよ。さつきも確かめました。」

劉生は、笑って四つ葉のクローバーを挟んである雑誌をふたりに見せた。

「それ、押し花にして、それからブックエンドか何かにするんだろ。やり方わかるか？ たったひとつしかない、貴重なものなんだから、

慎重にやれよ。」

心配そうに言う道昭さんに劉生は笑って頷いた。

「大丈夫です。こういうのに詳しくそうな人に聞いてやりますから。」

そうかと、道昭は微笑んだ。

「哲郎さん、道昭さん、ほんとにお世話になりました。」

劉生は深々と頭を下げた。

「よせよ。こっちは大きなお世話だって断られたのを無理やり手伝ったんだ。礼を言われる筋合いはないよ。」

軽口をたたき哲郎に劉生は頭をかいた。

「うっ、それは言わないでください。あの時は、生意気言って申し訳なかったって思ってたんですから。」

「哲郎、あんまりこいつをいじめるな。こいつにとっては、四つ葉のクローバーが見つかったのは、単なるきっかけづくりができたにすぎないんだから。これからだろ、お前の本番は。」

肩に置かれた道昭の手に力がこもる。

「はい、俺、ちゃんと目的を果たして見せます。」

劉生が力強く頷くと、道昭は、劉生の肩から手を放し、かわりに哲郎の首に腕を巻きつけた。

「こいつも、お前に勇気をもらったからな。後を追わせる。決心ついたら、哲郎？」

「み、道昭さん……。」

思いがけない道昭のことばに哲郎はことばを詰まらせた。

「探しに行け、哲郎。お前はまだ、あの時から立ち止まったまんまだ。後悔してるんだろ？諦めきれないんだろ？だったら行けよ。旅資金を貯めてるの、知らないでも思ってたのか。もう、じゅうぶん貯まったろ。おまえに足りないのは勇気だけだった。その勇気、こいつからもらっただろ。」

「……。」

苦しそくに顔を歪める哲郎に劉生は手を差し出した。

「哲郎さん、彼女を探しに行くって、俺とも約束して下さい。」

「劉生……。」

躊躇う哲郎の手を無理やり掴むとぐつと力を込めて握った。

「約束して下さい。そして、必ず結果を教えてください。俺も、ちゃんと連絡入れますから。」

「よし、俺がおまえたちの連絡先になってやる。必ずふたりとも俺に連絡を入れてろ。いいな？」

ふたりの肩に手を置いて道昭が言った。

劉生は、すぐに頷いた。哲郎は、躊躇うように目を泳がせたが、小さくため息を吐いた後、ぐっと顔をあげ、そして頷いた。

アナウンスが搭乗の案内を告げた。

劉生は、カバンを持つとふたりにもう一度頭を下げた。

「さよならは言いません。また、ふたりには会いたいです。かならずもう一度ここに来ます。」

「ああ、待っている。かならず来いよ。今度は四つ葉のクローバーの君と一緒に。」

道昭が笑った。

「俺も……きつとここに戻ってくる。また会おうな、劉生。」

「はい、必ず。」

劉生は、ふたりに別れを告げると、搭乗手続き口へと向かった。

悠との出会い（前書き）

劉生と瑠夏の親友になる悠、登場です。もっとおとなしめのキャラになる予定だったんですけど・・・なんか、書いてるうちに、あれ？みたいなかんじにんっちゃいました。

悠との出会い

クリスマスまであと3日。

お母さんをお願いした猶予期間は、明日まで。

もう、会えないのかもしれない。

6階からは、何の音沙汰もない。

もう一度、自分で行って確かめるほうがいいのかな。

瑠夏は迷っていた。

劉生に会いたい。

会えないと思うといつそ会いたい気持ちが強くなる。

なんで、あの時、もう会えないって言ってしまったんだろう。

今さら後悔しても遅いのに。

瑠夏は塞ぐ気持ちを胸に膝を抱えてため息をついた。

コンコンと、ドアをノックする音が聞こえる。

劉生？

瑠夏は思わずベッドから立ち上がった。

「ごめんね、瑠夏ちゃん。今日、一日だけ、この部屋に患者さんをもうひとり入れるね。」

看護師が申し訳なさそうに笑顔を向けた。

「えっ、この部屋、個室じゃ……」

「ええ、ほんと個室なんだけど、東病棟の外科が今朝の事故で一時満床になってしまって、救急で運ばれてきた脳震盪を起こした子を受け入れる余裕がないの。こっちの方も満床だから、困ってしまつて……お母さんにはOKもらつてあるんだけど、いい？」

「あ、はい……そう言う理由なら……」

看護師は、ホツとした顔をしてごめんとする仕草で両手を合わせた。

「ありがとう。検査の結果では異常なしだから、今晚一晩だけの入院になると思う。よろしくね。」

そう言つと、看護師は部屋に入り、手早く瑠夏のベッドを壁際に寄せた。

「もう、いいわよ。連れてきて。」

そう言い終わると同時に、ドアが大きく開いて、自分と同じくらいの年の女の子が眠ったベッドが運び込まれた。

女の子の顔は青ざめていて、唇の色がない。

大丈夫なのかな？看護師さんは異状なかったって言ってたけど、苦しそう。

ベッドが瑠夏の反対側の壁に置かれた。

「失礼します。」

低く通る男の人の声に、瑠夏ははっとして入り口に目をやった。

長身で顔立ちの整った男の子が、瑠夏に会釈をして入ってきた。

ライトブルーのジャージを着た目元が涼やかな男の子は、きつと、
壮絶なくらいもてるんだろうなと瑠夏は思った。

彼が寝ている女の子の傍に腰かけようとするのを見て、瑠夏は、
躊躇いがちに声をかけた。

「あの……、カーテン、閉めてください。私よりあなたのほうが、
カーテンに近いから、お願いしてもいいですか？」

「あ、ああ、はい、いいですよ。」

男の子は、窓際にあるカーテン止めをはずして、シャクっと、
気にカーテンを閉めた。

隣のベッドとの間にカーテン一枚のうすい壁ができた。これで、
少しだけど、プライベートは守れる。

瑠夏は、軽く息を吐くとベッドに横になった。

うらやましいな、あんな風に彼氏に付き添ってもらえるなんて。

瑠夏は、ふと、自分の横に座る劉生の面影を追っていた。

あの時、あんなこと言わなければ、私の傍にだって、劉生が座っていたのに……

瑠夏は、きゅっと唇をかみしめ、目を閉じた。

しばらく静寂な時が流れた。

「……………」

隣で、シーツの擦れる音がした。

「あっ、気づいた？」

呼びかける声がある。

「私、好きだな、しづさわ 渋沢君の声。低いのによく通ってて、いいよね。聞きやすいし。」

「あっ、ありがとう……俺の声、ほめてもらって。声をほめられたのなんか、初めてだよ。」

えっ、あの子、起きたと思ったら、いきなり甘々？

瑠夏は面食らった。

うわっ、もしかして、私、あてられちゃうかも。

そう思って、できるだけふたりの会話を聞かないようにと、耳を塞ぎ掛け布団の中に頭を潜り込ませたが、耳はダンボになって、少しの声も聞き逃さないようにと注意を払っていた。

私って、けっこう、野次馬根性強かったんだ。

瑠夏は、意識すればするほど隣に集中する自分に呆れながらも、意図して無視しようとするのをやめた。

こんな狭い個室の中で、聞きたくないと思ったって、どうしようもない。

「いいええ、どういたしまして。いいねえ。お礼を言う声もうつとりするよ。渋谷君、声優になって吹き替えやったら、すごい人気者になるよ。うん、私が保障する。」

ぶつと、彼が吹き出した。

「なに？なんで？そこ、笑うところ？ここはあく、吹き出すんじゃないよ。』ありがとう、うれしいよ。』くらい言うべきでしょ。」

彼女が拗ねる。

そのことばに呼応するように、くっくつと、押し殺したような笑い声がした。

「ご、ごめんっ、つい……。高遠たかとおさんって、意外とおもしろい人だったんだね。それに表情ありすぎ。」

「渋沢君が知ってる私がどんなキャラか知らないけど、これが私なのっ。」

「そうなんだ。わかった。わかったから、そんな、目を閉じながら百面相するの、やめてくれる？俺、笑いをこらえるの、そろそろ限界。」

「私、百面相なんかしてないしっ。これが地なんだってば。もうっ、自分の夢なのに、なんでそんなこと言われなきゃいけないわけ？」

彼が一気に吹き出した。

「わっ、悪いとは・・・思っけど・・・もう、無理。我慢できなかった。」

「もうっ、こんな夢、おわりっ。私、起きるっ！」

女の子が、がばっと起き上がる気配がした。

「わっ、だめだよ、急に起き上がっちゃ。」

慌てた彼の声。

もぞっとシーツの動く音がして、

「そう、まだ横になってた方がいい。」

と、彼は言った。

「ヘンな夢だったなあ。渋谷君が夢に出てくれるのは全然いいんだけど、なんか言い合いしてたみたいだった。せつかく渋谷君が夢に出てきてくれたのに、もっと甘々なことになってたらよかったのに。」

「高遠さんと俺の甘々なことって、どんなんだろうね？興味あるな、俺。てか、高遠さん、目を開けても、独り言も百面相もやめないんだね。」

「失礼ねえ。だれ？ひとの事、独り言激しすぎだの、百面相しすぎだのって。夢の中でそう言ったのは渋谷君だったから許すけど、あんたは……。」

え？

何か、ふたりの話、かみ合っていない？

瑠夏が眉をひそめていると、彼女が叫んだ。

「しっ、渋谷君っ！」

また彼女の起き上がる気配がした。

「急に起き上がったら、だめだつてば。保健室の時みたいに、また気を失っちゃうよ。まだ寝てなきゃ。」

「まだ……夢……？そ、そうだよ。渋谷君が私の傍にいるなんて、ありえないし。それにしても今日の夢は、すごくリアル。いつもはうつすらぼんやりとした渋谷君の顔なのに、今日は、写真みたいにくつきりピントが合っていて、渋谷君の手のぬくもりまで感

じられる。夢みたい……って、夢なんだよね。ほんとだったらよかったのに。いやいやいや！ほんとだったら困るでしょ。あんな言いたいことべらべらとしゃべって。ウン、夢でよかったんだよ。」

ん？

やっぱり、おかしい。

やたら夢って連発してる。

もしかして、付き添っている男の子、彼じゃないの？

あの子、自分が妄想の中で話してるって思ってるの？

「夢じゃないって。俺、正真正銘の渋沢だけど？」

彼がくすりと笑う。

「んなわけないでしょ。だって、なんで渋沢君が私と一緒にいるわけ？こんなオイシイこと、夢以外にあるわけないって。」

「ふうん。じゃあ、俺、高遠さんの夢にはけっこう普通に出演してるの？」

「そうそ……って！」

「本……物？」

隣で女の子が声を詰まらせていた。

少し間をおいて、女の子が奇妙な声をあげた。

「あだっつ。」

「た、高遠さん、なにもそんな思い切りほっぺをつねらなくなつたつて。」

現実だつて確かめたくて頬をつねつたんだ、あの子。

瑠夏は、口に手をあてて笑いを堪えた。

彼じゃないけど、私も吹き出しそう……

瑠夏は、すっかり隣でのやり取りに夢中になっていた。

「やっぱり……本……物……?」

「俺が、夢か本物かつてこと聞いてんなら、俺は本物だよ。さつきからそう言ってるだろ?」

「なつ、なんでっ?なんで渋谷君のドアップを私は見てんの?ここ、保健室?まさか、自分の家?んなわけないよね、薄桃色のカーテンなんか家にないし。渋谷君も……残念だけど、今の我が家にはいないし。」

「はずれ。どれも違うよ。保健室でもないし、高遠さんの家でもない。ここは病院。高遠さん、保健室で気を失ってしまったから、俺と赤西先生あかにしで病院に連れてきたんだ。それにしても、高遠さん、ほんと、独り言、好きだね。」

彼が愉快そうに笑った。つられてこっちまで声を出しそうになった。

「あ、あの・・・病院にいるって・・・わ、私、どうしちゃったんだっけ？てか、その・・・渋沢君・・・顔が近すぎて・・・そそそそれに・・・うっうっうっ腕・・・はな、離して・・・下さい。も、もう、勝手に起き上がりたり・・・しないから。」

「あれ？なんか、さっきまでの高遠さんの勢い、なくなっちゃった？残念。さっきの方がよかったのに。・・・高遠さん、ほんとに覚えてないの？ぜんぜん？」

「やつ、全然覚えてないわけじゃない・・・よ？渋沢君の蹴ったボールを鼻でキャッチしたあと、ひっくり返って花壇に後頭部ぶつけて・・・渋沢君に・・・」

「俺に？なに？」

「渋沢君に、おっ、おっ、おっ、お姫様だっこ／＼／＼／＼／＼／＼／＼されて・・・ほっ、保健室に・・・行って・・・、赤西先生に・・・たんこぶ診てもらったまでは・・・覚・・・えてる。」

「ああ、じゃあ、気を失うまでのことはちゃんと覚えているんだね。保健室で高遠さん、急に立ち上がるうとして気を失ったんだよ。気を失うくらい強く後頭部をぶつけたんだって、俺も赤西先生も思っで、それで、急いで高遠さんを病院に運んだんだ。病院についてからすぐにMRIの検査をして、それからこの部屋に運ばれた。今、赤西先生が検査の結果が出たかどうか聞きに行ってる。検査の結果がどうあれ、高遠さん、今日一日入院だって。」

「にゅっ、入院なんて大げさなこと・・・大丈夫だよっ。私の頭、石よりも固いから。きっと、割れたのは私の頭じゃなくって、花壇のレンガのほうだって。そうだよ、花壇っ。まだペチュニアの苗を植えている途中だったのに、私が頭ぶつけて壊しちゃったかも。うわっ。修理しなくちゃいけないかな？それより、植えそこなった苗、どうなった？じゃないっ、花壇の修理っ、どうしようっ。花壇のレンガに勝ってしまうって、私の石頭どうよ？」

ぶっ、くっくっくっ・・・

瑠夏は思わず吹き出した。

吹き出して慌てた。

やばっ。隣に変に思われる。

だけど、そんな心配はいらなかったようだ。

隣では、瑠夏が笑ったのと同時に、彼が盛大に吹き出していた。

私の笑い声、彼の声に消されたんだ。よかった・・・

「じゅっ、じゅめ・・・んっ。笑っ・・・ちやいけない・・・って思ってる、けど・・・」

彼は、おそらく口を抑えて笑いを堪えてる・・・

「・・・私・・・そんなにツボること、言った？」

消え入りそうな彼女の声がした。

気持ちは、わかるなあ。

慌ててしまって、どンドン会話がどつぼにはまってしまつこと、私もよくあつたもの。

瑠夏は、隣にいる女の子に一気に親近感を持った。

「いや言つたつていうか、高遠さんの表情？もろツボつた。最高！俺、高遠さんの百面相、クセになりそう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

さつきまで大騒ぎしてたのが嘘のように、隣が静まり返つた。

あゝあ、あの子、自己嫌悪に陥ってるんだ。かわいそうに。

瑠夏は、ちよつぱり彼女に同情した。

「ごめん、怒つた？」

なだめるような彼の優しい声が聞こえたが、彼女の声は聞こえなかつた。

沈黙が続く。

あの子、大丈夫かなあ。

好きな人に、自分は恋愛の対象に見られてないって思ったんじゃ

ないかな。

瑠夏は、沈黙の中に彼女の戸惑いと悲しみを感じ取って切なかった。

しばらくすると、彼と一緒に付き添ってきたらしい先生が入ってきて、検査の結果を伝えた。

先生のほうは用事があるからと先になったが、彼は、彼女の母親が来るまで付き添っていた。

彼女の母親が来るまで、最初の面白い会話が嘘のように、静かな会話が続けられていた。

彼が去り、しばらく付き添っていた母親も病室を後にすると、部屋の中には瑠夏と彼女だけになった。

瑠夏は、思い切ってカーテンの向こうに声をかけた。

「あの、少し話さない？」

瑠夏と悠

シャ、シャ、シャ

少しずつカーテンが開かれて、眼鏡をかけたショートボブの顔がのぞいた。

こちらを窺うような瞳は、眼鏡からこぼれおちそうなくらい大きくて、可愛い感じの子だ。

さつきは、土気色した顔で目を閉じていたから、病人見たいにしか見えなかった。今は頬にも血色が戻っていてほんのりピンク色になっている。いかにも健康そう。

血色のいい顔が、ちょっぴりうらやましい……

「あ、あの……?」

おずおずとした声で呼びかけられて、瑠夏は、はっとした。

いけない、いけない。

ちょっと油断すると、すぐマイナス思考になっちゃう。

「ごめんね。私から声をかけたのに、ぼろっとしちゃって。せっかく同じ部屋になったんだから、おしゃべりしないかなって。」

「は、はい、私でよければ……」

おずおずとした表情みると、さっき聞いた会話、ほんとにこの子？って疑っちゃう。全然おとなしめに見えるけど？

ま、いつか。さっきの様子だと、しゃべっているうちに仲良くなれそうだし。

「私、本橋瑠夏。高2。けっこう長いこと入院してて、同い年くらいの子と話す機会、あんまないから、声かけちゃいました。」

ちよつと茶目つ気を込めて自己紹介をすると、彼女はくしゃつと顔を崩して笑った。

「私、たかとゆかり高遠悠。同じく高2。たぶん今晚だけの入院だと思うんだけど、よろしくね。」

「えつと、気を悪くしないでほしいんだけど、さっき、すつごくかつこいい男の子との会話、聞いちゃった。」

ぺろつと舌を出して肩をすくめると、悠の顔はみるみる赤くなつて、ゆでダコみたいだった。

「そそそそそうなんだ。あははははははっ、じゃあ、わかってると思っけど、ちよつとドジって頭ぶつけてひっくり返ってしまったんだ。うっつ、いだっ。」

悠は照れ隠しに頭をかいて、運悪くたんこぶをなでてしまった。

ずきずきと痛みが後頭部から頭全体に広がり、思わず涙目になった。

「大丈夫？」

心配そうな瑠夏の声に、悠は、あははと笑って、また、頭をかいた。

「 # \$ & * つ！つ！つ！ 」

ふとんに突っ伏して身悶えする悠に瑠夏は、手を口にあてて吹き出しそうになるのを堪えた。

「あはははっ、いいよ、笑いたいの我慢しなくても。こんなドジ、いつもだから。」

悠は、涙目で引きつり笑いを見せた。

「ごっ、ごめんっ。さっきの・・・会話を思い・・・だしてっ。」

びびっびび。

この子としゃべっていると、腹筋がすっごく鍛えられそう。

「あ、えっと、さっきの会話って、私と渋谷くんと・・・？」

「そう。彼の気持ち、わかった気がする。」

いたずらっぽく笑ってみせると、悠は目を泳がせながら苦笑した。

「あの、高遠さん。あのかっこいい子、わざわざ病院まで付き添ってきてくれるなんて、高遠さんの彼氏？」

たぶん違つとわかつていたが、あえて、瑠夏はそう聞いた。

「ちっ、違つよ。渋谷君は、自分が蹴つたボールが私にあたつたことが原因でたんこぶできたから、責任感じて付き添ってくれただけ。」

「そう・・・なんだ？すごく自然で仲よさそうな会話してたから、てっきり・・・」

「仲、よさそうに聞こえたの・・・？」

なんだろう？

高遠さんの顔、困ってる・・・ううん、つらそうに見える。

「う、うん・・・とても楽しそうな会話で、いいなあって。」

「そう・・・もし、そう聞こえたなら、きつと、あれだ。渋谷君、私のお姉ちゃんとき合つてたから。去年は、よく家にも遊びに来てたんだよ。私も何度か話したことあって。だからだよ。」

無理して明るく言ってるって、わかっちゃう。

高遠さんって、正直過ぎて、自分を隠すの、下手なんだ。

瑠夏は、そんな悠を思って、無理やり明るい顔をしようとしてみた。

だけど、瑠夏も人を欺けるほど器用ではなかった。

「あゝ、そ、そうなんだ。お姉さんの彼氏……か。」

「……………本橋さん、いいよ、無理しなくても。きつと、ばれちゃってるんだよね。私の気持ちは。」

「えっ、う、ううん、つと、なんのこと?」

瑠夏は、ことばに詰まりながらも誤魔化そうとした。

「……………さつき、私と渋沢君の会話、聞いてたんでしょ?で、今の私の態度……………はは、自分でもわかってるんだ。きつと、私の気持ちはばれてるんだろうなって。」

少し悲しそうな悠の眼が瑠夏を見つめる。

「ごめん……………私……………」

好奇心から聞いては行けなかったのに、聞いてしまったことへの後悔が瑠夏を責めた。

「あゝっ、もう、湿っぽくなるの、やめよ。はっきり言ってすつきりしたい。私ね、渋沢君に片思いしてる。完全な私の一方通行なの。渋沢君、きつと、今でもお姉ちゃんのこと、好きだから。」

「だって……………ふたりがつき合ってたの、去年のことなんでしょ?そしたら、もう、ふつきれてるか……………」

「そんなこと、ないよ。お姉ちゃんって、私よりふたつ上で、今は県外の大学に行ってるんだ。遠恋なんてありえないってお姉ちゃんの方から終わりにしたみたいだけど、お姉ちゃん、夏休みに帰って

来た時、連絡とって会ってたもの。ふたりが楽しそうにデートしてたこと、クラスの友達から聞いた。だから、ふたりの仲、まだ終わってないよ。」

悠の大きな瞳が潤んでる。

後頭部が痛いからじゃ、ない。

届かない想いに胸がしめつけられているからだ。

私は……

私の想いは……私が手を伸ばせば届くのに

「ごめんね。湿っぽくしたくないって、自分で言ったくせに、こんな話になって。」

「ううん……今は、片思いかもしれないけど、諦めちゃだめだよ。さっきの会話の流れからして、え〜っと、渋谷君、だっけ？彼は、ぜったい、高遠さんに親近感もったはずだもの。高遠さん……う〜っ、悠って、呼んでいい？私、姓で呼び合うのって、なんか慣れてなくて。名前で呼びたい。悠も瑠夏って呼んでいいよ。名前、一字違いで、私も悠かに親近感、湧いたから。」

「ああ、うん、名前で呼び合うのは……構わないけど、あつ……と、ありがとう……応援してくれて。」

悠ははにかむように笑った。

「がんばって！絶対、悠を彼女にするほうがお得だよ。」

「ぷっ、お喋って、なんか、私って特売品？」

「やっ、違うよ。掘り出し物。絶対手に入れて損しないみたいなの？」

悠が笑った。

とってもいい笑顔。

つられて瑠夏も笑った。

「ありがと。んじゃ、諦めずにがんばるよ。そういう、瑠夏は、そういう人、いるんじゃないの？」

「うん……いる。私にはもったいないくらい、私のこと、想ってくれてる。」

「うっわ。やぶへび？私ってあてられちゃう？」

悠がニヤニヤしながら聞いた。

「それは……違う。私、彼にもう会いに来ないでって言っちゃったの。」

悠の顔から笑みが消えた。

「なんで？けんかしたの？」

瑠夏は首をふった。

「怖かったから。」

「怖い？」

「そう。いつよくなるのかもわからない病気で、制限ばかりたくさんあるから。いつか彼が健康な子のほうがいいって、離れていってしまうのが怖くて、そうなるくらいなら、初めからなかったことにしようって思った。」

「そんなの、おかしいよ。彼が嫌になるかなんてわかんないじゃない。彼は、瑠夏の病気のことわかった上で、好きって言ったんじゃないの？」

瑠夏はさみしく頷いた。

悠のことはを心に落としこみながら、堪えていた気持ちがふつつと表に出てきた。

「だ・っ・って、この病気のせいで、いろんな物、失くしたんだよ。たくさん希望を諦めたんだよ。好きって気持ちも・っ・心に何重にも力ギをかけて封じ込めないと、もう、自分で自分を支えきれなくなりそうだったんだもの。」

掛け布団を腱が強く浮き出るほど握りしめた瑠夏の手が震えた。

「瑠夏・っ・っ・」

「ごめん・っ・悠にこんな話してもしかたないのに。完全な八つ当たりだよ。ほんと、ごめん。」

「いいよ、瑠夏。八つ当たりって大事なんだよ。ストレスが一気に減るでしょ。」

「ありがとう、悠。」

「お互いさま、お互いさま。で、ストレスついでに聞くけど、瑠夏は、その彼とさよならしたまんまでいいの？」

「はじめはね、そのつもりだった。でも、今までいた人がいないのがね、すっごくさみしくて、気がつくと探しちゃってるんだ。探して、もしかしたら会いに来てくれるかもって、期待して、なのに来てくれないんだってわかったら、辛くて、悲しくなって……もう、会えないの我慢できないって思った。」

「じゃあ、また会ってって言うつもり？」

「そのつもり。だけど、直接連絡とれないから、この病院に入院してる彼の身内の人に連絡してって、頼んだ。だけど……」

「だけど？」

「私、一時退院することになって、明日、家に帰るの。だけど、連絡来ない。」

瑠夏は顔を歪めた。

「そうなんだ。でも、まだ一日あるよ。きつと来るって。」

「うん。ぎりぎりまで待ってみる。」

「私もぎりぎりまで一緒にいてあげる。」

「悠……、ありがとう。」

「やつ、そんなあらたまれると、てれちゃう。うっ、だったっ。」

無意識に頭をかいて、また、たんこぶを思いっきりさわってしまった。

瑠夏は、たまらず笑ってしまった。

悠もつられて笑った。

「ところでさ、私の片思いの相手の名前は、瑠夏、知ってるでしょ。だったら、私も知らなきゃ、不公平だと思うんだけど。」

悠が顔に似合わず、ダークな笑みを浮かべた。

「え〜っ、じゃあ、名字だけで、いい？私、悠の好きな子、渋谷君ってしか知らないし。」

「そんなこと言わずにフルネームで教えてよお〜。私も教えるから。渋谷君、名前は昂こっぺって言うんだよ。渋谷昂。かっこいいでしょ。」

「かっこいいって、自分で言う？」

「いいでしょ。瑠夏も認めたとおり、ほんとにかっこいいんだから。それより、瑠夏の相手は？」

「劉生。石田劉生って言うの。」

「はあああああ〜っ！石田君だって？」

眼鏡がずり落ちそうになるくらい驚いてあげた悠の叫び声に瑠夏は目を丸くした。

まちぶせ（前書き）

やっとふたりの距離がまた近くなります。劉生と瑠夏の接近まであと1話です。

まちぶせ

啞然とした顔でこっちを見る悠に瑠夏は困惑した。

悠って、劉生のこと知ってる？

瑠夏は、ときどきしながら悠の次のことばを待った。

ところが、悠はぶつぶつと独り言を呟き始めた。

「いや、同姓同名かもしれないし。あの石田君だよ？ありえないって。でも、劉生って名前は、そんじょそこらに転がってないよね？じゃあ、やつぱり？・・・ぷつ。石田君と瑠夏だなんて、ベタに美女と野獣だよ？だめだめ、ぜんぜん想像できない。だけどさ・・・この間、話しかけてきた時の石田君の意外性からしたら・・・ありえそうな気も・・・いやいやいや、やつぱ、ありえないって。それでもさ・・・まっさかあ。あの顔だよ？こくんな華奢な瑠夏と？だけど、世の中意外性ってけっこうあるわけだし・・・」

とうとう悠は、百面相まではじめてしまった。

これが、洪沢君が言った悠の百面相か。たしかに見てて面白いけど・・・

このまま悠に独り言を言わせてたら、ずっと呟いていそつ。

私は、早く自分が望む答えを悠から聞きたいのに。

もしかしたら、おじいちゃん経由でなくても劉生とつなぎを取れるかもなのに。」

「悠、悠、悠っ！」

瑠夏の怒ったような呼びかけに、悠は、ずり落ちそうになった眼鏡のままびっくり眼でこっちを見た。

「る、瑠夏つてば、いきなり大声出さないですよ。なにを考えてたか忘れちゃったよ。」

「だって、悠ったら、いきなり独り言はじめて止まんないんだもん。」

「えっ？独り言？誰が言ってたの？」

「悠に決まってるでしょ。」

「私が？独り言なんて言っていないよ。」

ぶんぶんと頭をふる悠に、瑠夏は呆れた。

自分が独り言いつてる自覚ないなんて！

「もう、悠の独り言なんかどうでもいい。それより、聞きたいことがある。」

「ん？聞きたいことって、私に？」

悠が自分を指さして聞いた。

瑠夏は頷いた。

「ねえ悠、劉生のこと、知ってるの？」

「うっ、えっと、その・・・確認なんだけど、石田劉生って、ものすごくでかくて、目つきが、わ、悪くて？ぶっきらぼう・・・な、人？」

そうであって欲しくないと言わんばかりに、眉間にしわを寄せて聞いてくる悠に、瑠夏は、そうだけど　というように大きく頷いた。

「やっぱり・・・あの、石田君？信じらんない！あ・の・石田君だよ？3年生も卒業生も避けて通るあの・・・」

「悠っ！」

瑠夏は、また独り言の世界に没頭しそつになる悠をけん制した。

「ふぁいつ。って、なんだっけ、瑠夏が聞きたいことって？」

瑠夏は天を仰いだ。

このまま悠から答えを引き出す自信がなくなりそつだ。

ずっと、答えてもらえないまま、悠の百面相を見るなんて、冗談じゃない。

ちっさと、問いに答えてもらわないと！

「いい、悠。イエスかノーだけ言って。それ以上のことは言っちゃダメ！」

悠は、瑠夏の形相にくくくくと頷いた。

「石田劉生を知ってるの？」

「あゝだか……」

「イエス、か、ノー、だ・け・」

「うっと……イエス……」

「どついう関係？」

「どついう関係って。どついう関係もこついう関係もない関係で、ひらく言つと……はて？何て言ったらいいのかな。んゝと……高校が……」

「は・る・かつ。」

語気の強い瑠夏のことばに悠はびつと背筋を伸ばした。

「は、はいっ。」

「なのね、落ち着いて、要点だけを言つように心がけてみよう。要点だけだよ、要点だけ！」

「要点だけね、要点だけ……で、石田君を知ってるよってだけでいいんだっけ？」

はあっ

今日、何度目のため息だろうか。

もしかして、レントゲンやMRIではわからなかっただけで、ほんとは悠のたんこぶ、やばいんじゃないでしょうね？記憶障害になつてるとか？

そう思いそうになるくらい、悠と話がかみ合わなかった。

だけど、私が劉生に会うチャンスを与えるのは、きっと悠なんだろうと思うと、たとえばみ合わなくても、諦めるわけにはいかなかった。

落ち着いて。悠のペースに巻き込まれないように気をつけて話すのよ。

「悠って、もしかして劉生と同じ高校なの？」

瑠夏は、さっきの悠の話から推理したことを口にした。

「そうだよ。石田君とは同じ高校。」

「劉生、学校に来てる？」

「えっっ、どうだろ。石田君は理系クラスで、私は文系クラスだから、教室が離れてるからわからない。」

「そう………」

劉生、まだ家に帰ってないのかな？

瑠夏は、がっかりした。

「あつ、でも、昨日は来てたよ。」

「ほんとう？」

「うん。昨日の朝、今日みたいに花壇で苗を植えてたら、石田君が来て、少し話した。」

「じゃ、じゃあ、今日も来てる可能性あるよね？」

「ある・・・と思う。クリスマスで学校は冬休みに入るけど、そのあと28日までは冬季補習があつて、確か石田君もそれを受けるとか言ってたから、たぶん来てるんじゃないかな。補習のスタート、今日からだから。」

「そうなんだ。じゃあ、明日も、その補習つてあるの？」

「あるよ。28日までは毎日。」

「それつて、終わるの何時頃？」

「ん〜と、だいたい6時くらいかな。基準点に達してなかった時には、その後も続くけど、石田君、ああみえて頭いいんだよ。いつも学年で10番以内。」

「へえ。ちよつと意外。」

しょっちゅう家出なんかするって聞いたから、そんなに頭がいいなんて思わなかった。

「でしょ。それだけでも意外性高いのに、瑠夏とって……。ちよつと信じられない。石田君って、瑠夏には優しいの?」

「うん。優しいよ。すごく私のことわかってくれて、一緒にいると落ち着くんだ。それに劉生の傍は、とつても居心地がいい。」

目を細めて微笑む瑠夏から、瑠夏が劉生をほんとに好きなのだとわかった。

それじゃ、あの四つ葉のクローバー、瑠夏にあげるつもりなんだ。

悠は、顔を真っ赤にして、押し花の作り方を聞いてきた劉生を思い浮かべて口角をあげた。

「た、高遠さん。ちよつと、いいかな?」

これまで全然接点のなかった劉生から、突然声をかけられて、悠は、スコップで土を耕す途中でフリーズした。

いつ、いつ、いつ、石田君がつ、なんで、私につ?

私ってば、自分で知らないうちにまたなんかしでかしたの?

「うううううう、うう、うう、うめんなせうつ。」

とにかく謝ろう

わけはわかんないけど謝ろうと、悠は、鼻の頭が膝につくくらい腰を曲げた。

「ごめんって、なんで謝ってんの？高遠さん、なんにも悪いことしてないのに。」

あれ？

やっぱり？

そうだよな。私、石田君に睨まれる心当たりなんか、ないもの。

でも、それじゃ、なんで私は声をかけられたの？

とにかく、意味がわかりませんって顔をしてると、石田君は頭をかきながら口を開いた。

「あの、その、俺、高遠さんに聞きたいことがあって。」

「聞きたいこと？私に？」

悠は、体を小さくしてかしまってる劉生に、日頃感じていた怖さを忘れて、自然に話しかけていた。

「押し花って、すぐにつくれるかな？」

「え？押し花？」

「うん。高遠さん、園芸部だろ？毎日、花壇の手入れや水かけ頑張ってる、どの部員よりも花のことに詳しくさうだから。押し花の作り方も知ってるかなと思って。」

私が、毎日花や木の世話をしてるの、石田君が知ってるなんてびっくり。

それに、石田君が私の名前を知ってるのも驚き。

石田君は、そりゃあ有名だから私でも名前を知ってるけど、私はふつ々の女子高校生なのに。

ま、でも、私が毎日せっせと花壇の手入れしてるのには、花が好きっていう他に、不純な動機もあるんだけどね。

まさか、花壇の手入れしながらサッカー部の練習見てるなんて、誰も思わないよね。

今日も、渋谷君、かっこいいし……

「あの、高遠さん？」

つい、いつものようにマイワールドにトリップしてしまっていた悠を劉生の声が呼びもどした。

「あっ、はい。えっと、石田君、なんでここに？」

「うっ……と、押し花の作り方……、高遠さん、知ってる？」

「知ってるよ。押し花作るの、最低でも10日くらいかかるけど。」

「10日?ごめん、そんなに待てないんだ。1日か2日で作れないかな?」

「えっ。そんな短い期間でなんか……まあ、もどきは、なんとかできるかな。その作りたい押し花用の花って、今から摘むの?」

「花じゃ、ないんだ。これ。」

劉生は、雑誌にはさんである四つ葉のクローバーを見せた。

「1、2、3、4、四つ葉のクローバー?」

「うん。」

「よく見つけたね。へえ、私、見るの、はじめてだよ。」

「その、もどきで、なんとなかなるかな?」

心配そうに聞いてくる劉生に悠は笑った。

「これ、しばらく雑誌にはさんで乾燥させてたんだ。それなら、もどきなら、作れると思うよ。」

「ほんと?よかった。それじゃ、作り方教えて欲しい。」

「いいよ。一緒に来て。」

悠は、劉生を連れて職員室に行くと、一緒に即席の押し花を作った。

「これ、即席だから、長く置いておくと色はあせてくるよ。」

「それでも、いいんだ。今は、少しでも早く仕上げて、持っていきたいから。」

「それ、だれかにあげるの?」

悠に聞かれて、劉生は赤くなった。

「うん……」

小さく頷く劉生に、悠は、喜んでくれるといいね と笑った。

「悠?」

呼ばれて悠は、はっと瑠夏を見た。

四つ葉のクローバーのことは、瑠夏には内緒にしよう。きっと、石田君、瑠夏が喜ぶのを見るの楽しみにしてるよね。

もしかしたら、サプライズのつもりかもしれないし。

「瑠夏、石田君と仲直りしなよ。」

悠がそういうと瑠夏は口をすぼめた。

「べつに、けんかしたわけじゃ、ないよ。でも、劉生からはきつと会いに来にくいよね。だから、私から会いに行く。」

「そうなんだ。たぶん、石田君は、自分から会いに来ようかなって思ってると思うけど。でも、うん、瑠夏から会いに行ったら、石田君、喜ぶよ。」

「で、悠、協力して。」

「は？協力？」

「明日の朝、私を悠の学校に連れて行ってほしいの。学校の場所がわかったら、さっき悠が言った補習が終わる6時にもう一度、学校に行く。」

「なにしに？」

「劉生をまちぶせする。」

瑠夏は、にっこりとほほ笑んだ。

やっと会えた1（前書き）

この話は、書いてみたらちよつと長くなってしまいました。なので、2つに分けます。前の話でふたりが合えるまであと1話って書いたのに、すみません。

やっと会えた1

ふたりで話していた病室に携帯のバイブ音が響いた。

瑠夏は、キャビネットから携帯を取り出して、液晶画面の表示を見た。

だれ？

表示ナンバーは、登録されたものじゃなかった。

見慣れないナンバーに怪訝な顔をしたが、とりあえず出て見ることにした。

「はい。」

『本橋瑠夏さん？』

聞き慣れない男の人の声に警戒心が強まる。

だれ？

聞いたことのない声。

切ったほうがいい？

不安を感じて瑠夏は、携帯を耳から話そうとした。

『劉生の父ですが、こんな遅い時間に申し訳ない。』

えっ？

劉生のお父さん？

瑠夏は、慌てて携帯を耳にあて直した。

「あの、もしもし、は、はい。本橋瑠夏です。こんばんは。」

『こんばんは。今、大丈夫ですか？』

「はいっ。ぜんぜん大丈夫です。」

『よかった。もう寝ているかと心配したのだが。』

「いえ、まだ起きてました。」

『瑠夏さんに謝らなければいけないんだ。』

「は？謝る……ですか？私は、石田さんに謝られることなんかないですけど……。」

石田と聞いて、悠が反応した。

小さな声で、

「電話、石田君から？」

と訊ねた。

瑠夏は、ゆっくり首を横にふると、まっつと悠を手で制した。

悠は、こくんと頷くと瑠夏が話しかけるまで待つことにした。

『いや、実はね、劉生、昨日帰ってきてたみたいなんだ。さつき、妻からそう聞いた。あいつは、離れにひとりで住んでいるから、普段でもめつたに顔を合わせなくてね。まだ会ってはいないんだけど。申し訳ない。瑠夏さんには、劉生が帰ってきたら連絡を入れると約束していたのに、遅くなっちゃった。弁解させてもらえるなら、昨日の朝から出張に出ていてさつき戻って来たばかりなんだ。』

「そんな、かえってこっちのほうが申し訳ないです。お忙しいのに連絡していただいて。でも、おじいさんからも連絡なかったですから、劉生君、まだ病院には顔を出してないんですね。」

『ああ、そのようだな。妻もそう言っていた。瑠夏さん、私が……いや、あいつは私には耳を貸さないだろうから、妻から病院に行くようにさせようか?』

「あつ、いえ、いいです。私、明日の朝には一時退院するんで、きつとすれ違いになります。あつ、でも、おじいさんは、きつと劉生君が来るのを待っているはずだから、おじいさんのところには行ってもらった方がいいかと。」

泰生の低い笑い声が耳に届いた。

笑い声は、劉生に似てる。

電話の相手は泰生なのに、瑠夏は胸がきゅんとなった。

劉生の声を聞いてるみたい。

瑠夏の顔が自然にほころぶ。

『ありがとう、父のことを思ってくれて。じゃあ、瑠夏さんが劉生に会うのは、瑠夏さんがまた病院に戻ってからでいいのかい？』

「ああ、えっと、そう……ですね。」

瑠夏はことばを濁した。

お父さんに劉生の学校で待ち伏せするなんて言えない。

『そうですか。じゃあ、こちらからは、劉生には今まで通り、父のところには見舞いに行くようにとだけ伝えておきます。』

「はい、そうして下さい。あの、」

『ん？なんですか？』

「わざわざ連絡いただいて、ありがとうございました。」

『いえ、どういたしまして。私は、瑠夏さんと話せて楽しかったですよ。』

やっぱり、劉生の声に似てる。お父さんの声をきいていると気持ちが悪く落ち着くみたい。

「こちらこそです。私もうれしかったです。それじゃ……あっ、あのっ」

瑠夏は、言うべきかどうか少し躊躇った。

『瑠夏さん？どうしたんですか？』

泰生の声を聞いて、やはり言おうと決めた。

「あの、少し時間いいですか？」

『ええ、大丈夫ですよ。』

「えっと、その、ですね。私・・・私とこうして話してる石田さんって、とても話しやすいです。劉生君がどうして石田さんと距離を置こうとしているのかわからないんですけど、私には、劉生君も石田さんもどちらも同じくらい優しくてちゃんと相手のことを考えられる人だと思います。だから・・・石田さん、劉生君と腹を割って話し合ったりできないですか？」

しばらく沈黙が続いた。

しまった。私、調子に乗り過ぎたんだろうか。

いくら劉生に声が似ていて話しやすかったとはいえ、こんな親子の関係に踏み込んだような話をしてはいけなかった。

瑠夏は、言ってしまった後後悔した。

石田さんに謝って、もう、電話を切ろう。

瑠夏が口を開きかけた時、電話口から泰生の声が聞こえた。

『……私が話しやすいと瑠夏さんが感じるなら、それは、私の劉生に対する偏見が少なくなっただからかもしれない。』

「……………」

『ほんの3か月前の私なら、瑠夏さんとうして話してなんかいなかったでしょう。それどころか、劉生のことを自分で考えるのも嫌だった。あいつのことが話題に上る時は、いつも何か問題がおこって、私が尻拭いしなければいけないような時ばかりだったから。』

「そんな、劉生……君は、お父さんがいっような問題児じゃないですよ。」

『妻と父以外で、劉生のことをそういうのは、瑠夏さんが初めてなんですよ。あいつの兄たちもまあ、私よりは劉生のことをわかってるようだが、普段、ふたりも劉生にはあまり会わないからね。劉生の味方は妻と父だけだった。私はふたりは、身^み鼻^び肩^{かた}だけで劉生を庇っていると思っていただけから、瑠夏さんが劉生のことをよく思っているのを聞いて、少なからず驚いた。まあ、それ以外に劉生が普段まわりからどんなふうに思われているのかを知るきっかけがあって、それと瑠夏さんの存在が、私の劉生への評価を変えた。』

「評価だなんて。石田さんは、劉生のお父さんでしょ？父親なら、子どものこと100%信じてあげるものじゃないんですか？評価って言うなら、いつでも100点ですよ。自分の子どものことは。」

瑠夏は思わず声を荒げていた。

『瑠夏さんのいうことは、もっともだと思えます。ありがとうございます。劉

生のことをそんなふうに思ってくれて。あいつは、いや、私とあいつとの距離は、これから少しずつ縮めていけるよう、努力します。』

「あ、いえ、すみません。生意気なこと言って。」

『今日、瑠夏さんと話せてよかった。瑠夏さん、退院したら一度、家にも遊びに来て下さい。また話をしましょう。きつと妻も瑠夏さんと話をしたがるでしょう。それじゃあ、今日はこれで。』

「はい、電話、ほんとにありがとうございました。」

瑠夏は、携帯を耳から離れた。

「今の、石田君のお父さんから？」

待つてましたとばかりに、悠が訊ねた。

「うん、そう。劉生に会えなくなった時、劉生のおじいさんとお父さんに会って、それで劉生が今、家を出てることを知って、戻ってきたら連絡してほしいって頼んでたから。」

「事情、よくわかんないんだけど、それで、石田君のお父さん、なんて？」

「や、劉生が昨日戻ってきたって。お父さん、昨日から出張に行っていて、さっき戻ってきたことがわかったから連絡くれたって。」

「ふうん。それなら、さ。わざわざ学校でまちぶせしなくても会える方法はあるんじゃない？」

「それは、あると思うけど、でも、今度ばかりは、私が自分から劉生に会いに行きたい。そうしないと、劉生に私の気持ち伝わらないよ。それに、今からいろいろ作戦を練っても、明日のまちぶせより早くは会えないよ。きつと。」

「なるほど……じゃあさ、明日、どうするか、一緒に考えよっか。」

悠のことばに瑠夏ははにかんで頷いた。

さっき、会ったばかりなのに、悠に劉生と同じにおいを感じた。

初対面でも気構えのいらぬ気さくさと優しさ。

病気の再発も移植も不安だらけで憂鬱なだけだったのに、病院に入院してふたりに出会ったのは、すごくラッキーだった。

偶然だけど、偶然じゃないふたりとの出会いを大切にしたい。

ふたりは、消灯が過ぎてると、見回りの看護師に注意されるまで、翌日のことについて話し合った。

でも、時間が超過して看護師に小言をもらったのは、悠の独り言のせいだと瑠夏は譲らなかつた。

翌日のお昼前、瑠夏と悠は別々に手続きを済ませた後、病院のロビーで待ち合わせた。

「じゃあ、お母さん、私、瑠夏のお母さんの車で学校に送ってもらおう。学校にはお母さんから電話を入れておいてよね。」

悠は、学校カバンを母親から受け取った。

「本橋さん、ほんとにいいんですか？うちの子はここから電車で登校させてもいいんですけど。」

悠の母が、啓子に申し訳なさそうに話しかけた。

「構いませんよ。悠ちゃんに協力してもらっているのは、うちの瑠夏のほうです。逆にこちらがお礼を言いたいですよ。」

「はあ・・・それじゃ、よろしくお願いします。悠。本橋さんに迷惑にならないようにね。と・く・に、話をする時には、自分の世界にトリップしないこと。」

悠の母のことばに瑠夏は吹き出した。

「なんで、瑠夏が吹き出すの。」

悠が頬をふくらませて瑠夏を睨んだ。

「ごめん。悠のお母さん、悠のこと、よっく、わかってんだなって思ってた。」

「人を妄想人間みたいに言って。私はそんなにトリップばっかしなしい。ただ、石田君が瑠夏の顔を見たらどんな表情するかなって考えるだけだもん。いつもはむっすうとして笑わない石田君がさ、瑠

夏には笑うんだって聞いて。えっ、あの顔で？笑ったら、そりゃホラーみたいになっちゃんじゃないの？あの顔に傷があったらフランケンだから、フランケンが笑うって考えたら、真冬の寒さが万年氷の吹き荒れるほど極寒になるほどさっむって……」

「「悠っ」「」

瑠夏と悠の母が同時にたしなめた。

「もう、そうならないようにって、くぎをさしたばかりなのに。」

悠の母はため息をついた。

瑠夏と啓子は、口に手をあてて笑いを堪えた。

悠は、むうっとした顔をして俯いた。

「じゃ、お母さん、行こう。悠も昼休みに間に合わせて学校行きたいみたいだし。」

「あっ、はい、お願いします。お昼休みに保健室と職員室に事情を話して、午後から授業が受けられるようにしたいですから。」

「それだけじゃ、ないと思うけどね。サッカー部って、昼休みは体育館で筋トレするんでしょ？」

「やっ！それは内緒っつ。」

悠が慌てて瑠夏の口を塞いだ。

悠の母は盛大にため息をつき、啓子はくすくす笑った。

「じゃあ、サッカー部の昼練に間に合うように行きましょうか。」

啓子が笑いを堪えて歩き出すと、瑠夏と悠はそれに続いた。

やっと会えた2 (前書き)

ようやくです。ようやく再会が叶いました。

やっと会えた2

悠を学校に送った後、瑠夏は啓子と一緒に家に戻った。

久しぶりに戻った自分の部屋は、入院前とはなにも変わっていないかった。

瑠夏は、ほっとした気持ちでベッドに横になった。

枕元に積んであるクッションをひとつつかむと胸の前で抱いた。

もうすぐ、劉生に会える。

クッションをきゅっとだきしめて胸の鼓動を鎮めようとした。

だが、鼓動は意に反して高まっていく。

瑠夏は、携帯に手を伸ばすと、写真フォルダを開けた。

前に劉生とふたりで撮った写真。

この写真を悠に見せると、悠は目を丸くしてたっけ。

「石田君、こんな柔らかな表情するんだね。」

悠のことばを思いだす。

私と一緒に劉生は、いつもこんな顔だもん。

悠や劉生のお父さんがいう劉生のほうが瑠夏には馴染みがなかった。

今日、劉生の学校に行ったら、そんな顔の劉生、見られるのかな。

どんな顔をしてたって、劉生は劉生。

私の好きな劉生に変わりはない。

むしろ、今まで見たことのない劉生に会えるのが、瑠夏は楽しみだった。

劉生のいろんな顔を見たい。

劉生のこと、ぜんぶ知りたい。

瑠夏は、そっと携帯の劉生の写真に口づけた。

もつすぐ、会える。

携帯を閉じて、ふたたびクッションに顔をうずめると、逸る心を抑えるように束の間目を閉じた。

「瑠夏、そろそろ行くわよ。」

ドアをロックして啓子が顔を覗かせた。

「もう、支度はできてるよ。」

「しっかり着こんだ？暗くなってそとはだいぶ寒いわよ。」

「大丈夫。それより、重ね着しすぎて着ぶくれになってない？そっちの方が心配。」

瑠夏がくるんと一回りすると、啓子は、だいじょうぶと、笑った。

「ねえ、瑠夏。やっぱりウィッグもかぶったほうがいいんじゃない？防寒にもなるし。」

「それは、いや。ウィッグをかぶると雰囲気変わるでしょ。いつもの私じゃないのを劉生に見せたくない。防寒なら、ニット帽の上からフードをかぶるし、マスクもするから。」

言い出したらきかないのはわかっていた。

啓子は小さくため息をつくと、諦めた。

「じゃあ、行きましようか。」

瑠夏は、堅い表情で頷くと、啓子と一緒に階段を下りた。

門の前に停まっていた車は、エンジンがかかったままで、すでに中は暖かった。

助手席に乗り込み、シートベルトをした。

うまくシートベルトを装着できないのは、厚手の手袋のせいばかりではない。

瑠夏は、いよいよ早まる鼓動に大きく深呼吸をして、自分を落ち着かせた。

啓子が運転席に乗り込み、車が走り出した。

5時30分

ふたりを乗せた車は、劉生の学校の近くに停まった。

そこで30分待った。

学校の正門から、補習を終えた生徒がちらほらと出てきた。

瑠夏は、シートベルトをはずすした。

「瑠夏、石田君の姿が見えてからでいいんじゃないの？」

寒さが気になる啓子が心配そうに声をかけた。

「お母さん、私、劉生の学校の中に入ってみたい。」

「瑠夏……」

咎めるような啓子の声に、瑠夏は真剣な顔で頼み込んだ。

「私から劉生に会いに行くって決めたから。だから、学校の中まで

迎えに行きたい。」

「でも、いつ出てくるかわからないのよ。」

「悠が、劉生は頭がいいから、いつも、補習終了の時間には出てくるって言ってたから。」

「だけど・・・」

「でも、も、だけどもなし。お母さんとこんな言い合いしてる間に劉生が出てきたらシャレにならない。行くね。」

瑠夏は、啓子の制止を振り切って車から出て校門のほうに歩きだした。

暖かい車中にいたせいか、外の寒さが身にしみた。

瑠夏はぶるつと身震いすると、フードを目深にかぶり、コートの中に手を入れた。

こんな、不格好な姿、いやだけど、今の私にはこれでも精一杯。

コートの中にはお気に入りのシャツにセーターを着込んで、中から暖かいレギンスをはいてるけど、その上のパンツはやっぱり一番好きなのをはいた。

コートのフードとマスクで顔半分以上覆われているので、一見、不審者にも見える瑠夏に、下校途中の生徒たちがちらちらと視線を向ける。

好奇の視線に怯みそうになる自分を励まして、瑠夏は校門の中に入ってしまった。

しばらくすると、校舎が見えた。

校舎の一角が明るくて、生徒たちはその方向から外に出てくる。

あそこが生徒玄関かな？

瑠夏は、歩みを止めると、玄関のほうが見える木陰に立って、劉生が出てくるのを待った。

ずいぶんたくさんの子が補習を受けているんだな。

絶え間なく続く生徒の姿に、瑠夏は感心した。

劉生の学校は、県内でも1、2を争う進学校だから、当然といえば当然かもしれないけど、同じ高校生でこんなに勉強を頑張っている人がいると思うと、瑠夏は少し恥ずかしくなった。

私、入院前に、こんなに必死に勉強したこと、なかった。

入院してからは、もっと、勉強してないし。

今度、劉生に勉強教えてもらおうかな。

そんなことを考えながら待つのは、全然苦にはならなかった。

だが、治療で体力の落ちた瑠夏に、冷感な暮れの寒さは思った以上にこたえた。

あまり外気に肌は触れていないはずなのに、手足の指先が凍えて痛い。わずかに外気に触れている目の周りも冷たかった。

無意識に小刻みに体を揺らして、寒さを紛らわそうとした。

お母さんのいうとおり、劉生が出てくるのを車の中で待ったほうがよかったかな？

ポケットの中で手をこすり合わせながら、ぼんやりそう考えた。

6時15分

あと5分。

あと5分だけ、待ってしよう。それでも出てこないなら、車に戻ろう。

補習終了時間から15分も過ぎると、さすがに玄関から出てくる生徒もまばらになってきた。

さっき、ひとりの生徒が出て、しばらくは、誰も出てこない。

もしかしたら、劉生、今日の補習には参加してないかもしれない。

そんな不安が胸に広がる。

でも、あと少し。

もう少しだけ待とう。

そうやって瑠夏は、劉生が出てくるのを待ち続けた。

6時30分

体の芯まで冷えて、頭が朦朧とし出した。

もう……

帰ったほうがいい……のか、な……

瑠夏は、ふらつきながら、車へ戻ろうとした。

暮れの寒さは思った以上に瑠夏の体力を奪っていた。

歩こうと足を踏み出したが、うまくバランスがとれず体が揺れた。

「瑠夏っ。」

後ろから力強い腕で抱きとめられた。

幻聴？

今、劉生の声が聞こえた気がした。

「瑠夏っ。」

もう一度、聞こえた。

今度は、はっきりと。

瑠夏は、後ろを振り向いて自分を抱きとめている人を見た。

会いたいと焦がれていた、劉生の顔がそこに会った。

「劉生……」

自分の体はゲンキンだなと瑠夏は思った。

さつき、寒さと失意に震えて、ところどころぼくと意識も失いかけたいたはずなのに、今は、すっかり覚醒している。やっと会えた劉生の顔や仕草を見逃すまいと、神経が研ぎ澄まされていた。

「瑠夏、どうしてここに？てか、冷たいよ、瑠夏の顔。いつからいるんだよ？」

劉生は、瑠夏を抱いた腕をほどくと自分に向き合わせた。

そして、潤んだ瑠夏の瞳を心配そうに覗きこみ、自分の手ぶくろをもどかしげに抜き取ると、そっと、瑠夏の顔に触れた。

「こんなに冷えて……具合悪くしたらどうするんだ。」

劉生は、首に巻いたマフラーを取ると、瑠夏の顔が隠れるようにして巻いた。それから、自分のコートを瑠夏に着せた。

「だめ、それじゃ、劉生が寒い。」

劉生のコートを脱ごうとする瑠夏の手を劉生が止めた。

「俺は、だいじょうぶだから。それより瑠夏のほうが心配なんだ。いつたい、いつからここにいるんだ。」

瑠夏は、劉生のことばを無視して、コートを脱ぐと劉生に着せ、そのまま、劉生に抱きついた。

「るっ……っ」

「やっと、会えた。やっと……劉生、会いたかった。」

抱きしめる腕にいつそう力を込めて、瑠夏は呟いた。

もう離さない

まだ終わらないのかよ。

劉生はじれていた。

自分の課題は終わっているんだ。もういい加減、解放されたいのに、補習終了まであと30分もあった。

ほんとは、いつものように勝手に席を立ちたかったが、おとといまで無断欠席をしていた手前、そもいかなかった。

ほとぼりが冷めるまでは、大人しくしていよう。

劉生は大きく息を吐くと、明日やる予定の課題を解き始めた。

まったく、こうしている時間を罰掃除の時間にあてたいよ。

そしたら早く帰れるのに。

今朝、親父が学校に来て、いつものように理事長や校長となにやら話し合ったようで、俺の無断欠席については、反省文と1ヶ月間の教職棟の掃除でかたがついた。

いつものことだ。

くそ親父が裏から手をまわしてくれてるおかげで、この学校では、成績さえよければ大抵のことには目をつむってもらえた。

劉生はそれについて、どうでもいいと思っていた。

教師から非難されることも、親の権力を使ってと冷たい視線を浴びることも、全然気にしなかった。

瑠夏と出会う前までは。

今は、退学になっても構わないと投げやりになっていた頃の自分を恥じている。

そう思えるようになったのは、瑠夏のおかげだ。

はあっ

知らず知らずのうちに、また、ため息が出た。

このままでは、補習が終わってすぐに掃除を始めても、学校を出れるのは7時くらいになる。

それから大急ぎで行っても、病院につくのは8時前。面会ぎりぎりだ。でも、今日こそは、瑠夏に会いたい。

瑠夏……

劉生は課題を解く手を止め、ポケットの中に手を伸ばした。

そっと、四つ葉のクローバーの押し花に手を触れる。

これを瑠夏にあげる。

その時のことを考えただけで胸の鼓動が速くなる。

あと20分

今は、課題に集中しよう。そのほうが早く時間が過ぎる。

劉生はふたたび問題を解き始めた。

終了のチャイムが鳴った。

「時間だ。課題を解いたやつはもう帰っていいぞ。まだのやつは、チエックをもらうまでがんばれ。」

待ち望んだ終了を告げる声。

劉生は、急いで机の上を片づけ始めた。

「石田君。」

今までなかったことなので、劉生はその声が自分を呼んでいるとは思わなかった。

さっさと片付けを終えて、いすから立ち上がった。

「石田君。」

さっきよりはっきりと聞こえた。

俺？

劉生は、声のする方を向いた。

斜め後ろに座っている女の子と目があつた。

その子は、劉生が自分のほうを向いたのでホッとしたりしたようだった。

「石田君。」

また呼ばれた。今度は見ている前で呼ばれたので、その子が自分を呼んでいるのだとはつきりわかつた。

俺に、何の用？

劉生は、思い当たることもないので訝しげにその子を見た。

「ごめん、石田君。助けて。」

「は？」

「この問題、わからないの。石田君、解けたんでしょ。お願い、教えて。私、どんなに考えても解けなくて。」

なんで俺が・・・

劉生はいらつとしたが、必死に頼むその子を見て、いやだとはいえなかつた。

「どい？」

劉生が聞くと、その子は問題を指さした。

「これ、どうしてもわかんない。」

その問題は、劉生も少してこずった問題だった。

「ああ、それは、微分方程式の・・・置換積分法の公式をつかって・・・」

とにかく焦っていた。

どうしてこの子が今日に限って俺に声をかけてきたのかわからないけど、早く問題を解いて教室から出たかった。

「・・・と、こうなるんだけど。」

「ごめん・・・ここまでではわかったけど、ここからもう一度説明してくれる?」

劉生は小さくため息をつく、その子が指した所から、もう一度、説明を繰り返した。

結局、その子の課題が終わった時には終了時間から25分も過ぎていて、まわりには、ほとんど誰もいなくなっていた。

劉生は、心の中で舌打ちをすると、早々に教室を出た。

「待つて、石田君。途中まで一緒に・・・」

さっきの子が呼びかけたようだったが、劉生の耳には届かない。

少しでも早く病院に行きたかった。

今日は、掃除を勘弁してもらおう。明日の朝、早くに来て掃除すると先生に言っつて、それから病院に急ごう。

そう決めると、劉生は、生徒玄関を出て教職棟に向かおうとした。

「石田君」

玄関のドアを開けた時、後ろから腕を掴まれた。

苛立つ気持ちを抑えて劉生が後ろを振り向こうとした時、目の端で紺色の影が揺れた。

その影を目にとめたのと同時に、劉生は、掴む手を振り払って駆けだしていた。

「溜夏っ」

倒れそうになる体を抱きとめて劉生は安堵の息を吐いた。

腕の中にいるのは、やっぱり溜夏だった。

溜夏に触れている。

これは夢じゃないよな。

夢でないことを確かめるように、劉生は溜夏を抱く手に力を込めた。

瑠夏が顔をあげて自分を見た。

「瑠夏っ」

瑠夏の顔は真っ青だった。今にも気を失いそうに青白い瑠夏の顔を見て、劉生は慌てた。

「劉生……」

こんな状況なのに、自分の声を呼ぶ瑠夏の声に鼓動が速くなる。

「瑠夏、どうしてここに？てか、冷たいよ、瑠夏の顔。いつからいるんだよ？」

乱暴に手袋を取り、そつと、瑠夏の顔に触れた。

「こんなに冷えて……具合悪くしたらどうするんだ。」

冷えた瑠夏の顔や体を早く暖めたくて、自分のマフラーとコートを瑠夏に着せた。

「だめ、それじゃ、劉生が寒い。」

俺の気持ちを無視して瑠夏はコートを脱ごうとする。

「俺は、だいじょうぶだから。それより瑠夏のほうが心配なんだ。いつたい、いつからここにいるんだ。」

とにかく早く、瑠夏を暖かいところに連れて行かないと。

劉生が、どうしようかと考えている間に瑠夏は、脱いだコートを劉生にはおらせると、その胸に潜り込むように抱きついてきた。

「るっ……」

思いがけない瑠夏の行動に、劉生はことばを詰まらせた。

「やっと、会えた。劉生、会いたかった。」

どくんっ

一気に鼓動がマックスまで跳ね上がった。

このまま、こうして瑠夏と抱き合っていたという甘い誘惑を断ち切るのは至難の技だった。

だが、やはり瑠夏の顔色の悪さには勝てなかった。

「瑠夏、とにかく暖かいところへ行こう。ここでは、瑠夏の具合がますます悪くなる。」

引き離したくない自分の気持ちを叱りつけ、劉生は瑠夏から体を離すと、教職棟のほうに向かった。

補習が終わったばかりで、まだ先生が大勢残っているから、教職棟はまだ暖房がついているだろう。

瑠夏の手を引くと、素直に自分について来た。

さっき聞いた瑠夏のことばが頭の中でリフレインする。

うれしくなって、思わず顔が緩むのを止められなかった。

「石田君、今日は、ありがとう。」

唐突にそう言われて、劉生は歩みを止めた。瑠夏も一緒に止まる。

ふり向くと、さっきの子が立っていた。

まだ帰っていなかったのか。

「いや、べつに。」

「また、わからない時は教えてね。」

そう微笑むと、その子は正門のほうに去った。

瑠夏は、去っていく子が自分に挑むような目を向けたのを見逃さなかった。

あの子、もしかして劉生のことが・・・

ちりつと胸が痛くなった。

思わず顔を歪めた瑠夏に、劉生は心配そうな目を向けた。

「瑠夏、つらいのか？」

「ううん、平気。」

瑠夏は、自分が嫉妬しているのを劉生に知られたくなくて、無理やり笑った。

「うそつけ、そんな青い顔してるのに。」

劉生は、急いで教職棟の中へ入った。

職員玄関で、養護教諭の赤西とばったり会った。

ちょうどよかった。保健室を貸してもらおう。

「赤西先生、友だちが具合悪いみたいなんです。みてもらえますか？」

「え〜っ、もう帰るところだったのに。しょうがないなあ。」

赤西は、そう言いながらも、ふたりを保健室に連れていき、瑠夏の様子をみてくれた。

「ああ、確かに顔色が悪いね。ちょっと横になったほうがいい。石田君、その子をベッドに寝かせて。あんたも一緒に寝るんじゃないよ。」

軽口をたたく赤西に劉生は耳たぶまで真っ赤になった。

「そんなこと、しませんよっ。」

「まあ、そうだろうっねえ。石田君は、どうみてもそっち方面に慣れてなさそうなもの。」

「・・・・・・・・」

顔を赤くして俯く劉生に、瑠夏は思わず吹いた。

「おっ、笑って少し顔色が戻ったかな。」

赤西は、ベッドサイドのいすに腰掛けると、瑠夏に体温計を渡して脈を測りはじめた。

「脈は少し早いね。でも、熱はなさそうだ。これなら少し安静にしていけばよくなりそうだね。」

「よかった。」

劉生が赤西の後ろで安堵した。

「さて、これからどうするかなんだけど、私はちょっと急用があっ
て出なければいけない。で、今から、その子の迎えを呼んでもらう
んだけど、迎えが来るまで私は待てそうもない。だから、石田君。」

赤西は、劉生をぎろっつと見た。

「はい。」

「その子の迎えが来るまで、一緒に待っていて、そして、保健室の
カギをかけて、そのカギを明日の朝7時半までにまたここに持って
くること。」

「俺が、ですか？」

「そう、君が。」

赤西は、カギを劉生の手に押し込めると、デスクの上の電話に手を伸ばした。

「さて、迎えに來れそうな人の連絡先を教えてくださいかな？」

「あの、私の母が、学校の校門近くにいます。電話をして来てもらうより、そこまで行ったほうがいいかと。」

「なんだ、近くにいるんだ。それじゃ、車でこの保健室の横まで来てもらおう。歩いてそこまでいくなんて無理は、しないほうがいい。」

そう言つと、赤西は啓子に電話をかけ、事情を説明した。

「すぐに来てくれるそうだから、待っていなさい。」

瑠夏の肩に手を置き、そう話すと、赤西は急ぎ足で保健室を出ていった。

ぱたん

ドアの閉まる音がすると、とたんに動悸が激しくなった。

瑠夏とふたりきりなんて、久しぶりだ。

「劉生、傍にいて。」

瑠夏の小さな声に鼓動はますます跳ね上がる。

劉生は、言われるままベッドサイドのいすに腰を下ろした。

瑠夏がゆっくり起き上がる。

「瑠夏、本橋さんが来るまで寝てたほうがいい。」

起き上がる瑠夏の肩を掴んでベッドに戻そうとした。

瑠夏は、寝るのを拒み、肩に置かれた自分の手を握り返した。だが、力が入らないのかその手はするりとけて、瑠夏はベッドに仰向けに倒れ込んだ。

慌てて倒れ込む瑠夏を支えようと手を伸ばした。

どくんっ

鼓動が跳ねて息苦しさを感じた。

目の前に瑠夏の顔がある。

図らずも、瑠夏にそばに両手をついて、覆いかぶさるような形になってしまった。

ベッドの上からどこごとくと思うのに、体がいうことを聞かない。

瑠夏の吐息が顔にかかる。

じっと劉生の顔を見ていた瑠夏が、そっと手を伸ばして頬に触れる。

「こっつして劉生に触れられるなんて、うそみたい……」

潤んだ瑠夏の瞳に、完全に心を奪われていた。

気がつくと、瑠夏の唇に自分の唇を押しつけていた。

「ん……」

瑠夏のくぐもった声に、はっと我に返った。

俺ってば、なんてことを！

慌てて瑠夏から体を離そうとした。今度は、ちゃんと体が動く。

だけど、離そうとした劉生の動きより早く瑠夏の両腕が首に巻き付く。瑠夏は、そのまま抱きついて来た。

「劉生、好き……」

え？

今、なんて？

小さく耳元でささやかれた声が信じられなくて、首に巻き付いた手をといて、瑠夏を見た。

瑠夏の唇は震えて、瞳には涙が溢れていた。

「瑠夏……」

それ以上、ことばを継げない劉生に、瑠夏はもう一度、呟いた。

「劉生、好きだよ。ずっと、傍にいて。」

劉生は瑠夏を抱きしめた。

もう、離さない。

ぜったい、離したくない。

「ずっと、瑠夏の傍にいる。瑠夏、愛してる。」

クリスマスイブの日、ふたりの心は繋がった。

思いがけないクリスマスプレゼント

ぱあっと、保健室の外側が明るくなった。

車が駐車する音に、劉生と瑠夏は体を離れた。劉生は、瑠夏の頬をそっと撫でると、保健室のはき出し口のドアを開けた。

ノックしようと思っていた啓子は、ドアがすっと開いたので目を丸くしたまま立っていた。

「本橋さん、お久しぶりです。」

劉生は笑いかけようとしたが、さっきまで瑠夏と抱き合っていたことが恥ずかしく、ぎこちない声になってしまった。

「石田君、久しぶりね。瑠夏は？」

「ベッドで横になっています。」

啓子は、保健室の中に入って瑠夏の様子をうかがった。

少し顔色は悪いが、呼吸は安定しているようだ。

「もう、無茶をするから。だから石田君が出てくるまで車で待って
いようって言ったのに。」

「じめんなさい……」

咎める啓子に、瑠夏はしゅんとなって謝った。

「とにかく、家に帰りましょう。今日はもう安静にしたほうがいいわ。」

「うん。」

瑠夏は素直に頷くと、ベッドを降りた。

「それじゃ、僕は、保健室を戸締りして、それから帰ります。」

「えっ、劉生、一緒に来ないの？」

劉生は、苦笑いして首を横にふった。

「今日は、帰るよ。明日、病院に行くから。」

「私、昨日から一時退院で家に帰っているの。1月3日にしか戻らない。」

「そうなんだ。じゃあ、年明けにまた……」

瑠夏が、きゅっと唇を結んだまま強く首を振った。

「そんな先まで待てない。明日、会いたい。」

瑠夏のことばに劉生は驚いた。

いや、そう言ってくれるのはうれしいけど……

「でも……明日はクリスマスだろ。家族で一緒に過ごしたほうが

いいと思う。それに、今日の明日じゃ、まだ体力的に無理があるから、家でおとなしくしてたほうが。」

「いや、どうしても家から出るなって言うんだったら、劉生が家に来て。」

「ええっ、いや、それはちょっと……。」

「なぜ？私は劉生と一緒にクリスマスを過ごしたい。」

瑠夏は譲らなかった。

「石田君、私からもお願いするわ。明日、家に来てくれる？」

本橋さんまで何言い出すんだ。

「本橋さん……。」

「そうしてくれたほうがいいわ。でないと、この子のことだもの、家を抜け出して石田君に会いに行くくらいのはしでかしそうなもの。」

「もし、劉生が来てくれないなら、考えるかも。」

堂々というなよ、瑠夏。

劉生は、小さくため息をつくど、折れることを了承した。

「……わかりました。明日、お邪魔させていただきます。」

瑠夏の家に行くなんて思わなかった。

というか、こんな展開になるなんて。

俺は、病院に行つて、瑠夏に四つ葉のクローバーのしおりを渡せればいいと思つていたのに。

劉生の戸惑いをよそに、瑠夏と啓子は明日の約束を取り付けると早々に帰った。

明日、学校が終わったら、瑠夏の家に行くのか……

よその家に招かれるなんて、中学校にあがってから一度もなかったから、緊張する。

うまくやれるかな、俺……

劉生は、大きくため息をつくとき、保健室の戸締りを済ませ、家路についた。

12月25日

学校が終わると、急いで家に帰り、瑠夏の家に行く準備をすると玄関で靴を履いていた。

「どこへ行く、劉生？」

背後から泰生が呼びかけた。

ちっ、また説教か。勘弁しろよな。今は、くそ親父の説教なんか聞いてもらえない。

質問に答えず、瑠夏へのプレゼントを持って玄関を出ようとした。

「そのプレゼントからすると、瑠夏さんのところに行くのか？」

劉生の動きが止まった。

瑠夏、って言ったのか？

全く予期しないことばが、泰生の口から出たことに驚いた。

なんで、親父が瑠夏のことを知っているんだ？

眉をひそめ、警戒を込めた眼差しを受けた泰生は、ふっと笑った。

「まだ、私の待ち合わせまで時間があるから、瑠夏さんのところに行くのなら、私が送って行こう。今日は、家に帰っているのだろうか？」

「……………なぜ、親父が瑠夏のことを知ってるんだ。」

「お前が家出をしている時に、ちょっと病院で親しくなってね。携帯の番号を交換する仲だよ。」

これは、新車の苛めか？

まったくらしくないだろ。

なにが携帯の番号を交換する仲だ。

いったい、何の冗談だ？

「携帯の番号を？」

「そつだ。お前は携帯を持たないから、瑠夏さんの番号知らないんじゃないのか？」

ああ、確かに俺は瑠夏の番号を知らない。

図星をさされて、劉生は面白くなかった。

瑠夏の家までの行き方も、昨日の内に詳しく聞いていた。でない
と、途中でわからなくなっても、簡単には電話できない。

「どうする？場所によっては、車のほうが早いと思うが。」

泰生の表情はいつもと変わらず、淡々と話している。

その表情とせりふが合わない。

劉生は、いつもとのギャップに戸惑った。

親父の言っていることを素直に受け取っていいものかどうか……

だが、瑠夏の家まで車で行くほうが早いかと問われれば、確実にそのほうが早い。

昨日聞いた家の場所までは、電車とバスを乗り継いで、劉生の家から1時間近くかかる。だが、幹線道路を使えば30分とかからない。

「……車で行く。」

今の劉生には、それが精一杯だった。

泰生は、軽く頷いて口角をあげた。

ふたりで並んで駐車場まで行くと、泰生に促されるまま、無言で助手席に乗り込んだ。

「要所要所で、指示を出せ。」

泰生のことばに、劉生は、わかったと、ぶっきらぼうに言った。

しばらく無言のまま、車はクリスマスイルミネーションで明るい道を静かに走った。

「瑠夏さんは、いい子だな。」

唐突に話しかけられて、劉生はぱつと泰生を見た。

「……瑠夏とそんなに親しいのか？」

親父が瑠夏としゃべっているとこなんか、想像できない。

瑠夏と親父は、どんな話をしたんだ……

劉生は、困惑を隠さなかった。

「お前とよりは、親しい……かな。親子でもお前とはほとんど会話らしい会話したことないからな。」

「いったい、誰のせいだと思ってるんだ。」

先に、親子の会話を拒否してきたのは、そっちなのに。

「べつに、話すこともないから。」

「そう……だな。これまでは、お前とまともな話ができるとは思っていなかった。」

「こっちもそう思っていた。」

泰生は、ふっと、苦笑いした。

「だが……お前は、今までずっと、周りの誤解に傷ついて来たんだな。」

劉生は、はっとした。

なにを言い出すんだ、親父は。

今さら

膝の上でぐっと拳を強く握ると、唇を真一文字に結んだまま前方を見据えた。

「……今まで、気づかなくて……悪かった。」

劉生は、臆が白く浮き出るほどに、さらに拳を強く握りしめた。

「……どういふことなんだ。」

なんで、今さら謝るんだ。

そんな簡単なひと言で、これまでのことを無かったことにしようというのか。

そんなことばで済まされるほど、簡単なことじゃない。

劉生の心は千路に乱れた。

ずっと、父親とはわかり合えるはずがないと思っていた。

自分がどんなに弁解しても、一生懸命努力することで自分をわかってもらおうと思っても、その想いは一方通行でしかなかった。

もう、わかってもらおうとは思わないと、決めたのだ。

特に親父には。

それなのに、俺の悲痛な決心を覆そうというのか。

ふざけるなっ。

劉生の顔が次第に歪んで行くのを目の端に捉えて、泰生は小さく嘆息した。

「お前の気持ちが、そう簡単に解けるとは思っていない。お前が傷ついて来た年月の長さからすれば、そうだろう。」

泰生は、一度、ことばを切って、そしてまた口を開いた。

「だがな、人の心は変わるんだ、劉生。少なくとも、私のお前に対する気持ちは、以前とは違う。お前が容易に私のことばを受け入れられないものわかっている。それでも、ここから、もう一度、スタートさせられないだろうか。」

「……こんなに、親父と言い合いでないことばを交わすのは、いったい、何年ぶりのことなのか。もう、記憶にすら残っていない。だが、これまでと違って、親父のことば一つ一つが、胸に落ちてくる。拒絶してもいいはずなのに、すんなりと心に入ってくる。」

俺の心も、変わったんだらうか？

「なんで、今になってそんなこと考えたんだ？」

劉生は、はじめてまともに泰生の顔を見た。

泰生は、目を細めて少し照れたように笑った。

「瑠夏さんの影響・・・かな。」

「瑠夏の？」

「彼女は、お前と知り合ってたまだ1年も経っていないはずなのに、私よりお前のことをよく理解していた。親子でわかり合えなかったことを他人の彼女に簡単にできたことが、私には少なからずショックだった。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・彼女は、お前は優しいって言うってたぞ。それから、私とお前はそっくりだとも。お前とそっくりだから、私も優しいのだろうと。そんなことは、お前の母さん以外に言われたことなかったから、面食らった。」

ふっと笑う泰生の穏やかな顔を劉生は穴があくほど見つめた。

親父がこんな顔をするなんて。

「私は、お前を世間体と言う色眼鏡で見っていたのかもしれないな。彼女の素直な心が、私にそれを教えてくれた。」

「・・・・・・・・勝手だな。」

眉間にしわを寄せて劉生が呟く。

「そうだな。お前からしたら、私は勝手だな。勝手に息子を見下げて、それなのに、やり直そうと持ちかける。確かに勝手な言い分だ。だが、劉生、これを瑠夏さんからのクリスマスプレゼントだとは思

つてくれないだろうか。」

「瑠夏からのクリスマスプレゼント?」

「あの子なら、きっと、そうしてほしいと言っているのではないだろうか?」

そうだろうか?

いや、瑠夏なら、確かにそう思うかもしれない。

親父が瑠夏とどんな話をしたのかわからないが、瑠夏がそう望むなら……

「まだ、ほんとうに瑠夏がそう思っているのかわからない。だから、すぐに親父とやり直しのスタートを切るとは、言えない。だけど……この話、瑠夏に確かめてみて……それで、瑠夏がそうしろというのなら、考えてみてもいい。」

「わかった。」

それきり、泰生から話しかけてくることはなかった。

時折、道案内の指示を求めるために話をしたが、それ以上の会話はないまま、車は一路瑠夏の家へと走った。

ふたりだけのクリスマス

もうすぐ瑠夏の家に着く。

握った掌がじっとり汗ばんでいる。鼓動は異様なくらい早くなっている。もう、自分では制御不能だ。

初めて瑠夏の家に行って、瑠夏の家族に会う。

それだけのことははずなのに、人生で最大の大事を目の前にしているような気分だった。

隣から、押し殺したような笑い声が聞こえた。

むっとして泰生を睨めつけた。

「いや、今のお前は、まるで結婚を申し込みに行く時の男の顔だなと思って。」

はあっ？

なにを言い出すんだ、親父は。

自分の父親からは、一生聞くことがないような軽口に劉生は絶句した。

「もっと、力を抜け、劉生。今からそんながちがちに固くなっていたら、瑠夏さんの家に行ったら、ひと言も話せなくなるぞ。それどころか、挙動不審なことを、」

「だまれ。」

劉生は、低く唸る声で泰生を制した。

「さつき、クリスマスプレゼントだかなんだと言って、歩み寄ったつもりになっているのかもしれないけど、俺は、まだそんな気持ちにはなっていない。俺がどうしようと、親父には関係ない。」

泰生は、複雑な表情をして劉生を見たが、それ以上はなにも言わなかった。

劉生は、頑なな表情で前を睨むように見ていた。だが、劉生の冷や汗は、いつの間にか引いていた。

「その角を右に。」

劉生のことばに車が静かに右折すると、一軒の家の前に瑠夏が立っていた。

「瑠夏、この寒空にまた無茶をして。」

劉生は、車が止まると同時に飛び出すと、瑠夏の傍に駆け寄った。

「いらっしやい、劉生。約束の時間ちょうどだね。私は、ほんの少し前に出てきたんだよ。ほら、手もまだ暖かいでしょ。」

瑠夏に手を握られて、少し慌てた。

親父、まだいるんだよな。こんなところ、見られたくない。

劉生は、わかったから　と言うと、瑠夏から手をはなした。

「お父さんに送ってきてもらったの？」

ほころぶ瑠夏の顔に、劉生は、ああ　とだけ返事した。

「こんばんは、瑠夏さん。今日は、こいつをよろしく。」

車から降りて、泰生が頭を下げた。

「こちらこそ、せつかくのクリスマスに、劉生君を招待しちゃってすみません。」

「いや、この4、5年、うちには家族でクリスマスを楽しむ習慣はないんでね。気にしなくていいよ。それじゃ。」

手をあげると、泰生は車に乗り込み発進させた。

泰生の車を見送ると、ふたりは家に中に入った。

「お、おじゃま、します。」

それまで平静に戻っていた劉生の鼓動は、ふたたび駆け足になってきた。

瑠夏が先に立ち、劉生をリビングへと案内した。

リビングはオフホワイトを基調とした壁紙にモフィブラウンで揃えられたソファと家具。明るくて暖かい色調のリビングは、瑠夏の

家らしいと思った。部屋の奥のほうにアップライトのピアノが置いてあり、その傍で劉生の背丈くらいのクリスマスツリーのライトが瞬いていた。

「座って、劉生。今、お茶を持ってくるね。」

瑠夏は、劉生をソファに座らせると、入ってきたドアから出ていった。

劉生は、座ってもなかなか落ち着けず、何度も部屋の中を見渡した。

自然にリビングの入り口に目が向く。

もうすぐ瑠夏の家族があそこから入ってくる。落ち着いて挨拶するんだぞ。挨拶の練習、ちゃんとしてきたから、その通りにすればいいんだ。

ぶつぶつと、話すことを反芻すると、少し落ち着いてきた。

10分くらい待って、瑠夏が入ってきた。

劉生は、思わず立ち上がって、直立不動の姿勢を取った。

「なに、劉生。なんでそんなに固くなってるの？おかしいよ。」

瑠夏が、ティーセットを置きながら、くすくす笑った。

それから瑠夏は、ソファのコーナーで、劉生とカウンセリングポジションになるように腰かけた。

「いや、べつに、固くなんかなくてない。」

劉生は、緊張を誤魔化すように少し乱暴に座り直した。

「ただ、やっぱり入口が気になり、そわそわとそちらのほうばかり気にしていた。」

「劉生、どうかした？入り口ばかり見て。」

「いや、本橋さんたち、まだかなって……」

「本橋さんって、ああ、お母さん？いないよ。」

「は？いない？」

劉生は、気まずそうに頭をかいていた手を止めた。

「いないよ、誰も。10時までには、劉生とふたりだけだもの。」

「10時までには……俺と、ふたりだけ？」

「えええつ、マジで？うそだろ？」

「瑠夏のことばに劉生は、一瞬、フリーズした。」

「劉生、お茶、冷めちゃうよ。あのね、このスコーン、私が焼いたの。食べて食べて。」

ふたりだけということに、何の抵抗もないらしい瑠夏が無邪気に

スコーンなんか、すすめてくる。

劉生は、ロボットのように、瑠夏に言われたとおりにお茶を飲み、スコーンを口にした。

「どう、おいしい?」

心配そうに聞いてくる瑠夏に、うまい と呟き、食べかけのスコーンの残りを一気に頬張る。

味なんか、しない。

紅茶の熱さも感じなかった。

やたら大きく聞こえる心臓の音がうるさくて、そちらにはかり気を取られそうになる。

「つぎは、これを食べてみて。このオープンサンドも私が作ったんだよ。」

ああ

そうして瑠夏はそんなに平気でいられるんだ。

いや

瑠夏が平気なのは、あたりまえか。

好きの大きさでいったら、俺の気持ちの十分の一でも瑠夏は俺を思ってくれているのか、わからない。

瑠夏に言われたとおりに、ローストビーフの入ったオープンサンドをたいたら、普段なら絶対口にしない甘いブッシュドノエルを食べた。

「劉生、おいしい?」

瑠夏が優しく微笑む。

「うん、うまい。」

「ほんとにおいしい?さっきから、うん、と、うまい、しか言わないんだけど?」

「うまい」

と、機械仕掛けの人形のように呟く劉生に、瑠夏は小さくため息をついた。

「もう少し、心をこめていつてくれたらなっ。」

口をすぼめて拗ねるような瑠夏の口調に、やっと我に返った。

「いや、ほんとにうまいって。俺、普段は甘いものなんか食べないのに、あんまりうまいから、ほら、ケーキも全部たべたよ。」

慌てて弁解する劉生に、瑠夏は、にっこりした。

「劉生が全部たべてくれて、うれしい。お茶、もう一杯、淹れるね。」

「いや、俺が淹れるよ。」

瑠夏にもてなされてばかりでは気が引けると思い、劉生は、ティ
ーポットに手を伸ばした。

ふたりの手が同時に取っ手を触った。

触れ合う手のぬくもりに、瑠夏は顔を赤くして手を引っこめよう
とした。だが、劉生がそれを許さなかった。

それまで抑えていた気持ちを一気に表に現すように、強く瑠夏の
手を握りしめると、そのまま自分のほうへ引き寄せた。

劉生に引き寄せられて、瑠夏は倒れ込むように劉生の胸の中にお
さまった。

「瑠夏………」

抱きしめる腕に力が入る。

ニット帽の上から瑠夏の頭に唇を押しあてた。それから、こめか
みに、頬に、そして耳へとキスを落として行く。

瑠夏が恋しい。

瑠夏に触れたい。

劉生は、自分の衝動に翻弄されるまま、キスを落とし続けた。

「劉生……」

瑠夏が喘ぐように声を出した。

その声に、はっとなって、瑠夏を離した。

俺は、今、なにをしてたんだ？

自分の行動が信じられなくて、劉生は、茫然とした。

「劉生……？」

瑠夏がそつと顔を覗きこむ。

瑠夏の潤んだ瞳と目があって、劉生は頭の先まで真っ赤になった。

「ごっ、ごめん、瑠夏。俺、瑠夏の気持ちも考えず、その……ごめんっ。」

「謝らないで。謝られると、劉生の気持ちを疑ってしまうっ。」

「俺の気持ちを疑うって、」

「ただの欲望だけなのかって。」

「違うっ、絶対そんなことない。俺は、」

「俺は？」

うっつと詰まった。

ちゃんといつぱにしようと思つと、かえって声に出せない。

「劉生、俺は、なに・？」

瑠夏が答えを求めている。

俺は、と言って、また詰まっただが、大きく深呼吸をして、そして自分の気持ちをことばにした。

「俺は、瑠夏が好きだ。」

「私も」

瑠夏が抱きついてきた。

自分の体に瑠夏のぬくもりを感じて、これは現実だと受け止めた。

俺の片思いじゃない。

さっきとは違って、そつと瑠夏を抱きしめた。

今、俺の中に、瑠夏がいるんだ。

ツリーのライトの柔らかな光の中、ふたりだけのクリスマスのひと時は、静かに流れていた。

ふたりだけのとき(前書き)

この話から第3章です。いよいよ瑠夏は移植します。

ふたりだけのとき

初雪の知らせを告げるニュースがテレビから流れると、瑠夏は、リビングのカーテンを開けた。

「見て、劉生、ほんとに降ってる。」

はしゃぐ瑠夏に劉生は、目を細めた。

ソファから立ち上がると、外を眺める瑠夏を背後から抱きしめた。胸の前で交差した劉生の腕に瑠夏が手を重ねてきた。

「雪って、こんなにきれいだったんだな。」

ぽつりと呟く劉生に、瑠夏は黙って頷いた。

ゆっくりと降りてくる雪の一粒一粒が、庭の明かりにほのかに照らし出されている。

スローモーションで降る雪が地面に落ちていく様をふたりはしばらく黙って見ていた。

「ことばがいらない。」

瑠夏を抱きかかえる劉生が窓ガラスに映っていた。

ガラス窓を通してお互いに視線を交わし合う。

静寂の中、ふたりの存在だけが確かなものとして感じられた。

「ずっと、こうしていたい。」

瑠夏は、劉生に体をもたせかけた。

「うん……」

瑠夏を抱く劉生の腕に力がこもる。

「劉生……聞いていい？」

「なに？」

瑠夏は、閉じていた瞳をゆっくり開いた。

「どうして、私なの？」

「……どうしてってきかれても、困るよ。瑠夏を好きになつたのに理由なんかない。いつのまにか、瑠夏のことしか考えられなくなっていたんだから。」

「私は……普通の女の子みたいに外でデートもできない。治療になれば、会えないことだってある。頭もスキンヘッドで……」

窓に映る瑠夏の頬に涙が一粒こぼれた。

「そんなこと、たいしたことじゃない。俺は瑠夏がいいんだ。いや、瑠夏じゃなきゃ駄目なんだ。」

劉生は、腕をほどいて瑠夏を自分のほうに向けた。

「俺は、問題ばかり起こして、周りから敬遠されてばかりだった。俺と一緒にいたら、瑠夏だって誤解されるかもしれない。俺は、俺の存在が瑠夏にマイナスかもしれないって思っていて、それでも瑠夏が欲しいんだ。瑠夏しかいらない。」

「劉生……………」

瑠夏は溢れる涙のまま、劉生に抱きついた。

「私は……………生きられないかもしれないに……………。」

「瑠夏つ。そんなこと、口にしちゃだめだ。瑠夏はぜったい、そんなことにならない。」

瑠夏の不安がなくなるようにと、きつく抱きしめた。

自分のぬくもりを瑠夏に感じて欲しい。

「俺が、今、抱きしめてるのは、間違いなく瑠夏だろう？俺が感じてる瑠夏のぬくもりは、今も、これから先もずっと、俺の腕の中にある続ける。」

「劉生……………」

瑠夏の嗚咽が聞こえなくなるまで、劉生は瑠夏を抱きしめていた。片方の腕を瑠夏の腰に回し、もう片方の腕で瑠夏の背中をさすった。

窓の外には、絶え間なく雪が降っていた。

この雪が、そして聖夜が、瑠夏の不安を消してくれるようにと劉生は強く祈った。

「瑠夏、プレゼントがあるんだ。」

劉生は、泣きはらした瑠夏の顔を覗きこみ、明るく笑った。

「ほんと？」

瑠夏もつられて微笑んだ。

劉生は、瑠夏の手を引いてソファに座らせると、持ってきたデイベックから、ラメの入った緑と赤のリボンのついた細長い箱を取り出した。

「これ、気にいってくれるといいけど。」

「ありがとう。」

はにかむ笑顔の瑠夏に劉生の胸は高鳴る。

「開けてみても、いい？」

「うん。」

瑠夏は、ゆっくりとプレゼントの包装を解いた。

白い光沢のある箱を開けると、しおりが入っていた。

「これ、四つ葉のクローバーの押し花？」

箱からしおりを取り出して劉生に尋ねた。

「うん。」

照れたように笑う劉生に瑠夏は満面の笑みを向けた。

「これ、手づくりだよな？この四つ葉のクローバー、劉生が見つけたきたの？」

「うん。」

視線を向けた瑠夏から目をそらした。

沖縄まで行って探してきたなんて、口が裂けても言えない。

「私、ほんものを見るの、初めて。よく見つけたね。すごい。」

しおりを胸に抱えて喜ぶ瑠夏に、劉生まで嬉しくなった。

こんなに喜んでくれるなんて。

劉生は、心の中でガッツポーズをとった。

「え？なに、これ？これもプレゼント？」

瑠夏が、しおりを取り出した箱の中から、銀色に光るブレスレットを取り出した。

「これ、雪の結晶？」

ホワイトゴールドの雪の結晶にクリスタルをはめ込んだ細い鎖のブレスレット。

「きれい……」

「その石、クリスタルなんだ。健康を祈る力があるっていうから、それにしたんだけど、まさか、今日、雪が降ってくるなんて思わなかった。」

「ありがとう劉生、でも、高かったんじゃない。」

「バイトして貯めたのがあったから、それで買った。瑠夏が喜んでくれてよかった。」

「うん、すごく、うれしい。劉生、つけてくれる？」

軽く頷いて、瑠夏の細い腕にブレスレットをつけた。

瑠夏は、ぶれるレットを目の前にかざした。ホワイトゴールドとクリスタルがライトに照らされてやわらかく煌めいた。

「私もプレゼントがあるんだ。」

瑠夏はそう言うと、いったんリビングを出て、少ししてからまた戻ってきた。

緑の光沢のギフトバッグを劉生に差し出す。

「あ、ありがとう。」

瑠夏からプレゼントをもらえとは思っていなかった劉生は、照れながら受け取ると、すぐにリボンをほどいた。

中から手編みの手袋がでてきた。グレイの細かな網目の手袋は、さわり心地がよかった。

「瑠夏からプレゼントをもらえるなんて、まじでうれしいよ。これ、瑠夏が編んだの？」

「うん・・・ほんとだね。劉生にさよならをしたあの日、これを渡すつもりだったんだ。ほら、だいぶ寒くなってきたでしょ。だから、あつたかくしてほしいって思って。」

瑠夏のことを聞きながら、さっそく手袋をはめてみた。大きな劉生の手にそれはぴったりだった。

「あつたかいよ、すごく。」

「よかった、サイズ合っていて。ほんとに少し心配だったの。」

「これは、俺の一番の宝物だ。ずっと大切にする。」

照れ笑いの劉生が瑠夏に手を伸ばしてきた。

劉生に引き寄せられ、瑠夏は劉生の膝の上に乗る形で向き合った。

「ありがとう、瑠夏。」

劉生の唇が瑠夏の唇にそっと触れた。

軽くたわむれるようなキスを何度か繰り返す。

高鳴る鼓動さえ心地よく感じるふたりの甘い時を劉生はかみしめていた。

このまま、時が止まればいい。

瑠夏とふたりだけの時が。

「瑠夏……」

耳を甘くかみながら、劉生がかすれた声で囁く。

瑠夏は、ぞくぞくと震えた。甘がみされた耳がくすぐったい。

「瑠夏、好きだ。ずっと、瑠夏の傍にいたい。瑠夏が悲しい涙を流さないように。」

劉生にそう言われると、胸の中に会った不安も恐れも溶けていくようだった。

劉生のことばが、私に勇気をくれる。

年が明けたら、移植する。

避けては通れないことだから

どんなにこわくても受けなければいけないと、わかっている。

そう思っているも

やっぱり、こわかった。

ほんとは、やめてしまいたい。

でも

劉生と一緒に、未来を歩きたい

だから

不安で足がすくみなりそうだったのに

今は、頑張れる

「劉生、大好き。」

瑠夏は、劉生の首に腕を巻きつけて、そう囁いた。

携帯を買いに（前書き）

書きたい事がまとまらず、数日、書いては消し、書いては消しで、思いつきり悩んでました。更新が遅れてすみません。これからは、移植に向けての瑠夏の不安や劉生のつらさを書かなくてはいけないて……どんなことばにすれば、と、悩みが尽きません。でも、ふたりの想いを書いていこうと思いますので、読んで下さい。

携帯を買いに

12月28日

冬休み前半最後の補習が終わった。

劉生は、終了を告げるチャイムが鳴り終わると同時に席を立った。カバンを肩にひっかけると急ぎ足で教室を出た。

瑠夏は校門前で待っていると言っていた。昨日、この寒い中、外で待つのは厳禁だと口をすっぱくして何度も言ったから、ちゃんと車の中で待っていてくれるだろう。

それでも、劉生は急ぎ足で歩いた。

クリスマスの翌日から2日間、瑠夏は父方の実家に遊びに行っていた。

一緒に過ごしたクリスマスの日、瑠夏からそのことを聞いた。

2日間も瑠夏に会えないと思うと劉生の気持ちは沈んだ。

「会えないけど、毎日、電話かメールで話せるでしょ。」

瑠夏の声に、劉生はうなづいた。

「電話って、携帯でってこと？」

「そうだけど？」

何でそんなこと聞くのかって顔で瑠夏が首をかしげる。

「あゝ、俺……」

「あつ、そういえば劉生の携帯の番号もアドレスも知らないんだ、私。まだ教えてもらってない。」

「うん、そうだね。その……俺、さ。」

「ん？」

劉生は、はあっと小さく息を吐いた。

「俺、さ。携帯を持っているには持っているんだけど、使ったこと、ない。」

「は？」

「いや、だから、携帯電話って、使ったことない。」

「一度も？」

「自分のは、一度も。」

劉生が真顔で答えるのを瑠夏は目を丸くして見ていた。

今どき、携帯を使ったことのない高校生って、世の中に何%くらいいるのかな？

絶対、圧倒数、少ないよね？

あゝ、でも、一般論が通じないのが劉生のいいところかな？

これまで携帯の話題が出なかったってことも不思議なんだけど、携帯を持ってないって聞くとそれも必然かなって思えちゃう。

「でも、持つては・・・いるんだよね？」

「ああ、母さんから中学校入学の時に渡された。」

「ちゅ、中学校入学の時？高校じゃ、なく？」

「ん。俺が全く使う気配を見せないから、それからはなにも言わない。」

瑠夏は啞然とした。

ここまで筋金入りに携帯嫌い？それじゃ、携帯で話そうなんて言っても、劉生が困るだけか。

「じゃあ、家電使う？」

「家電？」

しまった。

つい、略語使っちゃった。絶対劉生には通じないよね。

「家電って、家の電話のこと。」

「ああ、でも、うち電話は1階のリビングにしかないから、なにかと面倒だよ。けっこうコール数多くしないと誰も取らないし。」

劉生が渋い顔でそう言った。

そりゃ、そうだろう。

今どき、誰でも携帯で連絡取り合ってるはずだから、家の電話なんてあまり使われないんじゃないのかな。

それにしても……

この間、劉生のお父さんに携帯から電話もらったよね。ということとは、劉生ん家、他の人は携帯を使っているはず。なのに、劉生は……

瑠夏は、盛大にため息をついた。

「だって、家電でなきゃ、劉生と話せないんでしょ？ だったら、私がかかる時間を決めるか、劉生が家電から電話くれればいいじゃない。それだと、離れている時でも話ができるよ。」

「ああ、まあ、そう……だね。」

「ほんととほさ、Wi-Fiとか使って、顔を見ながら話できるとい

いなと思ってたんだけど、そんな次元じゃないんだね、劉生は。」

「顔を見ながら電話で話できるの?」

案の定、びつくりした顔で劉生が訊ねてきた。

「まあ、今の時代は・・・ね。それもできるよ。」

「・・・・・・・・俺の携帯でも?」

「・・・・・・・・劉生の携帯を見てないから、何とも言えないけど、もし、中1の時から、携帯を変えてないってんじゃ、できないかも。」

「それ、どうやったら、わかる?」

「携帯見ればすぐわかるけど・・・・・・・・」

劉生は、舌打ちをした。

今から家に帰って確かめて、もし、そんな機能がついていなければ、明日からの2日間、瑠夏の顔を見ながら電話っていうことはできないんだ。

劉生が、残念そうにため息をつくのを見て、瑠夏は、慌てて慰めた。

「でも、でも、話ができるよ。家電でも、劉生がその気になつてくれれば、今もってる携帯でも。あっ、でも、劉生の携帯、基本料金払っているかな?」

顔は見れても話せるって、期待を持たせておいて、また落ち込ませてしまう。」

瑠夏は、言ってしまったってちょっと後悔した。

でも、家に帰ったらわかることだものね。それに、最悪、家電は使えるだろうし。こうなれば、そっこのほうで話をすすめたほうがいいかも。

「劉生……？」

俯いたまま黙っている劉生に、おずおずと声をかけた。

劉生は、ぶつぶつと独り言を言っていたが、徐おもむきに顔をあげ、瑠夏に訊いた。

「俺にも、今からでも携帯使いこなせるかな？」

劉生のことばに瑠夏は驚いた。

「どうして？今まで興味なかったんでしょ？」

「会えない時でも瑠夏と顔を見て話ができるって聞いたら、興味がわいた。てか、真剣に使えるようになりたい。」

そう言われて瑠夏は嬉しかった。

私のために慣れない携帯を使ってくれるの？

ほんとに？

「嬉しい・・・劉生。」

はにかむ笑顔に、劉生は顔を赤くした。

瑠夏に嬉しいと言われて、俄然やる気が高まった。

「瑠夏、とりあえず、瑠夏の携帯使って、携帯での通話の仕方と、メールの仕方と、それから、一応、顔を見ながらってののやり方を教えて。」

瑠夏は、通話とメールのやり方を教えた。だが、Wi-Fiやテレビ電話の機能については、劉生の機種ができるかどうかもわからないので、保留にしておいた。

劉生は、瑠夏の電話番号とアドレスをメモした紙をパスケースに慎重に挟みこんだ。

失くしたら、2日間はどうすることもでない。

その日、家に帰ると、劉生はすぐにクローゼットにしまっている携帯を取り出した。

さっそく、瑠夏の教えてもらった通りに電源を入れて、それから、瑠夏の番号を入れて通話ボタンを押した。

だが、携帯は、うんともすんとも言わない。

何度か試したが、結果は同じだった。

劉生は、がっくりと肩を落とした。

やっぱり、携帯は止められていたのだ。

考えてみれば、あたりまえか。全く使わないのに、そのまま基本料金だけを払い続けるわけがないよな。

手の中の携帯を眺めながら、何度目かのため息をついた時、ドアをノックする音が聞こえた。

「はい。」

携帯を持ったまま、ドアのほうを向くと、母の静香が顔を覗かせた。

「劉生、おじいちゃんからの伝言があるんだけど。あら？携帯、使うの？」

劉生が手にした携帯を見ながら静香が訊いた。

「あ、うん。ちょっと使ってみようかと思って。」

使おうと思った理由を聞かれたらたまらない。

劉生は、適当に口を濁して携帯を箱にしまおうとした。

「あら、めずらしい。でも、ごめんなさい。その携帯、止めてあるのよ。劉生は使わないのだと思って。劉生が使おうと言ったら、明日、手続きしてきましょうか？」

「ほんと？頼むよ、かあさん。」

滅多に頼みごとをしない劉生がそういうのを聞いて、静香は面食らったが、なにも言わずに頷いた。

「で、じいさんからの伝言って？」

「ああ、瑠夏ちゃんが退院したら、私のことは忘れてしまったのかって。淋しがつてたわよ、おじいちゃん。ここしばらく劉生が顔を見せないって。」

「明日、補習が終わってから行くって、言っというて。」

「わかった。じゃあ、午前中には通話できるようにしておくから。でも、劉生、その携帯、だいぶ型が古いけど、それでいいの？」

携帯の型の新旧なんて、正直、どうでもよかったのだが、顔を見ながらやってやつとメールができないと困る。この携帯でそれができるかは、訊いとこう。

「かあさん、これでメールとか、顔を見ながら話すってこと、できる？」

自分の携帯を静かに差し出すと、静香はそれを受け取って調べた。

「これでは、メールはできるけど。顔を見ながらって、テレビ電話とかインターネット通話ができるとかってことを言ってるのよね？」

か、かあさんのほうが、携帯の機能について詳しい。なんだ、そのインターネット通話ってやつは。瑠夏からも聞いたことないけど。

劉生が戸惑っているのを見て、静香は苦笑した。

この子は、ほんとに。

劉生が、どれだけ人とつかがるための機器に無関心だったのか、わかる気がした。

その劉生が、自分からその機器を使いたいと言ってきたのだ。

静香は、夫さえも一目置いている瑠夏という子に会ってみたいと思っただ。

「劉生、その携帯では古すぎて。何なら携帯を買い替えたなら？あなたに顔を見ながら話ができる機能を教えてくれた子なら、きつと一緒に選んでくれると思うわ。その子に頼んでみたら？どの携帯がいいか一緒に選んでくれて。」

劉生は、ひつたくるように静香から携帯を取ると、くるりと背を向けてしまった。背中を向けた劉生の耳は、真っ赤になっている。

この子だったら、瑠夏ちゃんのことを指摘されたと思って、恥ずかしがってるんだわ。

静香は、思わず笑みを浮かべた。

声を出したら、ますます意固地になりそう。

静香は肩をすくめて、部屋を出た。出る前に、劉生に一声かけた。

「明日、携帯が使えるようになったら、メールで知らせるから。じや、早くお風呂入ってしまったてね。」

ばたん

ドアが閉まって、階段を下りる音が聞こえた。

劉生は、ほうっと、大きく息を吐いた。

携帯ひとつ使えるようになるのに、こんなに手間取るなんて。

こんなことなら、もらった時からバンバン使っていればよかった。

結局、その日は瑠夏に連絡をすることはできなかった。

明日は、朝早くから出かけるって言うてたからな。

とにかく、携帯が使えるようにならないければ、瑠夏には連絡が取れない。

劉生は、便利なんだか、不便なんだかよくわからない携帯を手に持ってベッドに仰向けになった。

「この小さな携帯が、いつでもどこでも、瑠夏と繋がることができるとだ。便利といえば便利だよな。だけど、使いこなせるようになるには、訓練が必要なんだ。それは、不便といえば不便なんだけど。」

黒い携帯を眺めながら、そう呟いた。

翌日

補習中に、カバンに入れた携帯が大きなコール音を発して、劉生は、こっぴどく注意された。

放課後以外、携帯禁止なんてきまり、はじめて聞いた。

そんなきまりもあつたんだ。

劉生は、補習担当の教師に携帯を取り上げられ、放課後、職員室に取りに行く羽目になった。

あんなに説教されたのに、取りに行った時に、また、説教された。

一度言えばわかるつつうの。

いいかげん、うんざりしてそう思ったが、表面上は神妙に聞いていた。これ以上、反抗的な態度をとって、足止めを食らうのはごめんだ。

携帯が戻って、取り上げられたことを瑠夏に話すと、瑠夏は、受話器の向こうで大笑いしていた。

『りゅ、劉生ってば、もしかしなくてもサイレントの機能もバイブ機能も知らない?』

なんだ？そのサイレントだのバイブだのってのは？

なかなか笑い止まない瑠夏にムツとして、劉生は携帯を握りしめたまま、黙っていた。

沈黙が続いていることに瑠夏は、笑いを止めた。

『ごめん、劉生、劉生は携帯初心者なのに、笑っちゃって。』

「いいよ、俺がなにも知らないのはほんとのことだし。」

『だいじょうぶ。劉生なら、すぐに使いこなせるようになるって。私がつちりと教えてあげるから。』

「うん、頼む。」

『まかせて。教えたら、顔を見ながら話そうね。』

瑠夏のことばに、劉生は困ってしまった。

かあさんの話だと、俺の携帯では顔を見ながらするのはできないんだよな。

「瑠夏・・・頼みがあるんだけど。」

『なに？』

「あのさ、俺、その顔を見ながら話すために携帯を変えようと思うんだ。だけど、どれがいいのかなんて、さっぱりわかんないから、買うのつき合ってくれる？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

すぐには返事がなかった。

やっぱり、そんなこと頼むの、ずうずうしかったかな？

「や、瑠夏、い。」

『明日、返事する。ごめんね。すぐにはウンって言えなくて。お母さんに携帯ショップに行っていていいか聞いてみるね。』

「あっ・・・・・・・・」

劉生は、心の中で舌打ちした。

そうだった。

瑠夏は、簡単に外を出歩いてはいけなかった。暮れの街なんて人ゴミ、瑠夏の体には悪いに決まっている。

「瑠夏、ごめん。いいよ。」

慌てて断ろうとすると、受話器の向こうから瑠夏の怒った声が聞こえた。

『どろしてすぐ、そう言うの？私は、明日まで返事を待って言ったのよ？好きな人の買物に付き合いたって思っている私の気持ち、劉生にはわからないんだ。』

っ！

瑠夏の声が震えていた。

いろんな制限があつて、もどかしい思いをしているのは瑠夏自身なのに。俺は、瑠夏の気持ちも考えずに……

ばかだ、俺。

「瑠夏……ごめん。俺……」

『いい、謝らなくて。私がこんな、』

「俺、待つから。明日、瑠夏の返事、楽しみにしてる。」

瑠夏に、自分を否定することは言つて欲しくなかった。ちゃんとわかつているつもりだったのに。上辺だけだったんだと、自分で自分を殴りたくなった。

「瑠夏、聞ってる？明日、瑠夏の返事、待ってるから。」

『………うん。』

わずかに耳に届くくらいの声だったが、瑠夏の返事が聞こえて、ほっとした。

「ほんと、楽しみにしてるから。」

『………劉生、』

「ん？」

『ありがとう。』

お礼なんか言われること、何にも言っていないのに。

瑠夏にそう言わせた自分に、腹が立った。

二度と、瑠夏にこんな思いなんかさせない。

つぎに失態や失言をしたら、俺は、まじで自分をぶん殴ろうと心に誓った。

携帯で話した翌日。

瑠夏から、30分程度ならいいと、本橋さんに許可をもらったことがメールで届いた。

わずかな時間だが、瑠夏とふたりきりで買い物できる。

嬉しくて、学校の中庭でガッツポーズをとってしまった。

そして、補習最終日、劉生は、逸る心を抑えながら校門を目指して急いでいた。

思いがけない助っ人

生徒玄関を出ようとした時に、後ろから何度も呼ばれた。さすがに無視をするわけにもいかず、舌打ちしながら劉生はふり向いた。

この子、この間一緒に問題を解いた子？俺に何の用？まさか、また解けない問題があるって言い出すんじゃないだろうな。

今日は、まじで時間がない。溜夏を待たすわけにはいかないから、解けない問題は他の誰かか先生に聞くように言おう。

「あの、」

「石田君、話があるの。」

真っ赤になって、きゅっと唇をかみしめながら自分の見上げる女の子にことばを遮られた。

「なに？」

肩を震わせ、今にも泣きそうな子に、急ぐからとも言えず劉生は、次のことばを待った。

「こ、こごじゃ、言いにくいから、ひっ、人目のつかないところで話したい。」

劉生は、あからさまに嫌な顔をした。

冗談だろ。時間がない時に限って。

「どうしてもっ、どうしても、聞いて欲しい、から、お願いっ。」

劉生のコートの袖を掴み、余裕のない表情で懇願するその子を邪険にはできなかった。

劉生は、小さく嘆息すると、慣れない携帯で瑠夏に連絡を取った。

「ごめん、少し遅れる。ちゃんと車の中で待ってて。」

『……なんかあったの？』

「いや、ちょっと、野暮用。すぐ行くから。」

それだけ言うと、携帯を切った。

瑠夏が、生徒玄関の外からこちらを見ていたことには、全く気がつかなかった。

「……教室に戻るんでいいか？」

ぶっきらぼうにそう言うと、劉生は答えを待たずに今来た道を戻った。彼女も後からついてくる。

まったく、何の用があるんだ？正直、迷惑なんだけど。

誰もいない教室の明かりをつけて、劉生は彼女を向きあった。

「で、話って？」

早く終わらせたい一心で、つっけんどんに訊いた。

「あの、えっと、まずは、お礼を・・・」

「お礼？君にお礼を言われることなにもないけど？」

怪訝な声で訊き返した。

「あるよっ。ふたっ。」

劉生は無言で促した。

「ひとつめは、この間、問題を一緒に解いてくれたことで、もうひとつは、ずっと前、ガラの悪い人たちに絡まれていたのを助けてくれたこと。」

ひとつめは、わかるとして、もうひとつは、とんと覚えが、ない。

それに、そんなくだらないことで時間を使うつもりはない。

「どっちも、別にたいしたことしてないし。礼を言われることじゃない。気にしなくていいから。」

それだけ言うと、教室を出ようとした。

「待って、それだけじゃ、ない。」

必死に呼びとめる声も、今の劉生にはうざかった。

「まだなんか、あんの？」

自然にことばが険呑とする。

「あ、あの、ね。…………。その、わたし…………。」

「石田君、緊急事態。すぐに来て。」

いきなりドアが開いて、別の子が入ってきた。間髪いれずに劉生の手首を掴むと、教室から連れ出した。

高遠、さん？

自分の手首を掴んだ子を見て劉生は目を丸くした。

抵抗する間もなく、悠に手首を引かれるまま、教室から出た。

「ちょっと、待って。」

悠はそう言つと、教室の中に顔だけ入れた。

「ごめんね。石田君、すぐ連れて来いって、鬼の形相で頼まれたんだ。じゃね。」

悠は、教室の中にいる子にそう言つと、啞然としている劉生の手首を再び掴んで正門へと向かった。

劉生は、あまりにも唐突な出来事に思考回路をフリーズさせていた。

さっきの子の話もよくわからないけど、高遠さんの言ってること

は、もっとわからない。いったい、今日はどうしちゃったんだ。瑠夏のもとに行くのをなんでこんなに邪魔されるんだ？

劉生は、次第に腹が立ってきた。

掴まれた手首を引き抜いて自由にすると、悠に文句を言った。

「高遠さん、俺をどこに連れていく気だ？はつきり言って迷惑なんだけど。」

玄関を出たところで止まって悠を睨んだ。

「あのね、めいーわくしてるのは、こっち！なにを悠長に教室に引き返しちやってんの？」

「高遠さんには関係ないだろ。」

「ところがどっこい、おゝあり！石田君があの子と教室に引き返すのを見て、瑠夏がシヨックを受けちゃったんだからねっ。なによ、野暮用って？」

「えっ？」

どうして、高遠さんの口から瑠夏の名前が出るんだ？

それより、俺とあの子が話してるとこ、瑠夏が見てたって？まさか、瑠夏は、車で待ってるはずじゃ……

「る、瑠夏は？今は車にいるの？」

劉生は、慌ててあたりを見回した。

「とにかく落ち着かせて車に乗せた。でも、待つてはいないかもね。もしそうでも、自業自得だからね、石田君。」

「俺とあの子のこと見てたつて、誤解だつ。なにもないのに、なんで、瑠夏がショック受けるんだ。」

「そんなこと、私にきかれてもわかるわけない。とにかく早く瑠夏のところに行つて。」

悠に促されて、劉生は正門へと急いだ。

瑠夏、違う。俺は、あの子とはなんでもない。

全速力で走つて校門を出ると、路肩に白いセダンが停まっていた。

すぐに後部席に目をやった。

俯いて座っている瑠夏を見て、劉生はほっとした。

「瑠夏つ。」

劉生は、車窓をたたいた。

はっと、瑠夏が顔をあげた。劉生を見て苦しそうに顔を歪める。

劉生は、ドアを開け後部座席に乗り込んだ。

瑠夏の頬が赤いのを見て顔をしかめる。

「瑠夏、また外で待ってたんだ。体に悪いからだめだって言ったのに。」

「………言いたいことは、それだけ？」

頬を包み込んでいた劉生の手を払いのけた。

「それだけって、あっ、誤解だからな。野暮用ってのは、ほんとしようもない用のことで、瑠夏が気にするようなことじゃ、ない。」

「私が待ってるのに、あの子の用を優先させた。」

納得できなと瑠夏は首を振った。

「あ、あの子が、切羽詰まった顔をしてお願いするから、しかたなく……」

「切羽詰まってたから、告白されてもいいって思ったわけ？」

「こっ、告白っ？ちがつ、そんなんじゃ、なかったよ。」

俺が告白なんかされるわけなのに、瑠夏はなにを言い出すんだ。

「うそっ、あの子、ぜったいに劉生のこと好きだもん。」

「んなわけ、ないって。瑠夏の思い過ごしだよ。」

瑠夏がやきもちを焼いてくれるのがわかって、劉生は嬉しかった。だけど、今は、瑠夏の気持ちをおさめるほうが先。

せつかくの、ふたりだけの買い物に、これ以上ちゃちゃは入れたくない。

「劉生は、」

一向に終わりそうもないふたりの押し問答に、助手席に乗り込んできた悠が割り込んできた。

「あゝ、瑠夏、お取り込み中、悪いんだけど、劉生、告られてなんかないから。」

なにせ、寸前で私が止めた。とは、言わなかった。

それを言ったら、瑠夏はおさまらないだろう。自分を待たせて劉生があの子と一緒にいったことがよほどショックだったようだから。

こんな、朴念仁で不器用なやつに、そんな計算できるわけないって。それに、彼女が思うほど、彼氏はもてないって、世間ではよく言うのにな。

「ほんと・・・?」

「ほんと。私が保証する。ふたりが教室に入ってから、私が連れ出すまでの間、ずっと聞き耳立ててたから。それに、石田君に近づかれたら、恐怖のあまり気絶する子はいても、告るなんて奇特な子はいないって。」

「瑠夏、ほんとだよ。あの子には、ただ、わからなかった問題を解いたことと、ガラの悪いやつらに絡まれてたのを助けたことのお礼

を言われたただけだから。って、高遠さんっ、それって、言い過ぎだろ。」

悠のことばに劉生は真剣に反論した。

「や、だって、私だってね、この間、突然、石田君に声をかけられた時は、もう、怖くて、驚いて、度肝抜かれちゃって、足はがくがく、心臓はバクバクで、言葉ひとつまともに言えなかった。」

「……この間も、今みたいに意味不明の弾丸トークしてたと思うけど？おかげで、しおりひとつ作るのにどれだけ時間かかったんだか。」

「弾丸トークって、失礼なっ。私はコメディアンじゃないし、黒徹さんでもないんだからっ。」

ぷっ

ふたりの顔を見比べながら話を聞いていた瑠夏は、とうとう吹き出した。なんだか、無駄に不安になっていたんだなって、実感した。

瑠夏は、やっと安心したように息を吐いた。

「まあ、瑠夏、これから学校では、悪い虫がつかないように私が見はっというてあげるから。」

悠がどんと胸をたたいた。

「うん、お願い。」

笑いながら瑠夏が頷く。

「だけどさ、瑠夏と石田君って、やっぱり、面白過ぎる組み合わせだよ。目の前で見ててもまだ信じられない。」

「悠に劉生のいいところわかってもらわなくてもいいし。」

口をとがらせる瑠夏に悠は、はあっと大きく息を吐いた。

「いや、好みじゃないから、石田君。」

「ふふん、悠の好みは、渋谷君だもんね。」

「る、瑠夏っ！」

劉生は、茫然とふたりのやり取りを見ていた。

瑠夏と高遠さん、仲が良かったんだ？どこに接点が？

ぼかんと口を開けている劉生に、瑠夏がこほんと咳払いをした。

「劉生、病院で親友になった悠。劉生と同級なんだってね。」

「というわけなので、よろしくね、石田君。」

ペロツと舌を出して親指を立てる悠。

「はあ。」

俺と瑠夏より、ふたりが親友だったことのほうがよっぽどびっく

りなんだけど。

「また、今日みたいなことがあったら、助けてあげるから。その代わり、私も助けてもらう。数学と化学、もう神頼みしなきゃいけないくらい、やばいから、石田君、神になって。」

神って、両手を合わせて拜まれても……

「ギブ&テイクの助っ人、ね。ありがたく。」

ほんとにギブ&テイクになるか？俺のほづが分が悪い気がするけど……

苦笑する劉生に悠はにかつと笑った。

「やっと、トラブルが解決したみたいね。もう、携帯ショップに行ってもいいかしら？」

それまで黙って3人のやり取りを聞いていた啓子が口を開いた。

「あ、はい。」「うん。」「どうぞ」

三人三様の返事をする、車は静かに走り出した。

「私は、最寄りの駅で降りしてもらおう。ふたりの邪魔なんかしないから安心して。」

後部座席の劉生に、前を見たまま悠は手を振った。

「あ、ああ。」

気まずい気持ちで、もごもごと返事をした。

瑠夏と悠がこんなに親しいなんて驚きだけど、同性の友だちがいるのは、瑠夏にとってはいいことだよな。女の子同士での話っても必要なことあるんだろうから。

それに、悠にはこれからほんとに助けられることになる。

瑠夏との切れそうになる絆を繋ぎ止めるために、悠はほんとに頑張ってくれたんだ。

でも、それは、ずっと後になって、気づくこと。

想うのは、おまえだけ

携帯電話つてのが、こんなに便利なものだなんて知らなかった。誰かに気兼ねすることなく、自分の好きな場所で、好きな時に、話したい相手と繋がることができるんだ。それも、顔を見ながら話せるなんて。

もっと早くから持っていればよかった。

買ったばかりの携帯で、その日の夜、瑠夏とおしゃべりを楽しんだ後に劉生は心からそう思った。

だが、今、使えるようになった携帯は、劉生にとって力強い味方だった。

これがあれば、離れていても瑠夏と繋がれる。

今の俺にはありがたい。

明日から正月明けの2日まで、劉生は興生のお供で田舎に行くことになっている。

毎年、石田家の誰かがお供をして行っていたこの年中行事は、他の誰も都合がつかないということで、劉生に白羽の矢が立った。

劉生が行くことは、すでに1か月以上も前から決まったこと。

病院でも、折に触れ田舎のことは話題に上り、興生がどれだけ首を長くして待っていたか、劉生はよくわかっていた。

このために一時退院を許可された興生が張り切っているから、今さら自分に行けないとは言えない。

じいさんには、これまでにでっかい借りがあるからな。今回ばかりは、こっちが優先。

やっと瑠夏が田舎から戻ってきたのに、今度は自分が田舎に行く羽目になるなんて、と、苛立つ気持ちがちよつとはあつただけど、それをじいさんに見せる気はない。

「明日、朝、7時出発だからな。今日は、早く眠っておけよ。」

劉生の部屋を覗いて興生が言った。

「わかってるって。行きは樹希たつきが送ってくれるんだろ。」

手に持っていた携帯を充電するための準備しながら返事した。

「その携帯に、私の番号、入れてあるか？」

「ああ、かあさんに、必要だからって、家族全員の番号を無理やり入れさせられた。」

「そうか。いやしかし、劉生が携帯を持つなんてな。」

含みのある笑いをする興生をスル　することに決め、劉生はクロゼットを開けた。

「じいさんも早く寝たほうがいいよ。俺は、これから準備をするか

挑発に乗らない劉生を見て、興生もそれ以上何もいわなかった。

ぱたん、とドアの閉まる音が聞こえた。

劉生は、服を取り出す手を止め、ほうつと息をはくと、ベッドに仰向けになった。

瑠夏は、今、なにをしてるのだろうか？

携帯を切った時は、これから風呂に入って、ゆっくり体を休めると言っていた。

今日は、30分とはいえ、人ごみの中にいた。

瑠夏の体には、たとえ30分でも、かなり負担になったに違いない。

瑠夏の疲労が濃くなるのは嫌だった。

帰り際、少し青い顔をした瑠夏の顔を見て、俺のわがままにつき合わせてしまったと、少し、後悔した。

それでも

あの30分間は、心が弾む時間だった。

俺のために、使い勝手のいい機種を選ぼうと、いっしょうけんめいだった。

白く細い手が、携帯を巧みに操っていた。

長いまつ毛に縁取られた瞳が、一心に、俺の携帯を選んでいた。

俺が、ひととおり使い方を覚えたのがわかると、満面に笑みを浮かべて、よかったねと、言ってくれた。

「これで、いつでも劉生と話せる。」

そう言うてはにかんだ瑠夏の顔が、鮮やかに蘇る。

向こうについたら、たくさん写メを撮って、瑠夏に見せよう。何にもないただの田舎だけど、澄んだ空気と深い緑が鮮やかな山間の風景は、けっこういいロケーションだ。

あれだけ澄んだ空気だと、瑠夏もマスクなしでいられるんじゃないだろうか。少しでも制限のなど考えずゆったりと過ごせたら、瑠夏の気持ちもほぐれるのに。

想うのは、いつも瑠夏のことばかり。

頭に浮かぶのは、ただひとりだけ。

それでも足りない。

想うだけじゃ、頭に浮かべるだけでは、もう、満足できない自分がいる。

傍にいてほしい。

瑠夏の匂いに包まれていたい。

瑠夏の息づかいを感じたい。

ずっと、抱きしめていたい。

俺の大切な、誰よりも大切な瑠夏。

だから、

ひとりで耐えて欲しくない。

瑠夏の苦しみや不安を俺に分けて欲しい。

いや、分けるんじゃない。ぜんぶ、俺が引き受けたい。

守ってやりたいのに、俺に出来ることがあまりにも少なく、腹立たしくなる。

瑠夏が、諦めていた俺との未来に希望を持ってくれるなら、俺は、俺にできるすべてのことをしよう。

瑠夏のために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2819w/>

五つ葉のクローバー

2011年10月7日14時13分発行